
A new adventure and bonds

夕陽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

A new adventure and bonds

【Nコード】

N8579X

【作者名】

夕陽

【あらすじ】

あの、藍染たちとの戦いから約50年。

死神にとっては短く。人間にとっては長い時間がたった。

現世組は皆、尸魂界へ。そして、尸魂界で、一護たちは…。

一護をはじめとする、石田、井上、茶渡。そして、遊子、夏梨。たつきに啓吾、水色を取り巻く死神ストーリーが今、始まる！

同窓会？（前書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しく願います。

同窓会？

新たな冒険

新たな絆

*

*

*

*

あの、だれもが震え上がった、藍染との戦いから約50年。

死神にとっては短い時間。人間にとっては長い時間。

そのため、現世組の死神代行 黒崎一護、滅却師クインシーの石田雨竜、人間いしだうりゅうのだが、一護といることで才能を開花させた、井上織姫いのうえおりひめ、泰虎すしこ、茶渡

そして、一護が、藍染と戦っている時、目が覚め霊力があると分かった、有沢竜貴ありさわたつき、浅野啓吾あさのけいご、小島水色こじまみずいろ。

あと、黒崎家の遊子に夏梨の9人はもちろん死んだ。

ちなみにもともと死神だった一心は、一番最後に死んだ夏梨に付き添い戸魂界ソウルソサエティに、一緒に行った。

遊子を抜いた残りの8人は、「死んだら戸魂界に行く」ということを知っていたので無事に戸魂界にたどり着きそれぞれ流魂街に振り分けられた。

一護、遊子、そして水色は西流魂街1地区「潤林安」。
石田、チャド、井上は南流魂街78地区「戌吊」イヌツリ。残りのたつき（

これからは「たつき」と書く)、啓吾、夏梨、一心は北流魂街80地区「更木^{ザラキ}」に。

みんなばらだがある程度固まってる。

南流魂街78地区に送られた、石田達。そして最も治安が悪いとされている北流魂街に振り分けられた、夏梨たち。

振り分けられた所はばらであるが、皆それぞれどこにいるのかはわかっていた。

(簡単に言えば、最後に死んだ夏梨とともに尸魂界に行き、偶然同じところに振り分けられた一心は、縛道の77天挺空羅^{てんていくわら}でみんなに呼びかけた、ため。)

そこである日みんなは一護のいる西流魂街1地区に集まった。

*

*

*

*

「よう。みんなは久しぶり」

「ひさしぶりー。黒崎君！」

「いっちょー！！会いたかったよー。」

「おーす。啓吾ーお前変わってないな。」

「一護！うで、うで！息が…。」

「おーわりーな啓吾」

「大丈夫ですか？浅野さん。」

「えっなに？なぜに水色、敬gブギヤっ！！。」

「うるさい。もーだまれ！」

「わーあ。たつきちゃん。死んじゃうよー。」

「何言ってんの織姫。もう私たち死んでるのよ！」

「アーそうだった。」

「いち兄！遊子！」

「夏梨ちゃん！お父さん！」

「いちご。ゆず。あいたかったぞー。」

「キモイ！もうこれ以上しゃべるな！」

「ナイス！夏梨！」

「ム。」

「あー。君たち久しぶりの再会のところ悪いんだが、少し黙ってくれないか？」

「……。」

「わりー。石田。」

「分かればいい。」

「ンじゃ。えーと……。」

「……。まさかと思うが黒崎。何の用もなしに僕たちをここへ招いたのか？」

石田が、……。ここまで来るの結構大変なんだぞ……。とつぶやき、一護に怨むような視線をぶつけた。

「……。途中で切るな！そんなわけねーよ。」

「えー。ゴホン。ンじゃみんなにいくつか質問するぞ。」

「まず、一つ。みんなはいつごろ死んだ？」

「はいはい。」

井上が手を挙げた。

「ンじゃ井上」

「ゴホン。私は、35歳の時に病気で死んじやったんだ……。」

「確かそんぐらいの時、織姫、ガンで倒れたね……。」

「そうか。じゃ次。たつき。」

「えっ。あたし。あたしは交通事故。」

「何歳ぐらい？」

「うーん。3……7、8歳かな？」

「そうか。次は……啓吾」

「おれっ。俺も交通事故つか、有沢が死んだ交通事故と同じなんだ

よー。」

「えっうそ！そーいえばあれ3台いつきに事故ったんだっけ。…。
てことはあんた…、信号無視したほう？」

たつきは、不敵な笑みを啓吾に向けた。

「へっ…ち、ちがうよ！それもう1台のほう。」

「ほんとーお？」

「ほんと！ほんとにほんとですから！」

「…。あっそう。」

「ふ〜。」

（苦労してるな。啓吾）

一護は心の中でこっそり思った。

「…。じゃ次。水色。」

「ん。僕は、27歳ぐらいに海に行つて、溺死。」

「むごいな」

夏梨がつぶやいた。

「ははっ…。じゃ次、石田」

「ン。僕か。僕はな。やっぱやめた。」

「…「おい。やめんなよ。」「」」

一護、啓吾そしてたつきが突っ込んだ。

「いやー。」

「ごまかすな。」

「厳しいな黒崎。」

「厳しくない。第一みんな答えてるんだから、お前も答えろ。」

「…。」

「あつ。もしかしてすんごく恥ずかしい死に方だったりして。」

夏梨が言った。

「…。」

石田は顔には出していないが、内心めちゃくちゃ焦っていた。

（なんでわかつたんだ。）

「凶星か。」

「…。そういう黒崎は、どうして死んだんだ？」

「俺か。俺はっ、ていうか俺たちは、親父が車を運転してる時に、相手の車が突っ込んできた。交通事故。その事故で死んだのが、俺と遊子。」

「そうか。でも君が死んだらすぐに朽木さんとか阿散井君とか来るんじゃないか？」

「もちろん来たぜ。まあ。来たって言っても俺たちが流魂街に振り分けられる場所にな。」

「何故だ。君がきたなら即刻死神にすればいいものを。」

「ああ。ルキアがすぐにでも俺を死神にしようとしてたな。」

「じゃあなんで。」

「俺が断ったんだ。俺が死んだのは、大学を卒業した最初の夏。遊子は大学生の夏だ。もちろんまだ誰も死んでないから知り合いは誰もいない。だからみんなが来るのを待ってたんだよ。なあ。遊子。」

「うん。」

「そうかまあ分かった。ところでなぜ夏梨ちゃんは何故死んだんだ？見た目はずいぶん若いが。」

「あー。私が死んだのは一兄たちが死んだ10年後。つまりあたしの年は30歳。o , k ? ンで、死因は、ひかれそうになっていた親子を助けて死んだ。」

「ああ。そうか。一つだけ聞いていいかい？」

「うん。」

夏梨が答えた。

「後悔してないか？」

「もち！」

夏梨は飛び切りの笑顔で答えた。

「そうかい。」

石田は安心したような声を出した。

「おーい。もういーかい。」

一護が少し大きめの声を出した。

「ああ。もちろん。」

石田は答えた。

「ンじゃ最後にチャド。」

「ム。俺は、……。上から鉄骨が降ってきて死んだ。」

「ン？前にもこんなことなかったか？。」

一護が水色に聞いた。

「あー。うん、あったね。」

「だよな」

「うん」

「…。ちよつと二人とも何話してるの？ねえなに？なんなのー？」

「なんですか。浅野さん。」

「はっ。水色が敬gブギヤ」

「だ・ま・れ」

たつきが、啓吾の腹を踏んだ。

（あははは。さつきもあつたなこの光景。）

井上は内心苦笑した。

「は…い」

啓吾はのどから搾りだいたような声を出した。

「ねーインコの兄ちゃん。」

夏梨がチャドに聞いた。

「インコの兄ちゃんじゃない。茶渡泰虎だ。」

「あっそう。まあそれは置いといて。…。さつき自分の死に方のこと話してるとき細かいことハシヨツただろ。」

「ム。」

（やっと気づいたか）

チャドは思った。

「ム。じゃなくて！ちゃんと答えなよ！えーとなんだっけ。さ、」

「違うぞ夏梨！茶渡兄じゃなく、チャド兄だ！。」

一心がここぞとばかり胸を張って夏梨に言った。

「だまれ親父。」

夏梨が睨んだ。

「はい。」

「んじゃ。チャド兄はどうして死んだの？」

夏梨が改めて聞いた。

「ム。俺は、ビル建設現場の道をとってたら、ベビーカーを押しながら歩いてる婦人の上に鉄骨が降ってきた。それを俺はかばって死んだ」

「ふーん。あたしと同じじゃん。」

「でもよーチャドー。お前高校のときは、上から鉄骨が降ってきても生きてたじゃん。」

一護が聞いた。

「打ち所が悪かったようだ。」

「…。そうか。」

同窓会？（後書き）

初めて投稿します。夕陽です。宜しく願います。
誤文字などの指摘がありましたら報告願います。
感想お待ちしております。

死神にならないか？（前書き）

第2話、どうぞ！。

死神にならないか？

私たちの運命は

もう一度交わることができるのだろうか？

*

*

*

*

尸魂界。

十三番隊隊舎。

「その話は本当ですか。浮竹隊長！。」
「本当だ。」

ルキアは浮竹の答えを聞き、驚いたような表情をしていた。

「そうですか。私が…。」

「いやなら行かなくていいんだぞ。」

「…。いや。行きます。やはりこのことは私が適任だと思いますので。」

「ああ。先生もそうおっしゃっていた。でも一人で行くのか？。」

「ええ。そうですね。でもそうしたら誰を誘おうか…。」

「ああ。そうだな。3番隊の阿散井君なんてどうだ。」

「ええ。それは私も考えたのですが。恋次は、何せ隊長の身ですので。仕事が忙しいかなーと。」

「ああそうか。じゃあ…。そうだな日番谷隊長とかは？特に一護君の妹の夏梨ちゃんだっけ？。」

「はい。」

「喜びそうじゃない。」

「ええ。でも日番谷隊長はちょっと今は、手が離せないそうなので。」

「…。そうか。じゃあやっぱし一人で行くのか?。」

「はい!。」

ルキアは気合が入った声で答えた。

「そうか。まあそんなに難しくはないだろう。もう少ししたらあっちから来そうだけだな。」

「そうですね。」

ルキアは苦笑した。

「それじゃ。行ってきます。」

「おう。」

ルキアは瞬歩で、その場から消えた。

「楽しみかなあ。朽木は。」

浮竹は、ふふつと微笑みながらつぶやいた。

「さあ!今日もしごと。ばた。」

「キヤー! 浮竹隊長大丈夫ですか?!」

近くで隊長のことを見ていた清音が叫んだ。

(ああ。今日も布団かな。)

浮竹は他人事のように思っていた。

*

*

*

*

西流魂街1地区

「…。結局みんな寿命で死んだんじゃないんだね。」

遊子が言った。

「そうだな。まあそうじゃなきゃみんなこんなに若いわけないしな。」

「一護が苦笑しながら言った。

「ところで黒崎。ほかに僕たちに質問はないのかい?。」

「…。」

「お兄ちゃん?。」

「ン。あーあるぜ。もう行っちゃえばぶっちゃけこれ最後の質問だぜ。」

「……………(ゴク)……………」

一護以外のみんながつばを飲み込んだ。

「みんな……。死神になる気はないか?」

「えっ。」

声を出したのは…夏梨だ。

「それ本気?一兄。」

「本気だぜ。」

「みんな多少は霊力があるだろ。」

「うん。まあ。」

答えたのはたつきだ。

「だから誘ってんだ。死神にならないかって。」

「……………。」

みんなは黙りこくった。まあ当然だな。一護はそう思った。

「それほんと!一兄!!」

ゆうついっ夏梨だけが目を輝かせ一護に聞いた。そんな夏梨の態度に驚いたのか、一護は一瞬言葉を失った。

「ああ。まあな。」

「あたし絶対なるよ一兄!。」

「そ、そうか。」

「みんなは?。」

夏梨は生き生きとしてさつきから黙っているみんなに聞いた。

「私はなってもいいよ。」

井上だ。ひじを曲げる程度に手を挙げながら言った。

「あたしもなつていいよ！ていうか、私はバリバリなる気満々だったけどな。」

たつきが意気揚揚に答えた。

「はい俺も俺も。」

「僕も。」

「ム。俺も。」

「わ、私も。」

上から啓吾、水色、チャド、遊子の順だ。

「そうか。」

一護は内心胸をなでおろした。みんなの反応は少し予想外だったからだ。

「残りは…石田だけだな。」

みんなは石田を見た。石田はうつむいていたが、急に顔をあげた。

「はあ。君たちなんだい。人の顔をじろじろ見て。僕の顔に何かついてるのか？。」

「ン。いやお前はどうか…。死神になるかどうか。」

「僕は、滅却師だ。^{クインシー}でもまあいい。いいよ暇だから。死神になってあげても。」

（めちやくちゃ上から目線だ）

一護たちは心の中で思った。

「そうか。じゃみんなで死神になるぞー。」

「何そのやる気のない声は。」

たつきが言った。

「ねえ黒崎君。死神になるには、死神の学校に行かなくちゃいけないんじゃないの？。」

井上が一護に聞いた。

「えっそうなの？。」

啓吾も、一護に問いかけた。

「ああ。そうだ。」

「えっじゃあ、試験とかはあるの。」

「…。じゃあ、それはそこにいる人に説明してもらおうか。」

「護は家の裏を指しながら言った。」

「へっ。そこに誰がいるの?。」

井上が変な声を上げた。

(馬鹿な。一護に私の霊圧がわかるはずが…。)

「いいから出てきなよ。」

「護が呆れていった。」

「出てこないなら迎えに行くよ。ただしあと10秒たったら。」

「10…。9…。」

(どうする出ていくか?。)

「8…。7…。6…。」

(どうする。)

「5…。4…。3…。」

(あーも考えてもらちが明かない。)

「2…。いち。ゼロ。」

シュン。

「ふー。やっと出てきたか。」

今でてきた人物を見てみんなの顔が驚きやら嬉しいやら。

「護は今出てきた人物に話しかけた。

「……。久しぶりだな……。ルキア。」

死神にならないか？（後書き）

どうでしたか？ついにルキア登場です！

誤文字のご指摘、感想お待ちしております。

静霊廷へ（前書き）

ルキア登場しました！ちなみにルキアは13番隊副隊長です。

それでは、第3話スタート！

静霊廷へ

あなたの思い

私の考え

*

*

*

*

「く、朽木さん…。」

「朽木…。」

「朽木さん。」

「朽木さん。」

「ルキ姉。」

「ルキアちゃん。」

「…。」

「朽木さん…。」

「ル、ルキアちゃん!?!?。」

上から、井上、チャド、石田、たつき、夏梨、遊子、一心、水色、
啓吾だ。

「…。」

ルキアは黙って、一護のほうを向いた。

「ン。なんだルキア?。」

ドシ ドシ ドシ ドシ

ルキアがすごい足音を立てながら一護のほうへ近づいた。
「何が…。久しぶり…。だ。」

「へっ!。」

一護は驚いて変な声を上げた。

バン!

「っ!。何すんだよ、ルキア!痛いじゃないか!。」

「当たり前だ!痛いように殴ったんだからな!。」

ルキアはまた一護を殴った。

「……………」

みんな目の前の光景に啞然とした。

「ちょっと朽木さん!やめなつて!。」

再び、ルキアが、一護のことを殴った時の音で我に帰った井上が、急いで止めた。

「と、止めるな!井上!あと一発。あと一発、殴らなければ私の気が収まらない!!。」

そう言いながらルキアは、自分の拳に、「ハア!。」と息をかけた。「なんで朽木さん、出てきてそうそう、黒崎君を殴ってんの?。」

「…。あの、一護に私の存在がばれたからだ。」

「おい!ルキア今、俺のことを「あの」って言っただろ!どういう意味だそれ!。」

「フン。そのまんまの意味だ。それ以外になにがある。」

「なんだと!俺より弱いくせに。」

「貴様こそなんだ。さっきから偉そうに!お前はそんなに偉いのか?もう死神代行ではなかりうに!!!。」

「だまれ!お前こそ、そんなに偉くなったのか?。」

「フン。」

ルキアはそう言いながら自分の左腕についている、副官掌を見せた。「どうだ!。」

「昇進したのか…。」

石田がつぶやいた。

「ああ。さすがに50年もたつとな。」

「お前その割には、ちつとも成長してねえじゃないか！外見が。」

一護が今思ったことを口にした。

「五月蠅い！たわけが！」

ルキアは、顔を真っ赤にして答えた。

「はいはい。」

慣れたようなやり取りに、一護以外のみんなは、いまだに固まっていた。途中でつぶやいた石田、井上も、再び硬直状態に、戻っていた。

「ルキ姉！！」

一番最初に、硬直を解いたのは、夏梨だ。

「…。なんだ。夏梨か。」

一護が少し驚きつつ、つぶやいた。

（まさか一番最初に、ルキアに声をかけるのが夏梨だとは思わなかった。）

「なんだ。夏梨。」

ルキアが夏梨に問いかけた。

「うん。なんでルキ姉は、ここにいるの？」

（確かにそうだ。なんでルキアがここにいるんだ？）

一護は今の夏梨の問いかけを聞き、思った。

「…。私は、一護たちを迎えにきた。」

「……。へっ？。」

一護がすつとんきような声を上げた。

「…。えっ。なにに。なんでルキアちゃんが一護たちを迎えに来たの?。」

今の、一護の声を聴き、我に返ったのか、啓吾がルキアに聞いた。

「うむ。私は、一護、遊子が死に、尸魂界へ来たとき、一護を死神に引き入れようとした…。というのは知ってるな。」

ルキアは、皆の顔を見渡しながら言った。

当然みんなは、うなずいた。

「それでその時、一護は断った。」

「うん。」

遊子がうなずいた。

「その時の一護の言い分が、『俺たちが死んだのは、皆より早い。だからここに。知り合いがいねえ。まあここにいるやつら、全員そうだけだな…。けど俺は、しばらくは遊子といたい。しかも俺は死神になる気はねえ。遊子を一人にしたくねえから…。また、俺に死神になるようにお前たち死神が、言いに来るなら、おれの知り合いが全員死んだとき、もう一度来てくれ…。その時まで、答えは用意しとく。』」

…。だから約束どうりに、私は迎えに来たのだ!。」

「そうだったんだ…。」

井上がつぶやいた。

「…。黒崎。お前、そんなこと言ってたのか。」

石田が一護に聞いた。

(…。俺、そんなこと言ったか?)

一護は心の中で自分に問いかけていた。

一護は真剣に、今ルキアに聞かれたことを、考えていた。

「…。い…。お…。黒崎!おい。黒崎!。」

考えにふっけていたのか。一護は石田の声を聞き取るのに時間が

かった。

「ン。なんだ、石田。人の耳元で。」

「君が僕の質問を無視したからだ。」

「んだよ。そんなぐらいで。てか、お前いつ俺に質問した?。」

「さっきださっき!もう一度言ってやろうか?。」

「ああ。頼む。」

「…。お前、そんなこと言ったのか?。」

「そんなこと?。」

「さっき朽木さんが言ってたことだ。」

(さっき?ああ。あのことが。)

「うん。言っただぜ。」

「そうか。」

「それで。」

「それでって?。」

たつき、に声をかけられ、ふりかえりながら一護は答えた。

「だから、あんたが死神になることについて。」

「ああ。それか。なるぜ死神に。お前らもなるんだろ?。」

「なれるなら、なりたいけど。でも一護は、もともと死神代行だから、学校に行かなくてもいいんじゃないの?。」

たつきが聞いた。

「ン?そうかもな。どうなんだルキア。」

「ん。確かにお前なら、学校に行かなくてはいいかもしれないが、お前、鬼道ができないだろう。」

「ああ。」

「だから、多分だが、その点に関しては、学校に行けと言われると思うが…。」

「だ、そうだ。たつき。」

「ふーん。で?。」

瀟靈廷へ（後書き）

どうですか？ついに一護たちは、瀟靈廷へ出発します。

ちなみに、なぜ一護がルキアの存在に気づいたかは、次回でわかります。

一心の出番少ないですね。多分、次回でしばらくは出番がありません。

誤文字のご指摘等の報告、感想、などなどお待ちしております。

瀟靈廷に、出発だ（前書き）

ルキアたちは、ついに瀟靈廷へ出発です。

4 話目スタート！

瀨霊廷に、出発だ

旅立つときは 仲間とともに

新たな場所に 足を踏み入れる

*

*

*

*

「「「「「「「「「「瀨霊廷?!」「」「」「」「」「」

これからどこに行くのかを、ルキアに聞き、帰ってきた答えが、皆を驚かせた。

「うるさい!そんなに驚かなくていいものを。」

「おいおい。ルキア。なんでいきなり瀨霊廷なんだよ?。」

「ほかに行ける場所があるとでもいうのか?。」

ルキアは一護の問いに、逆に聞いた。

「そりゃ。お前。俺たちが、行けるところの二つや、三つ...。」

「いや。ないぞ黒崎。そんなところは。」

石田が、きっぱりと言った。

「そんなきっぱり言うなよ...。」

「ほーらな、一護。」

「...。」

「あつそつだ。黒崎元隊長。」

「ん。なんだ?。」

今まで出番が少なすぎ、隅っこで落ち込んでた、一心が、顔を挙げた。

「『『え　　！』』」

遊子、夏梨、一護、の3人は、驚いてものすごい、声を上げた。

「お、親父。隊長だったのか?。」

「おう。あれ言ってなかったか?。」

「ああ。」

「そうか。俺は、7番隊元隊長だ。」

「『『『『『『『ええ

』』』』』』』

「『『

ここにいて、皆が驚愕した声を上げた。

「貴様ら。うるさいぞ!。」

「『『『『『『『はい。』』』』』』」

(なんかこんなやり取りさつきもあつたような…)。

石田は心の中で思った。

「黒崎元隊長。」

「なんだ。」

「ちよつと。」

と、言いながらルキアは、手で招くようなしぐさをした。

「ん?。」

「耳を。」

「……………」

「…。それはほんとか?ルキアちゃん。」

「はい。……。あとそのルキアちゃんというのは止めてほしいのですが…。」

「えつ。なんで?。」

「そんなの決まってるだろ。」

今のルキアの声を聴き、夏梨が話に割り込んできた。

「お前にそう呼ばれるのが、キモイからだよひげ。」

（おいおい。夏梨。お前、親父に対しての態度は変わらないんだな…。）
一護は、思った。

「うつそ　ん！」

「とてもいいらしいのですが…。その通りです。」

「ガビ　ン。ひどいよー。ルキ「いいから。黒崎元隊長、早く行ってください！」」

「はい。」

一心は、瞬歩でその場から消えた。

「おい。ルキア。親父はどこに行ったんだ？」

「一護は、まだ知らなくていい。」

「はあ？それ、どういう「さあ、早く、瀨霊廷に行くぞ。」

「おい。ルキア。無視すんな！」

「だまれ！行くぞ！」

「行くのはいいけど。朽木さん。どうやって行くのさ。」

石田が、さつきから疑問だったことをルキアにぶつけた。

「それは、これだ！」

ルキアはそう言いながら、馬を指さした。

「「「「「「「「「「馬あ？」「」「」「」「」」

「ああ。」

「てっ、まさかと思うけど、馬に乗ってトコトコ瀨霊廷に行く…とかいうんじゃないよね、ルキ姉？。」

夏梨が、疑いの目でルキアを見た。

「そんなわけなかるう。この馬は少し特殊でな。技術開発局に、頼んで特別に作ってもらったんだ。」
ルキアが自慢そうに言った。

「そこお前が自慢するところじゃねえだろ。」

一護が、突っ込んだ。

「五月蠅い！黙って聞け！」

「はい。」

「で何が特殊なの。その馬。」

夏梨が、脱線した話を元に戻した。

「よく聞いた。この馬は、霊力があるやつでしか乗れないんだ。しかも、もともと死神だった者は、死神の姿に戻る。」

「えっ。それって。つまり…。」

井上がつぶやいた。

「その馬に乗れば、黒崎は…。」

石田が井上の跡を継いだ。

「「「「「「「「「「死神に戻る?!」「」「」「」「」

「それほんとか！ルキア!!!」

一護がうれしそうな声を上げた。

「ああ。それでは、説明終わりだ。さあみんな、馬へ乗れ！」

「ああ。」

みんな自分の前に来た、馬に、またがった。

「どうだ。一護、死神に戻ったか?。」

ルキアが一護に問いかけた。

「…。まだみた」

いだ。一護は最後まで言えなかった。体が急に光だしたからだ。

「おい！ルキア、どうなってるんだ!?!」

一護が素っ頓狂な声を出した。

「私にもわからん。なんせ、この馬は、だれにも試したことがないからな。」

「はあ?!俺は実験体かよ!。」

「まあそんなところだ。」

「おい！」

一護が、突っ込みを入れた。

「わあ！！。」

一護が急に大声を上げた。

急いで一護のを見た、ルキア、石田、井上、チャド、たつき、啓吾、水色、遊子、夏梨は、言葉を失った。

一護が乗ってる馬、そして一護自身が、思わず目をつぶるほどの、白い光を、発したからだ。

そして、すごい衝撃波とともに、一護の死神としての霊圧が、ルキアたちを襲った。

「あ！」「わ！」

みんなは一瞬、気を失った。

*

*

*

*

「つ。技術開発局の奴ら目……。もっとましには作れぬのか……」

最初に、口を開いたのは、ルキアだ。

「ほんとだよ。」

石田がルキアに同意した。

「たく。一兄は。自分の霊圧ぐらい操作すればいいのに。」

「悪かったな。霊圧操作が下手で！」

「い、兄……。」

「く、黒崎…。」

「黒崎君。」

「一護…。」

「…一護。」

「一護。」

「い、一護。」

「お兄ちゃん…。」

上から、夏梨、石田、井上、チャド、啓吾、水色、たつき、遊子の順だ。

「い、一護！その姿…。」

一護は、死神代行時、また死神がいつも着ている、死覇装を着ていて、背中には、一護の斬魄刀。斬月が、あった。

「ん。ああ。なんか、俺、死神に戻ったみたいだな…。」

「…。」戻ったみたいだな。『じゃ、ないわ戯け!!。』

「んだよ、ルキア。なーにが、『戯け!!』だ。もともと、この馬は、俺が死神に戻るための馬だろ?。」

「まあな。」

少し違うが…。ルキアは思った。

「じゃあ俺が、死神にもっとったから良いんじゃないか。」

「そうだな。」

「ねえ。朽木さん。本当に、瀨霊廷に行くの?」

「ああ。」

「じゃあ早く行こうよ。」

「なんでだ?。」

「あついや。あ、のね。なんか私たちが乗っている、馬。機嫌、悪くなったみたいで…。」

「はあ?。」

ルキアは、驚いた。そして井上に促されるままに、井上たちが乗っている、馬を見た。

「ブルルウ。」

ほんとだ。技術開発局に奴ら目。妙なところに、こだわりよつて。ルキアは、こぶしを握りながら、思った。

「まあいい。皆、それでは、これより瀟霊廷に出発だ!。」

静霊廷に、出発だ（後書き）

静霊廷になかなか出発しませ
な？ ん！！次話には、出発できるか

ついに、一心がいなくなりました。（笑）
なんで、一心がいなくなったのかは、秘密です。

今回の話、なんか短いです。すみません。

誤文字の指摘、感想等、お待ちしております。

瀟靈廷への道のり（前書き）

やっと、ルキアたちは、瀟靈廷へ出発です。

5 話目スタート！

瀟靈廷への道のり

仲間とともに
歩みを進め

仲間とともに 強くなれ

*

*

*

*

「おいルキア。俺どうすれば、いいんだ？」
「なにがだ。」

「いやあ。さつき、俺が死神になったとき、なぜかわからないが、馬が消えたんだ。」

「で？」

「いや。だから、俺はどうすれば、いいのかって聞いてるんだけど……。」

「そんなもの。瞬歩で来ればよかるつ。」

「いや。そうしたら。馬に乗ってる、こいつらはどうするんだ？ 瞬歩の速さに、ついてこれるのか？」

「当たり前だ。この馬をなんだと、思ってるんだ？」

「……。俺を死神にするための馬。」

「馬鹿者！！そんなわけないだろう。この馬は、少しであるが、死神の力を使えるのだ。ただし、この馬に乗ってる者の、霊圧により、多少の差は出るがな。」

「へえ。そうなの。じゃ、俺は瞬歩で行くわ。」

「ああ。そうしてくれ。すう。」

ルキアは、空気を吸った。

「それでは、皆、瀟靈廷へ行くぞ!!。」

「
「
「
「
「
「
「
「
「
お
お

!!!!

「「「」

*

*

*

*

ところ変わって、瀨霊廷内。 十三番隊隊舎

「来るかなあー？一護君は。」

「来るでしょ。あの一護君なら。」

ルキアが、いなくなつてすぐ倒れた、浮竹は八番隊隊長と話をしていた。

「てゆうかさあ。浮竹、もう起き上がつて大丈夫なの？。」

「ん。ああ、大丈夫、大丈夫。さっきは、目眩がしただけだからね。」

「いや、その目眩、普通の人に、とってはものすんごいだつて……。」「まったく。こいつは、自分の体の弱さをそんな簡単に言うかねーえ。普通。」

京楽は、思った。

「京楽は、心配性だなあ。」

「いやあ。浮竹が、倒れると僕は、清音ちゃんと小椿君に怒られるからねえ。」

「あははは。そうだな。」

ドタ ドタ ドタ ドタ ドタ

ガラ

急に障子が開いた。

「報告します。朽木ルキア副隊長が、元死神代行、黒崎一護を死神に戻すことに成功。また、本人は死神の学校。真央霊術院しんおうれいじゅついんに、行き

たいと、言ってる模様です。」

小椿が、ルキアからの報告を浮竹に話した。

「ちょっと　　！！それが言おうと思ってたのよ！！勝手に

言わないでくれる？。」

清音が、障子の向こうから、顔を出した。

「そんなの、しらねーよ！大体、地獄蝶が、俺のところに飛んできたんだから、俺が報告するのが、普通だろ！！。」

「あんたの、ところに飛んできたんじゃないくて、たまたま、あんたがいたところに飛んできたんでしょ！！勝手に、自分のところに飛んできたなんて思わないで！！。」

「な、何お　　！！。」

「何よ　　！！私が何か間違えてるとでも言いたいのか？。」

「ああ！そうだよ！」

「じゃあ、言ってみなさいよ！」

「はあ。また始まったよ。」

「始まっちゃったね。」

浮竹、京楽はあきれ顔で言った。

「は～～い！ストップ。」

京楽は、大声をだし、二人を制した。

「……。」

「それで？。」

「それで？つといわれますと。」

小椿が、不思議そうに言った。

「朽木は今、どこにいるの？。」

「はい。それでしたら、今は瀟霊廷に向かっているそうです。」

小椿の横から、清音が口を挟んだ。

「そうか。」

浮竹、ほっとしたような声を上げた。

*

*

*

*

「よしみんな。馬に瞬歩、させるぞ。」

「てっ。黒崎！馬にどうやって瞬歩させるんだ！」

「さあどうやるんだろうな。」

「おい。」

石田が突っ込んだ。

「お　い。ルキ　ア　　！石田達が、どうやって馬に瞬歩させるか聞いてんぞ！」

一護は、家の屋根に乗ってる、ルキアに呼びかけた。

「分かった。ちよつと待ってる。今報告中だ。」

「へーい。」

「まったく、一護は。。。報告します。」

ルキアは地獄蝶に向かって、報告した。

「元死神代行、黒崎一護を死神の姿に戻すことに、成功。また本人は、真央霊術院に行きたいとのことです。報告、終わります。」

*

*

*

*

「馬に、瞬歩させるのは、実はすごく簡単なことだ。馬に乗って『瞬歩したい』と思う、というか、念じるだけだ。」

「ホントー？。」

夏梨が、訝しげに聞いた。
ルキアは、無言で頷いた。

「……………」

みんな、馬を瞬歩させようと、念じた。

その時。

シュン

2〜4匹の馬がいきなり遠くに移動した。
瞬歩した、馬に乗っていたのは、

石田、井上、チャド、そして夏梨だ。

「うむ。石田達は、予想道理じゃな。」
ルキア、一護の後ろで急に声がした。

「よ、夜一さん！」

「夜一殿！」

猫の姿の、夜一が、二人の後ろに座っていた。

「ふむ。夏梨が来るとわな。これは、予想外じゃ。」

「てっ！何でここにいるんすか！夜一さん！」

「なんじゃ。わしが此処にいてはいけないように、聞こえるが。」

「いや。そうは、言っていないけど。」

シュン

また何匹か、瞬歩した。

今度は、水色、たつきだ。

「夏梨ちゃん、どうやってやったの？。」

「念じるだけだよ！遊子！」

「うーん。」

シュン

「わーいできた！」

「やったね遊子！」

パチン！

ふたりは、ハイタッチした。

遊子が瞬歩した。

「おい啓吾！早く来いよ、置いてくぞ！」

「えー。ちょっと待ってよ。…。」

シュン

「やっとできた。」

「おい。啓吾 おいてくぞ！」

「護たちは、啓吾を置いて、600mぐらい進んだ。」

「えー！ ちょっと、待ってよー護！」

「早く来いよ…。てっ、夜一さん！なに、何気に俺の方に乗ってるんですか！」

「良いではないか。良いではないか。」

「はい。もういいです。」

*

*

*

＊

「で、ルキア。いつ瀨霊廷につくんだ？」

「もう少しだ。」

「さつきからずっとその答えだぞ！」

「黙ってついてこい。もうすぐだからな。」

「わぁ。」

「どうした井上？」

井上が、急に大声を出した。

「なんか私の馬と、私自身を守るように、オレンジ色の膜が出てきたんだけど…。」

「ほんとだなあ。」

一護はそう言いながら、チョンと、さわつみた。

ジン

この感覚前にもあったような…

一護は井上を守ってる物をさわりながら思った。

何だっけなあ。なんか、井上の、能力だっけなあ。…。

一護はこれが何かを思い出した。

「おい、井上。」

「何？」

「お前のまわりあるオレンジのもの。それ、…。」

「盾舜六花じゃないか？」

「ほえ？。」

「ほえ？じゃなくて。そのオレンジのものは、お前の能力の、盾舜

六花の、三天結盾じゃないかっていつてんだ。」

「たしかに。そういわれるとそうかも。」

井上は、オレンジのものと睨めっこしながら言った。

「だろ。」

「…ああそういえば、言い忘れていたが、」

ルキアが急に口を挟んできた。

「この馬は、乗ってる者の霊圧によっていろいろ変化するらしい。つまり、斬魄刀の能力と同じ。」

「…ということは、私の斬魄刀の能力は、盾舜六花ってこと?。」

「そうとも言い切れない。この馬の変化は、乗ってる者の霊圧によって変わるもの…。井上は現世で才能を開花させてるから、単純にその時の名残で、馬の変化が、三天結盾だったということもある。」

「そうなんだあ。」

「なんか僕と、茶渡君も変化してきた。」

「ム。」

「石田の変化ってどんなんだ?。」

一護が石田のほうへ瞬歩した。

「そんなに変化はしてない。しいて言えば、こいつの腹に、クインシークロスが出てきたことか。」

と言いながら、石田は馬の腹を指差した。

「ふーん。チャドは?。」

「ん。」

と言いながらチャドは、馬の腕を指差した。

「おつ。チャドの馬の腕、お前の戦うときの腕になってるじゃん。」

一護は、

まあ、予想はしてたけどな。

とつぶやきながら、瞬歩した。

「うそつけえ。絶対おぬしは予想して、無かつたろう。」

「五月蠅いすつよー。夜一さん。あと予想はしてました!!。」

「ほんとかのー?。」

「護はもう、無視した。」

「あつあの、」

「ン?どうした。遊子。」

「アッ!お兄ちゃん。あのね私の馬もね、変化したの!」

「どう、変化したんだ?。」

「あのね!馬が、全体的に濡れてきたの。これって変化の一部?。」

「どうなんだ?ルキア。」

「ああ。多分遊子は、流水系だな。」

「だってよ、遊子。良かったな!。」

「うん!。」

「ほほー。遊子は流水系か。」

「なんすか夜一さん。いちいち出てきて。」

「なんじゃ。出てきちゃだめなのか?。」

「...。」

「護はまた無視した。」

「ねえ、一兄。あたしも変化したよ!。」

「おつ。夏梨はどう、変化したんだ?。」

「あたしは、なんかこいつらがこつ、電気が流れてるみたいに、ビリツと。」

「ん。夏梨は、鬼道系だな。」

「ふーん。」

「感心なしか。夏梨は...。」

一護は思った。

「流水系に鬼道系。しかも電気ときたか。なかなかいい、組み合わせじゃな。」

また夜一が出てきた。一護は、最初から無視した。

「なんじゃ。つかかってこんのかさみしいの。」

一護はまた無視した。

「なあーちごー。」

「五月蠅いっすよ！夜一さん！！黙っててください！！！！。」

「はい。」

静霊廷への道のり（後書き）

なんか中途半端なところで終わりましたね。（汗）

今回は、なんとなくみんなの斬魄刀の能力を少し公開です！

残りの、たつき、啓吾、水色は次回で。

そういえば、なぜ一護はルキアが来たのか分かったのか…。書いてなかった…。

次回、絶対書きます！

誤文字の指摘、感想などなど、お待ちしております。

静霊廷に到着！（前書き）

ついに静霊廷です。

6話スタート！！

静霊廷に到着！

新たな力

新たな能力

*

*

*

*

「いいなあ。」

たつきがつぶやいた。

「なんで私はでないのかなあ。変化。」

そう言いながら自分が乗ってる、馬を見た。

「ワあ!。」

それを見た瞬間、たつきは大声を上げた。

「どうした。たつき。」

一護が瞬歩で飛んできた。

「ついにきたよ。」

たつきは自分の馬を見るような形で止まっていた。

「な、何がきたんだ?。」

一護は、なんか変だなと思いつつ、たつきに聞き返した。

「変化!。」

「ほんとか。良かったな。」

「えっ。たつき姉もきたの。変化。」

「ほんとたつきちゃん！どんな変化なの？」

「よくぞ聞いた。織姫！私の馬の此処、よ　く見てごらん。」
「。。。」「」

一護、夏梨、織姫はたつきが指差した馬のおなかあたりを見た。

なんか色が変わってるなあ。最初は黒だあた気がする。あつ、また変わった。

一護は見ながら思った。

「おい。ルキア。馬の色が変わるのは何系だ。」

「色が変わるかあ。それは、鬼道系か？夜一殿はどう思いますか？。」

「

「うむ。」

「おい、ルキア。なんで夜一さんに聞いてんだよ。」

シユン

ルキアが瞬歩して、一護の隣に来た。

「貴様には、関係ないだろ。黙って聞いとけ。」

「。。。」「

一護は無視した。

「おい。言ってもよいか？。」

夜一が、一護の肩の上で伸びていた。

「はい。」

「色が変わるのは、鬼道系じゃろうな。」

夜一は、ずばり、という感じに言った。

「そうですか。やはり鬼道系。」

「そうなのか。」

一護が会話に割り込んだ。

「なんだ一護。聞いておったのか。」

「聞きたくなくても聞いちゃうんですよ。夜一さん。」

「ああそーかいそーかい。」

夜一は受け流した。

一護は軽く無視した。

「で。たつきは、鬼道系ってことで間違いないんだな。」

「ああ。」

夜一の代わりに、ルキアが答えた。

「そうか。」

一護はそう言い、瞬歩でたつきのもとへ行った。

「おーい。たつき。」

「何、一護。」

「お前の能力分かったぞ。完璧に信用していいのかはわからないけどな。」

「で!。」

たつきの目は期待で輝いてる。

「お前は、やっぱり鬼道だよ。」

「やっぱり。」

「やっぱり、てことは、予想してたんだな。」

「うんまあね。」

「そうか。」

一護はそう言うってから、瞬歩でルキアのところへ移動した。

「ところで一護。」

瞬歩した瞬間に、ルキアが話しかけた。

「何故、あの時私の存在に気付いたのだ?」

ルキアが、悔しそうな眼をしていた。

「あの時って?。」

「一護はルキアが、言ってることが理解できなかった。」

「あの時だ、あ・の・と・き！私が、お前が住んでる家の後ろに隠れてた時だ！。なぜ、お前は私の存在に気付いたのかを聞いておるのだ！」

「。ああ。あれか」

「一護は、理解した。」

「そのことか。見えたんだよ、お前の姿が。」

「！。ほんとか。」

「ああ。」

「そうか、」

ルキアは、そっけなく答えた。

「一護の答えが意外だったようだ。」

「いーちごー。俺反応出ないよー。」

「反応じゃなくて、変化でしょ啓吾。」

ルキアとの話が終わった瞬間、啓吾と水色が話しかけてきた。

「僕は一応出たよ。変化。」

「オー！なんで、俺はいつも最後なのー！」

啓吾が嘆いてるのをよそに、一護は水色に聞いた。

「で、どんな変化だ？」

「なんか馬が、急に暖かくなってきたんだ。」

「それは、炎熱系だな。」

「ルキア！急に割り込んでくるなよ。」

「貴様はいつもやっておるだろう。」

「そう言いルキアはキッと一護を睨んだ。」

「はいはい。」

「ふーん僕は炎熱系か。ほかにも統系ってあるの？」

水色がルキアに聞いた。

ルキアは、頷きながら言った。

「ああ。お前が持つてる炎熱系のほかに、氷雪系、遊子が持つてる、流水系。夏梨、たつきが持つてる鬼道系。そして、一護が持つてる、斬月は直接攻撃系だ。ちなみに私の「袖白雪」は、氷雪系だ。」

「ふーん。」

水色は、あっさり返事をした。

「おい。いーちごー！」

突然後ろで声がした。振り返ったら啓吾がいた。

「なんだよ。啓吾。」

「俺変化でないんですけど！」

「へー。もしかしてお前、死神の才能ないかもな。」

「ガビーン！」

「そう、気を落とすな。啓吾。」

ルキアが声をかけた。

「ルキアちゃん！」

「馬に変化が出ないのは、一護と同じ、直接攻撃系か馬に変化が出ない、鬼道系か本当に才能がないのかのどれかだ。」

「えっなにそれ。」

「ほら着いたぞ！」

ルキアは啓吾を無視しながら、言った。

「ついたってどこに？。」

一護はルキアに聞いた。

みんなが瞬歩して、一護の隣に並んだ。

「わあ。」

「久しぶりだな。」

「ム。」

「誰がいるかな?。」

「…ここが。」

「ワオ。」

「へーえ。」

上から、一番最初に一護の隣についた、夏梨。そして、石田、チャド、井上、たつき、啓吾、水色の順だ。

「何言ってるのだ一護。」

「何って…。」

「下を見てみる。」

「えっ。あ…。」

一護は言葉を失った。

「ここは…。」

「瀟靈廷だ。」

瀟靈廷に到着！（後書き）

ついに、瀟靈廷につきました！

この話で、なぜ、一護はルキアの存在に気付いたのか、お分かりいたしましたか？

分かっていただければ幸いです。

あと、余談なんですがルキアが現れて、どこに行くのか一護が聞いたてルキアが答えたセリフと、上の最後のセリフが同じということに気付きました…。
まあいいです。

「A new adventure and bonds」の、番外編始めました！

「A new adventure and bonds」番外」という題名です。

良かったら、読んでみてください。

また、この番外編は皆様からのリクエスト話や、私が思いついたコメディ話、本編では触れられないルキアの昇進の日などを書いていく予定です。

何か、リクエストがありましたら、下の「一言」というところに書いてください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

一番隊隊舎（前書き）

特にありません。

7話目どうぞ！

一番隊隊舎

心は

誰かを大切に想うため

誰かを愛しく想うため

誰かを尊く想うため

誰かを護りたいと想うために

「やっと着いたか。」

夜一さんが、一番最初に口を開いた。

「なんすか。夜一さん。まるで何年かぶりに来たみたいな言い方して。」

「ほんとに何年かぶりに来たんじゃ。」

「時々来てたんじゃないんすか。瀟靈廷に。」

「来てないの。かれこれ3〜40年ぐらい。」

「そうなのか、ルキア。」

「ああ。」

ルキアは頷きながら言った。

「そうなのか。」

「それよりさあ。黒崎君。」

井上が目を輝かせて、聞いてきた。

「なんだよ井上。」

「『早く、瀨霊廷に行こうよ！お兄ちゃん、一兄。』」

「『』」

「ム。」

チャド以外のみんなが、俺に向かって叫んだ。

「分かった、分かったから、もうすぐ行くから。お前ら少しは落ち着けて。」

とか何とか言ってる本人が一番行きたそうなんだけどな…。

石田は一護を見て思った。

「おい、ルキア。早く瀟靈廷に行こうぜ！」

「ああ。みんなついてこい。」

「どこに？」

俺は聞いた。

「？^{じだんぼつ}丹坊のところだ。」

「？丹坊か。元気してるかな、あいつ。」

俺は、そう言って瞬歩で消えた。

みんな俺にならつて、瞬歩で消えた。

*

*

*

*

「よう久しぶりだな。？丹坊。」

俺は、？丹坊に会いそのままの勢いで話していた。

「お。久しぶりだな。一護。」

「ああ。ちょっとそこ通してくんないか？」

「一護の頼みならいいぞ。」

そう言い、？丹坊は自分の後ろにある大きな扉を開けた。

「「「「わーお。「「「「」

夏梨、遊子。そして、啓吾、水色、たつきが感嘆の声を上げた。

「よく、見るよ。ここが瀟霊廷だ。」

一護は、感嘆の声を上げた五人に向かい、言った。

「なんで、一護が言っておるのだ。そこは、私か夜一殿のセリフではないか!。」

「そんな固いこと気にするなって。ほら、もうみんな行っちゃったぞ。」

「おい。お前ら、勝手に行くな。」

ルキアが、先の5人を追いかけて行った。

「ほれ。一護もはよ行かんか。置いてきぼりを食らうぞ。」

「はいはい。井上たちは?。」

「前じゃ。」

ほんとに置いてきぼりを食らうとは…。

俺は思った。

*

*

*

*

「よつと。」

俺は、やっとルキアたちに追いついた。

「ちょい待てよ。ルキア。」

「なんだ。あとからくるお前が悪いのであろう!。」

こいつ、副隊長になってから切れやすくなったか?

怒っている、ルキアを見て俺は思った。

「こちらとて、あいつらを追いかけるのに大変なのだ。夏梨はいつの間にかいなくなるし。遊子は、夏梨についていくし。啓吾はギャーギャーわめくし。まともなのは、水色とたつきだけか!。」

「いや、そんなこと、俺に言われても。」

「お前の妹たちが迷子になってるんだぞ!。」

「遊子たちは迷子になったのか?つか、もし迷子になったとしてその馬には、探知機能とかついてないのか?。」

「う…。それは、ついてたような気がする。」

「ついてんじゃねえか。早くそれで探せよ。」

「誰を探すって、一兄。」

後ろで声がした。

俺は振り返った。

「なんだ夏梨いたのか。遊子は？」

「ん。」

夏梨は後ろを指差した。

「なんだよルキア。遊子も夏梨もいるじゃねえかよ。」

「ん……。まあいい。これで全員そろったか？」

「ああ。た、ぶんな。」

俺はみんなを見渡しながら言った。

「それじゃ。護挺十三隊の一番隊隊舎に行くぞ。」

ルキアが言った。

「ねえ、一兄それって何？」

夏梨が聞いてきた。

「ん。そうだなあ。死神の総本山といったところか。」

「ふーん。」

「じゃあ行くぞ。」

ルキアが言った。

シュン

ルキアは瞬歩でその場から消え、先ほどから見えていた大きな建物のところに立っていた。

あいつ、瞬歩できる距離が伸びたな。

俺は、ルキアを見ながら思った。

そしてみんな、その建物に瞬歩した。

*

*

*

*

「ここ、どこ?。」

たつきが聞いた。

「だから、これが一番隊舎。」

俺は答えた。

「それで私たち、この中に入るの?。」

「ああ。まあそんなところだ。」

「そんなところだ。じゃないだろうが。私たちはこれからここに入
って、総隊長殿に会い死神の学校に通うのだろう。」

「えっ。ルキアも通うのか？」

「馬鹿か。私は通わない。副隊長の仕事があるからな。時々顔を見
せに行くぞ。」

「はいはい。」

「ねえ。一兄。あたしたちなんか見られてる気がするんだけど…」

「私も。」

「私も。」

「俺も。」

「僕も。」

上から、遊子、たつき、啓吾、水色の順。

「まあそつだろうな。俺たちここでは有名人だから。」

「えっそうなの?!。」

夏梨が驚いた声を上げた。

「まあな。あれ、言ってなかったか？。」

「うん。」

「じゃあ。「ストップ。そこまでだ一護。言つとくがお前らのことは死神の学校、真央しんおう霊術院れいじゅつゐんに十分という程授業に出る。あいつらに教えるのはそれからでも遅くなくろう。」

「そうだな。じゃ、夏梨それまで我慢しとけ。」

「一兄たちどんなことしたの。あーもう。早く知りたい！」

「あはは。まあいい。早く、総隊長に会いに行こうぜルキア。」

「そうだな。」

ルキアは、そう言い一番隊舎の扉を開けた。

一番隊隊舎（後書き）

フ。 やつと、やつと瀨靈廷の一番隊隊舎につきまし
たね。

なんか、長くありませんでした？

今回は、一護視点で書いてみました。
良くかけてましたか？

番外編のほうも、宜しくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしています。

一番隊にて（前書き）

総隊長登場です。

では、第8話でござい！

一番隊にて

私は 世界のすべてを愛し

彼は 世界のすべてを恨む

「おい、ルキア。まだか。」

「まだだ。」

「長くねえか。」

「ああ。長いな。」

「もう20分ぐらい歩いてるぞ。」

「あと10分くらい、歩くぞ。」

「えー。」

私の後ろで、誰かが叫んだ。

まあしょうがないだろう。最初に会った時から休みなしで動いているからな。

一護たちは大丈夫だろう。が、啓吾や遊子たちにはきついだろうな。

実際、あいつらだけ馬に乗ってるのに少しペースが遅い。

私は思った。

「おい。まだか。」

また一護か。

お前は疲れてないだろうに。

私は振り返った。

そしたら驚いた。一護は、遊子を背負っていた。

どうやら疲労で倒れたらしい。

そういえば、あの五人の中で遊子が一番霊圧が低かった。

なるほど。

私は理解した。

さつきから、一護がしつこく「まだか。」と聞いてくる訳を。

遊子を休ましてあげたいのだ。

あの馬は、乗ってるだけで霊力を消耗する。

一護はそれをわかって、遊子を馬から降ろしたのだろうか？

そんなことを考えてると、目的の部屋についた。

「一護、ついたぞ。」

私は、一番最初に一護に声をかけた。

早く遊子を休ましてあげたいだろう。

私なりの気遣いだ。

「お、わりいな。」

一護は、私が言いたいことを理解したようだ。

「ありがとう。」

こんなことで、お礼を言われる筋合いはない。

私はそう思った。

「総隊長。黒崎一護、またその同伴を連れてきました。」

私は、総隊長に報告した。

「うむ。馬はその柱につないどけ。ところで、」

私は、総隊長が仰ったように柱に馬を全部つないだ。

「はい。なんでしょうか。」

「その、黒崎一護の姿が見えないが。」

「あー。一護はたぶん、遊子を寝かしてるかと。」

「誰を寝かせてるって?。」

「一護の妹が倒れてしまったので布団に寝かせてるかと…。」

「そうか。まあ良い。早く、黒崎一護をここへ呼ぶように。」

「はい。」

私は、一護が遊子を寝かしている部屋の隅に行った。

「おい、一護。総隊長が呼んでいる。」

「ん。そうか。じゃあ、遊子のこと頼むわ。夏梨。」

「うん。」

一護は、私の呼びかけにすぐに応じた。

「じゃあ。行くか、ルキア。」

「ああ。」

*

*

*

*

「黒崎一護。久しぶりだな。」

「そうっすね。」

「妹は、良いのか?。」

「あー。まあみんなが、見てくれますから。」

「そうか。」

「はい。それで、」

「うむ。これから一週間後。おぬしらを、死神の学校「真央霊術院」の、編入入学を許可する。それまでの時間は自由に動いていいぞ。一週間後に一番隊隊舎に集合。お主も会いたい奴がおるじやろう。」

「はい。ありがとうございます。」

「失礼します。」

「うむ。」

*

*

*

*

「おい、夏梨。遊子は大丈夫か?。」

「アッ、一兄。うん。遊子は大丈夫。ところで話は?。」

「終わった。おい、皆。」

一護は、皆に向かって言った。

「学校への入学は、一週間後。それまでは自由行動だそうだ。けどここに来たことのない、遊子、夏梨。啓吾、水色、たつきは、ここに来たことのある、井上、石田、チャドか俺と一緒に行動するよに。」

私は、驚いた。

一護の言い分が、意外と筋が通ってたからだ。

「分かった。」

代表として、たつきが答えた。

「じゃあ、皆自由行動な。俺、行きたいところあるんだ。」

「遊子と夏梨は俺と来い。啓吾たちは、好きなように。」

「じゃあ。」

シュン

一護は、遊子、夏梨と手をつないで瞬歩で消えた。

一番隊にて（後書き）

短い！

自分でも驚きました。

今回は、ルキア視点で書いてみました。

なんかルキア視点で書いてると、話が暗い気がします。

どう思いますか？

今日は、休みなのでどんどん更新しちゃいますよ！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいという、リクエストなどなど、お待ちしております。

十番隊（前書き）

今日、3話目の投稿です。

第9話スタート！

十番隊

人は 人と書き 「天使」 と読み

人は 人と書き 「悪魔」 と読む

「とりあえず、此処か。」

俺は十番隊舎の前で止まった。

「よし。目あけていいぞ。遊子、夏梨。」

「ん。」

遊子と夏梨が目を開けた。

「アッここ。」

「なんだ夏梨。ここがどこかわかるのか?。」

「うん。ここ、冬獅郎のところでしょ。」

「ああ。なんだ知り合いか?。」

「まあそんなとこ。」

「ねーね、夏梨ちゃん。何の話？」

「うん。それはね…。」

夏梨は、話し出した。

「あのね、あたしたちがまだ5年の頃。」

「おい、夏梨、入るぞ。話なら、歩きながら言え。」

「分かった。」

「夏梨ちゃん続き、続き。」

「うん。その時あたしたちは、サッカーをしようとしてね。」

「入るぞー。」

俺は堂々と、扉を開けた。

*

*

*

*

「松本

「！！。」

「オッ、やってるやってる。」

「何が、やってるの一兄。」

「この声聞こえるか？」

俺は夏梨に聞いた。

「こら松本　　！逃げるな　　！」

冬獅郎が叫んでる。

夏梨は、笑った。

「聞こえる、聞こえる。」

「この声が聞こえる方向に行くと、冬獅郎がいるってわけよ。」

「なーる。でも一兄。なんか声が近づいてきてない？」

「あー。言われると、そうかも。」

*

*

*

「松本逃げるな！」

ゴン　ガン

冬獅郎が、氷輪丸を振り回した。

「わー。タイチヨ　　！隊舎壊しちゃいけませんよ！」

「お前が大人しくつかまってくれるな……。」

らな。冬獅郎は言葉を途中で切った。

「ん。どうしたんですか？隊「黒崎、松本を捕まえろ！」

「はあ？。」

乱菊は急いで前を見た。だが時すでに遅し。

*

*

*

俺は、反射的にこっちに走ってくる人を捕まえた。

死覇装の、襟元を。

冬獅郎は、松本って言ってたから、乱菊さんか。

また仕事サボったのか？

「ふー。助かったぜ黒崎。ていうか、お前いつここに来たんだ？」

「やだー。隊長！忘れちゃったんですか？さっき、地獄蝶が来て言
ってたじゃないですか。『黒崎一護が来た。』って。」

乱菊さんが、俺の手につかまったまま、話した。

綺麗な髪が揺れた。

「お前のせいで聞き損ねたんだろうが、松本

！」

「す、すいませんでした。」

乱菊さんは、そう言って逃げるそぶりを見せたが、失敗。

冬獅郎につかまった。

「まあいい。来い、黒崎。」

「一兄だけじゃないんだけど。」

急に後ろから声がした。

冬獅郎の肩が、「ピクツ。」と動いたような気がした。気のせいかな？

「か、夏梨。」

冬獅郎は振り返りながら言った。

「大当たり。」

「お前らも来てたのか。ん。後ろにいるやつは？」

「あたしの双子のお姉ちゃんの遊子。」

「あ、あの。初めまして。黒崎遊子といます。」

「こちらこそ。十番隊隊長、日番谷 冬獅郎だ。」

「小さな隊長さんだね。」

「余計な御世話だ。」

確かに

俺は思った。

50年もたっているのに冬獅郎の背は、10?程度しか伸びてなかった。

「じゃあ、宜しく。日番谷君。」

「日番谷隊長だ。」

たく。この兄弟はそろってこうなのか？

冬獅郎は思った。

「…。まあいい。来い。」

「「「ハイ。」」」

一護、遊子、夏梨は、そろって返事をした。

ソロ　　り。

乱菊さんが、逃げようとしていた。

「こら、松本！逃げるな！お前は別だ。とりあえず来い。」

「…。はい。」

最後のチャンスだと思ったのに。

乱菊は思った。

*

*

*

*

「で、お前はなんでここに来たんだ。」

カリカリ

「ん。暇つぶしだよ、暇つぶし。俺たち、一週間後に、えーと……。ああそうだ。真央霊術院に行くんだ。で、それまでいろんなところまわろかなーで。」

カリカリ

「それで、最初に来たのがここってわけか。」

カリカリ

「ま、そんなとこだ。」

「おい。松本、それが終わったらこっちな。」

「はい。」

乱菊さんはさっき、冬獅郎につかまってから今まで貯めてた分を全部やらされている。

もう、三十分ぐらい、やっているのに、まだまだ書類の山が4つぐらい残っている。

どれだけ貯めてたんだ。

俺は、思った。

「ねーえ冬獅郎。」

夏梨が、冬獅郎に話しかけた。

「日番谷隊長だ。」

「なんかないの？」

「なんかつてなんだ。」

「なんかだよ。」

「俺は仕事で忙しんだ。用がないなら早く、出て行ってくれ。」

「やだー。」

「お兄ちゃん。私、ちょっと寝るね。」

遊子が、俺に話しかけてきた。

「おー寝ろ寝ろー。今日はここに泊まるぞ。」

「おい、勝手に決めるな。」

「良いだろ、別に。俺たち泊まるとこねえんだよ。」

「そんなの、朽木のところに泊まればいいだろ。」

「ルキアのここは最後。」

「…。ほかに泊まるところでも考えてんのか?。」

「まあな。明日は、恋次のところ。明後日も恋次のところで、なんかいいところあったら、そっちに泊まろっかなーなんて。そういえば、恋次って昇格したのか?。」

「ん。ああ。そうだな。」

冬獅郎は、書類への手をとめないで答えた。

「何に昇格したんだ?。」

「三番隊隊長だ。」

「へー。恋次が隊長ねー。えっ。…。恋次が隊長だって
!!!。」

「ああ。そうだ。聞いてなかったのか?。」

「ま、あな。」

「阿散井は隊長だ。三番隊のな。」

「マジか。」

「マジだ。」

恋次が、あの恋次が隊長か。なんか嫌だな。

俺は思った。

「更木のところに泊まるっていうのはどうだ?。」

冬獅郎が、話を戻した。

「剣八のどこなんて、俺殺す気か?。」

「そうだな。というか、お前本当に此処に泊まるのか?。」

冬獅郎は、なんか嫌そうな顔をして言った。

なんか、何気に酷いな。

俺は思った。

「ああ。ほかに泊まるところがねえって言ってんだろ。」

「もういい。泊まるならとまれ。そのかわり、明日には、いなくなれ。」

「酷い言いようだな。じゃあ、お言葉に甘えて今日は泊まるぜ。」

「勝手にしてくれ。」

十番隊（後書き）

またまた、短い！

すいません。

初めて、本編で、冬獅郎登場です！

また、乱菊さんを叱ってます。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

十番隊 ？（前書き）

夏梨と冬獅郎です。

第10話スタート！

十番隊？

己の為に 命を守り

仲間の為に 命を捨てる

「ん

。」

あたしは目を覚ました。

「此处は…。」

そうだ。昨日は冬獅郎の所に泊まったんだっけ。

にしても冬獅郎ってケチ。

部屋がないから、執務室で寝ろなんて。

しょうがないから、冬獅郎の部屋から布団を三式持ってきたけど。

今何時だろう。

あたしは時計を見た。

時間は…

「六時四十二分。」

ちよつと早いな。

あたしは隣を見た。

遊子はまだ寝てるし。一兄もまだ寝てる。

一兄が起きてないから瞬歩で違うところに連れて行ってもらえないし。

あたしが、瞬歩使えたらよかったのに。

その時。

ガン キン

裏庭で音がした。

何だろう。

あたしはそう思い駆け出した。

*

*

*

*

裏庭についた。

ガン

まだ、音はなっている。

あたしは、音が鳴つてるところに行った。

「と、冬獅郎…。」

そこには、冬獅郎が斬魄刀を持っている格好で立っていた。

「夏梨か。早いな。何してるんだ？」

冬獅郎はあたしに気付き話しかけてきた。

「それは、こっちのセリフ。冬獅郎こそ何してんの？」

「見りゃわかるだろ。剣の修業だ。」

「なんで、冬獅郎は隊長なのに修行してるの？」

「お前には関係ないだろ。」

「そうだけど…。でも冬獅郎今のままで十分強いじゃない！」

「…。そう、かもな。でも俺はまだまだ未熟だ。」

そうつ、冬獅郎の顔はどこかさみしげに見えた。

「言いたくないならいいよ。そこまで問い詰めないし。」

「…。そうか。じゃあ、お前はなんでここにいるんだ？」

「…。あれ、なにしようとしたんだっけ？」

なんであたし、此処にいるの？

「俺に聞くな。」

「そうだね…。そうだ冬獅郎！あたしに瞬歩教えてくれない？」

「今度学校に行くんだろ。そんな時教えてもらえ。」

「でもあたし、瞬歩してみたいんだよ。ね、この通り。」

あたしは頭を下げた。

「だめだ。第一俺は今修行中だ。瞬歩なんて学校に行ってからでも習うし、そんなに習いたいならお前の兄貴に教えてもらえ。」

冬獅郎はそう言って、修行を再開した。

「え

」！

あたしは驚愕した。

わざわざあたしが頭を下げてるのに。

「五月蠅い。」

「なんだよケチ！」

「ケチで結構。」

「べ

」!

あたしは、恨みを込めて言いそのまま執務室に向かった。

「なんだ、あいつ。大人になってもあんなことやってんのか。子供か?」

後ろで、冬獅郎がつぶやいてるのが聞こえた。

なんかムカついてきた。

「子供で悪かったですね!」

あたしは、叫んだ。

「なんだ、聞こえたのか。」

また冬獅郎がつぶやいてる。

あたしは、無視した。

*

*

*

*

なんだよ、冬獅郎の奴。

ほんとにケチ!

ガラ

あたしは力任せに、扉を開けた。

なんか、いい匂い。

あたしは、思った。

「あつ。夏梨ちゃん！どこ行ってたの？」

「ん。裏庭。」

遊子。起きたのか。

なんでかわからないけど、あたしの怒りは冷めて行った。

「一兄は？」

「お兄ちゃんならソファーだよ。」

遊子が答えた。

「お。おはよう夏梨。」

「おはよう。一兄。ところで今何時？」

あたしの怒りは、完全に冷めた。

なんでだろう？

まあいいや。

「今。今は八時四十三分だな。」

…。二時間も。あたしは、二時間もあそこにいたんだ。

時間がたつのは、早いな。

あたしは、思った。

「そつか。ところで、この匂い何？」

さつきから漂ってくるこの匂いが疑問になった。

「これ。」

遊子はそう言い机を指差した。

机なんてあったか？

よく見ると、布団はなくなっていた。

それで、机が出てきたってわけか。

乱菊さんの特等席が。

あたしはそう思いながら、机に近づいた。

机の上には、肉まんが乗っていた。

「此処って肉まんあったんだ。」

肉まんを見たときのあたしの第一声。

「なんだ、反応うすいな。」

一兄は、驚いたような声を上げた。

「これ、食べていいの？」

あたしは一兄に聞いた。

「さあな。わかんねえから冬獅郎を待つてるんだ。」

「そう。」

冬獅郎。聞いたらまた怒りが復活するかと思っただけど、あたしは全然怒っていなかった。

「それ、食っていいぞ。」

冬獅郎だ。

いつの間にか入ってきたのか。

冬獅郎は壁に寄りかかっていた。

「そうか。じゃあ、「いただきまーす！」」「」

あたし、遊子、一兄は、同時に肉まんにかぶりついた。

「そのかわり、それ食ったら、早く出てけ。」

「はい。」

一兄が代表して答えた。

やっぱしケチだ。

あたしは思った。

*

*

*

*

「「「ご馳走様！」」」

「んじゃ、出てけ。」

カリカリ

「なんだよ冬獅郎。つめてーな。」

カリカリ

「五月蠅い。」

「へいへい。出ていきますよ。さようなら。乱菊さん仕事がんばってくださいね！」

乱菊さんは、まだ終わってない昨日の仕事をしていた。

「はい。」

乱菊さんは、すごい小さい声で答えた。

あたしにはもう、怒りがなかった。

なんでだろ。

ま、いいや。

「じゃ、冬獅郎。また今度な。」

「おう。」

そっつい、一兄はあたしと遊子の手を取り瞬歩した。

引っ張ってもらっ瞬歩って、周りの風景がすごい速さですぎていくから気持ち悪くなるんだよな。

あたしは、そっつい周りの風景が目に入らないように、目を閉じた。

十番隊 ？（後書き）

今回は夏梨目線です。

どうでしょうか？

夏梨目線って結構書きやすいです。

あんまり、一護の出番ありませんでしたね…。

次回も出番はないと思います。

次回は、自由行動になった、啓吾たちのお話です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

忙しい一週間　　？

己の為に　　　　　刃を　　振るうな

仲間の為に　　　　　刃を　　振るえ

時は少々遡る。

一護がみんなにこれからは自由時間だといいい遊子と夏梨を連れて消えた。

「行っちゃった。」

啓吾がつぶやいた。

「あーあ。これで僕らは朽木さんか石田君たちと一緒に行動しなきゃいけないんだね。」

水色が言った。

「なんだい。まるで僕たちとは行動したくないみたいな言い方。」

「だってそつだもん！」

啓吾が叫んだ。

「俺は、一護と行きたかったんだも

ん！」

みんなは、啓吾を無視した。

「じゃあ、井上と有沢は私と来い。瀨霊廷を案内してやる。ああ。井上は知ってるか。」

「うん！途中で十番隊によりたいけどいい？」

「いいが、なんでだ？」

「乱菊さんに会いたいから！」

「そうか。いいぞ！」

「ありがとう！朽木さん。」

「よろしくね。朽木さん、織姫。」

「まっかせといて〜！」

「こちらこそ。」

「茶渡君。僕は、ちょっと行きたいところあるから。あと宜しく。」

「む。」

「アッ！石田、この、どこに行くんだ　！」

「君には関係ない。浅野君。」

そういい、石田は飛廉脚で消えた。

「あいつ、瞬歩使えたのか。」

啓吾がつぶやいた。

「違う。あれは瞬歩でなく飛廉脚だ。ひれんきやく滅却師クインシーが使える。死神で言う、瞬歩だ。」

チャドが説明した。

「へー。そうなんだ。」

水色がつぶやいた。

「ところでさ、僕たち置いてきぼりだけど。」

また、水色が言った。

「あつ。ほんとだ。」

さつきまで、そこにいたルキアたちはいなくなって、一護もいない。そして、石田もいなくなった。

「これからどうする？」

「どうするって言われても…。俺たち知り合い、いないし。」

「俺はいるぞ。」

「…。よかった。チャドはどこに知り合いがいるんだ?」

啓吾が安堵したような声を漏らした。

「9番隊。」

「9番隊って遠いか?。」

「さあな、」

「さあなってなんなの? ねーなんなの?」

「とりあえず、行こう。」

そう言ってチャド、啓吾、水色の三人は、出発したのであった。

*

*

*

*

「チャドまだー?」

「まだだ。」

「…。ついたぞ。」

「おっ。ここが、9番隊か。」

啓吾が言った。

「ここで、一週間過ごすの？」

水色がチャドに聞いた。

「ム。」

「「そう。」」

コンコン

「誰だ。」

顔に、「69」と書いてある人が出た。

「俺だ。」

チャドは、言葉数少なく答えた。

「…。チャドか！久しぶりだな！」

「久しぶり。」

「「……………」」

会話が終わってしまった。

「えっと…。なんでここにいるんだ？」

「ちょっと、止めてもらおうかと思ったからだ。」

「そ、そうか。ま、とりあえず中に入ってくれ。」

檜佐木は、チャドたちを中へ促した。

*

*

*

*

「で、だ。話をまとめると。」

「お前らは、黒崎に「死神にならないか」と言われ、死神になることを決意。ここまででは、あってるな。」

三人は無言でうなずいた。

「そして、そこに十三番隊副隊長朽木ルキアがきた。」

「ん。」

「それで、瀨霊廷に向かった。その時に、技術開発局の作った妙な馬のおかげで黒崎は死神に戻った。」

「はい。」

水色が答えた。

「そして今日の朝。瀟靈廷につき、そのまま一番隊へ。そこで総隊長に「これから一週間は、自由行動とする」といわれ、どこに泊まろうかと迷っていたとき。チャドが俺のことを思い出し、此処に來たってわけか。あってるか？」

「はい。」

またもや、水色が答えた。

「そうか。…。まあいい、泊まるならとまれ。その代り、いろいろ手伝ってもらっぜ！」

檜佐木が言った。

「「はい。」」

「む。」

「そうか、そうか。これから一週間よろしく頼むぜ。チャドに、えーと…。」

「水色です。で、こっちが啓吾。」

「よろしくな。水色、啓吾！」

「「はい。」」

こうして、この三人のドタバタな一週間が幕を開けた。

忙しい一週間 ? (後書き)

どうでしたか？

なんか短くありません？

啓吾、水色、チャドのお話です。

後、1〜2話は続きます。

ルキアたちも読んでいけばわかります。

誤文字の指摘、感想こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

忙しい一週間？

限りがある 命には

時間には

「ほら、早くそこに運べ！」

「はい！」

「次はそれだ！」

「はい！」

「ほら、早く！みんな待ってるぞ！」

「はい！」

ここは、9番隊隊舎内。

ただいま、半年に一回の大掃除中。

「いやー。助かったよ。ちょうど人手が足りなかったんだ。」

「いやいや。」

疲れ切った啓吾はとりあえず返事をした。

「じゃ、次はここ。」

と、9番隊の死神が指差した部屋を見て啓吾は驚愕した。

「此処何ですか？」

「ん。何の部屋だったかな？ 忘れたよ。でも一応掃除は全部屋やる
つてことだから。じゃ、頼んだよ。」

「…。」

この部屋の広さに驚愕した啓吾はもうしゃべれなかった。

「すう
！」

。 どうやって掃除すんだよ

！！

啓吾の叫びはむなしくとても広い部屋に消えて行った。

「おい、チャド。その箱はそこに運んでくれ。」

「ム。」

ドスン

物凄い音がした。

いったいその箱には、何が入ってるんだろう？

近くで見た僕は、そう思った。

「サンキューな。チャド。今度はこっちの箱を運んでくれ。」

檜佐木さんが言った。

「ム。」

僕は自分の仕事を始めた。

仕事と言っても内容は、啓吾と同じ。

掃除する部屋の大きさが違うだけで。

サッ サッ サッ サッ

箒で掃いて。

塵取りにごみを入れ。

ごみ箱に捨てるだけ。

これが、啓吾と僕に割り当てられた掃除。

そしてチャドは、大きな荷物をごみ置き場まで運ぶなどの重労働。

本人は慣れた手つきでやっていく。

高校の時のバイトで工事現場をやっていたからなのかな？

僕は思った。

此処に来てもう四日。

来てからずっと掃除ばかりだ。

もういい加減飽きてくる。

まあ、泊めさせてもらってるから文句は言えない。

でも、あと何日掃除すればいいのだろうか。

もしかして、僕たちが真央霊術院に行くまでやるのではないかと思っ
てしまう。

…。もうすぐこの部屋の掃除が終わる。終わったら、啓吾のところに
手伝いに行こうかな。

「おい、水色。」

そんなことを考えていると、檜佐木さんが声をかけてきた。

「此処の掃除はもういいから、啓吾のところにでも行って掃除手伝っ
てやれ。」

隊長命令では、逆らえない。

僕は思った。

なるべく僕は自分の気持ちを顔に出さないようにしているが、今回はさっき思ったことが顔に出てしまったようだ。

「隊長命令だからってことで行かなくていいぜ。行くのがめんどくさいなら行かなくてもいいけどな。」

「いえ。最初から行こうと思っておたので。行きますよ。」

僕はそう言い、啓吾がいる部屋の場所を聞いてから駆け出した。

「こら！隊舎の中で走るな！」

後ろで、檜佐木さんの声が聞こえた。

「すみません。」

僕は小声で謝った。

檜佐木修兵。

彼は、この50年で正解を取得し隊長に上り詰めた。

副隊長は、こひなみだいぎ子日並大樹

斬魄刀は炎熱系らしい。詳しい情報は知らない。

まあ。この隊の紹介は置いといて。

とにかく僕ら三人は、ずっと掃除をさせられてするという始末。

もう、飽きた。

掃除はあと何日で終わるのだろうか？

たった一週間だったのにすごく長く感じる。

啓吾が掃除してるという部屋についた。

何だこれは。

これが部屋を見たときの第一印象だ。

いくらなんでも広すぎだ。

「啓吾　　！」

僕は啓吾を呼んでみた。

「はい。」

奥からくぐもった声が聞こえた。

「どこにいるの？手伝いに来たよ。」

僕は大きな声を出しながら前へ進んでいった。

「じじ、じじ。」

僕は啓吾を見つけた。

部屋の奥から掃除をしていたようだ。

「よ。僕は、あっちから掃除するからここ宜しく。」

「ああ。」

啓吾は、安堵した声を出した。

さすがにこの部屋を一人では、一日ではできなそうだ。

ふたりで分担すれば何とかなりそうだ。

3時間後。

部屋の掃除が終わり、僕たちは隊の食堂に行った。

その時、檜佐木さんに声をかけられた。

「よっ！掃除は終わったか？」

「はい。」

僕たちは、同時に答えた。

「そうか。今日で隊の大掃除は終わったからこれからは少し尸魂界についての基本的な知識をつける。勉強はうちの隊の図書室を使い。誰かに教えてもらいたいなら、俺に言え。」

「「はい。」」

また僕たちは同時に答えた。

そういい、僕たちは真央霊術院に向かって準備を始めた。

そして三日後。

あの日から、一週間。

僕たちは、一番隊舎に集まった。

忙しい一週間？（後書き）

これで、啓吾たちのお話は終わりです。

今度はまた一護たちの話に戻ります。

ちなみに目線は、水色です。

子曰並大樹は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

恋次の地獄？

仲間と 歩みを進める

けれど 一時だけ歩みを止める

後ろを振り返る

過去を受け入れ 前へ進め

「おい、ついたぞ。遊子、夏梨。」

俺は、瞬歩してる間、目をつぶってた2人に声をかけた。

「どっ？」

「ここは、三番隊。」

「お兄ちゃん。なんで三番隊にきたの？」

「まあ、行けばわかるって。お前らは知らないけどな。」

そう言い、俺は隊舎の扉を開けた。

*

*

*

＊

「お　い。れ　んじ　！」

「…。一兄何してんの？」

「俺の友達の恋次っていうやつを捜してんだ。」

「あっそう。」

俺の隣に、死神が通った。

「あの、すみません。ちょっといいですか？」

俺は、今通りかかった死神に話しかけた。

「はい、いいですけど…。」

「テっ！吉良さんじゃないすか！」

「やっぱり！一護君！」

俺は驚いた。

「阿散井君に会いに来たのかい？ちょうど今執務室に朽木副隊長たちも来てるよ。」

「えっ。ルキアたちも来てんのか。」

「ああ。こっち、こっち。」

そう言い、吉良さんは俺たちを執務室に案内した。

*

*

*

*

「久しぶりだな！恋次！」

「黒崎君！まさかこんなところで会うなんてね〜！」

「一護！この人なんなの？なんかさっきから一護みたいなこと言ってるよ。」

「っ。それ、どういう意味だ？」

「そのまんまの意味ですよ！」

「ねえ、一兄。一兄が搜してる人って、こいつ？」

「こいついうな！そこ！」

「良いではないか恋次。ほんとにその通りなんだから。」

「何が言いてえんだ、てめえは！」

「ほっほっほ。愉快じゃの〜。」

「夜一さん！こんなとこにいたんすか。」

「お兄ちゃんこれ…。」

「アハハ…。」

俺たちがきたときは、もうなんか言葉で言えない様だった。

「お前ら、何してんだ？」

俺は、ルキアたちに聞いた。

「何って。たつきに恋次を紹介してるのだ。」

「そうか。あつそつだ、恋次ー。俺たちをここにしばらく泊めてくれないか？」

「はっ。なんでお前たちまで泊めなくちゃいけないんだ。」

「俺達までって、どういう意味だ？」

「こいつらも泊まるんだとよ。ここに。」

「良いじゃねえか。別に。ついでに俺達まで泊めてくれよ！」

コンコン

「どうぞ。」

「十番隊隊長。日番谷冬獅郎だ。」

「とうしろーっ！」

俺は叫んだ。

「日番谷隊長。またなんで隊長が直々に。」

「いいだろ、暇だから。」

「お前の隊、暇なのか！」

「正確に言えば、松本が書類をためたせいで仕事の効率が悪くなってるだけだ。」

「あっそう。」

「ていうか、なんでここに黒崎たちがいるんだ！」

「たまたまだよ、冬獅郎。」

「そうだ！日番谷隊長からも言っちゃってくださいよ。」

恋次がすぎるように、冬獅郎に言った。

「何をだ。」

「こいつら全員、此处に泊まろうとしてるんすよ！どうにかして追いつかせませんか？」

「朽木たちは、朽木邸に泊めればいいだろう。だが、黒崎たちはだめだな。」

「なんで、すか？」

「あいつらは昨日俺のところに泊まったんだ。しかもこいつら、追
い返しても勝手に人の部屋から布団を持っていくからいみねえんだ。」

「おい、一護。そうなのか？」

恋次が聞いてきた。

「違う違う。俺たちはちゃんと冬獅郎に許可を取ったぜ。な、冬獅
郎。」

俺は、冬獅郎がいた場所に顔を向けた。

「もういないぞ。一護。日番谷ならさっき瞬歩で逃げたわ。」

「ほんとですか！夜一さん！」

「ああ。」

「逃げやがったな。あいつ。」

俺はつぶやいた。

「まあ、良いではないか一護。にしてもそのアイデア良いな。」

「良いって何が？」

俺は夜一さんに聞いた。

「勝手に人の部屋から布団を取ってくるっていうやつじゃ。」

「何言ってるんすか。夜一さん。まあ、俺たちはそうするけどな。」

「おい、一護！勝手に俺の部屋から布団を取ってここに居座ろうってか！」

「ああ。」

「ああ。じゃねーよ！ここに居座るな！その辺で野宿してろ！」

「ワ　　！この人ケチだね夏梨ちゃん。」

遊子が微妙に恋次に聞こえるか聞こえないかぐらいの声で恋次を侮辱し始めた。

「そうだな遊子。冬獅郎よりケチだ。」

夏梨が同意した。

「この人が隊長なんて嫌だね。」

「そうだな、遊子。こいつが隊長なんて嫌だぜ。」

俺も、同意した。

「あつ、一兄もそう思う？」

「もちろん。」

「おい、そこ。陰で人を侮辱するな！」

恋次が突っかかってきた。

「たった六人泊めるだけなのんな。」

「あと儂も。」

「夜一さんは、2番隊に泊まってください。」

「でも阿散井君ケチだね。」

「オッ井上もそう思うか。」

「うん。だって昨日は朽木邸に泊まったんだけど白哉さんは、快く良く泊めてくれたよ。」

「そうそう。でも驚いたな！。朽木さんが4大貴族なんて。」

たつきが言った。

「ルキアは、養子だよな。」

俺が言った。

「えっそうなの？」

「違う。兄様が結婚された方が私の姉上だから私は義理の妹であつて養子ではない。」

「そ、そうだっけ。」

「そうだ一護。忘れるな。」

最初こそは、恋次が泊めてくれないからどーのこーの言ってたのに、なぜか話はルキアが貴族ということになっていた。

「おい、俺も混ぜろよ!」

恋次が言ってきた。

俺たちは言い返した。思いつきり嫌味を込めて。

「「「「「「此処に泊めてくれなきゃ、話に混ぜませ
ん。」

「くっ。」

恋次がそうつぶや言ったのが聞こえた。

まあ、俺たちは無視して話を続けた。

「そついえば、夜一さんも4大貴族だよな。」

「そつじゃ。」

「「「えっ!夜一さんて、まさか人間?!」」」

「そつじゃ。…。言ってなかったかの?」

「うん。言ってなかった。」

「そうか。わしは人間じゃ。」

「くくくへへ　　…。」

衝撃の事実を知った三人は返事しかできなかった。

「…。あ　　もう、分かったよ！！泊めりゃ　良いんだろ。泊めりゃ　！！。」

ついに、しびれを切らしたのか。恋次が叫んだ。

「おつ。おい、皆恋次からok出たぞ！」

「ほんとか！一護。」

「おうよ！」

「じゃあ、お言葉に甘えて…」

「くくくくくくくく　お邪魔しま　　すくくくくくくく」

「はいはい。」

うわ、阿散井君大変そう…。

吉良はそう思った。

こうして、恋次の地獄(?)の日々が始まった。

恋次の地獄？

？（後書き）

どうですか？

またまたシリーズものです。

ルキアたちは、朽木邸に泊まってたんです。

目線は一護です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

恋次の地獄？ 吉良の巻（前書き）

最初に書くことのネタが尽きてしまったので、尸魂界の死神の名台詞を書きます。

恋次の地獄？ 吉良の巻

戦いには 命を守る戦いと 誇りを守り戦いがある。

b y 浮竹

「お い恋次。飯まだか？」

「そんなの食堂に行って食べ。」

「食堂はどこにあるんだ？」

「その角を左に曲がって、突き当りに出たら右に曲がる。んで次の角を左に曲がって、そうしてら……。」

「言葉で言われてもわかんないよ。恋次。」

「夏梨ちゃんの言うとおり！案内してよ恋次。」

「そうじゃ。案内せんか。恋次。」

「夜一さんは黙っててください。ていうかそこ！何気に俺を呼び捨てで呼ぶな。」

「良いじゃん。別に。ねえ遊子。」

「うん。」

「阿散井く　　ん。私もおなか減った。」

「あつ、あたしもあたしも！」

「だから食堂に行つて食えつての。」

「だからその食堂がどこにあるのかが、わからないのだ。」

「自慢げに言つな、ルキア。」

「おい、恋次。この書類全部お前が書くのか？」

「ああ、そうだけど。」

「意外とすごいな。」

「意外とつてなんだ。意外とつて。」

「ま、気にするな。」

「…。オツ良い所に来たじゃねえか、吉良。」

「ハあ？」

たつた今執務室に入つた僕は驚いた。

何せ此処はもう黒崎君たちに占領されてたからだ。

「いや。吉良ちょっと。」

阿散井君はそう言い、手招きした。

「ちょっとこいつらを食堂に連れて行ってくれねえか？さっきから、腹減ったってうるさいんだよ。」

「ん、うん。別にいいけど。」

なるほど。さっきの会話はこういう意味だったのか。

まあ、会話の内容からしてわかるけど。

取りあえず、だれが何を言ってるのかを整理しよう。

上から、黒崎君　阿散井君　黒崎君　阿散井君　夏梨君

遊子君　人間姿に戻ってる夜一さん　阿散井君　夏梨君

遊子君　井上君　たつき君　阿散井君　朽木君　阿散

井君　黒崎君　阿散井君　黒崎君　阿散井君　黒崎君

阿散井君という順番。

うわっ。阿散井君出番多！

そんなことを考えていると、阿散井君が声をかけてきた。

「そうか！じゃあ、早速だけど頼むわ。」

「わ、わかった。」

阿散井君……。君、今の自分の表情見てごらん。

あんまり喜んでる阿散井君を見て僕は思った。

*

*

*

*

「はい。着いたよ食堂に。食べるものは自分で選んでね。今日のメニューは、かつ丼定食と、サバの味噌煮定食の二つだよ。」

そう僕が言うのが早い。

七人は、早速定食を取りに行った。

ていうか、夜一さん……。ここで瞬歩使わないでください！

あとで注意しとかないと……。

ここで、あの七人は戻ってきた。

いくらなんでも早すぎなんじゃ……。

みんなの定食は……。

黒崎君　かつ丼。夏梨君　かつ丼。遊子君　サバの味噌煮。

朽木君　サバの味噌煮。井上君　かつ丼。たつき君　かつ丼。夜一さん　サバの味噌に。

なんかみんな予想通り。

夜一さんは、猫だから魚にしたのか？

「サンキュー。吉良さん。」

黒崎君が、代表としてお礼を言った。

「いやいや。それじゃ、僕はこれで。」

「おう。ありがとうな、ほんと。恋次とは大違いだな。」

「アハハ…。それじゃ。」

「おう。」

黒崎君。何気にうちの隊長を侮辱してるような気が…。

そう思いながら、僕は食堂から出て行った。

*

*

*

*

僕は執務室に戻っていつも通り仕事をした。

隊長の阿散井君も仕事をしている。

嵐のような七人は今食堂にいたので執務室はとっても静かだ。

「静かだね。阿散井君。」

「そうだな。」

僕はつぶやいた。

阿散井君は書類を見直しながら言った。

昨日、日番谷隊長にもらったものだ。

「よし。できた。」

阿散井君が言った。

どうやら書類はできたようだ。

「おい、吉良。この書類。一番隊だよな。」

「うん。そうだよ。」

「よし。ちょっと新人呼んでくる。」

そう言い、阿散井君は出ていった。

しばらくして、一人の死神を連れてきた。

茶色い髪の毛。細身の体。

名前は確か、かんはるあずさ柑春梓沙

彼女は、細身の割に戦闘においては、新人の中ですば抜けている。

新人、20人の中でゆうつ始解を会得している。

彼女はさすがに隊長相手なのでわたわたりしていた。

「これ、6番隊に届けてくれ。」

「はい。」

「じゃ。」

会話 短い！

そんなことを思ってる僕をよそに、柑春君は書類を届けに6番隊に行った。

「じゃ、吉良。俺はこの書類を一番隊に届けてくるわ。」

「行つてらっしゃーい。」

ガラ

ドアを閉める音が聞こえた。

そのあとに阿散井君のぎよつとした声が聞こえた。

ガラ

ドアが開く音がした。

阿散井君はもう帰ってきたのか？

僕はそう思い書類から顔を上げた。

えっ。

黒崎君…。

そういえばいたんだっけ。

「おっす。吉良さん。ところで質問なんだけど…。」

この一言から、黒崎君たちのおしゃべりが始まった。

これからは、鍵かつこの隣に誰が言ったのかを乗せてもらう。

「トイレどこだっけ？」黒崎君

「馬鹿。トイレはすぐそこですよ。昨日教えてもらったのにもう忘れたの？」 たつき君

「ああ。忘れた。」 黒崎君

「わお。驚いた。」 たつき君

「一兄、トイレに行きたいんじゃないの？」 夏梨君

「あ、そうだった。」 黒崎君

「早く行ってこんか。」 朽木君

ガラ

扉を開ける音がして

ガラ

扉を閉める音がした。

「にしても。一護ってホント忘れっぽいよね。」 たつき君

「うんうん。一兄はあたしたちが生きてた時からそうだったよ。ねえ、遊子。」 夏梨君

「ほんとほんと。これ買ってきて、って言ったら絶対忘れてくるもん。まあちゃんと買ってきたときもあったけどね。」 遊子君

「ふーん。あとさ、一護って人の名前とか覚えるの苦手だよね。」
たつき君

「あつそうそう。石田君の名前とか全然覚えてなかったよ。」 井上君

「そうなのか。それは知らなかった。」 朽木君

「そうなんだよ朽木さん。あれ、黒崎君、朽木さんの名前はすぐ覚えたのかな？」 井上君

「私の名前はすぐに覚えたな。名前だけな。」 朽木君

「名前だけってどういう意味？ルキ姉。」 夏梨君

「尸魂界とか死神とか虚とかはまったく覚えていなかった。」 朽木君

「そうなんだ。」 夏梨君

このおしゃべりいつまで続くんだろう。

僕は、そう思いながら書類を書いていた。

約束の日まで残り五日。

恋次の地獄？ 吉良の巻（後書き）

今回は、吉良目線で書いてみました。

どうでしたか？

吉良ってどんな感じかわからないんでキャラが崩壊してる気がします。（汗）

柑春梓沙は、オリキャラです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

恋次の地獄？ 三番隊とさようなら

… 貴様の問題だ 深い 深い問題だ 私はそれを訊く術を持つため。

貴様の心に 泥をつけず その深きにまで踏み込んで

それを訊く上手い術を私は持たぬ。

だから待つ。

いつか貴様が話したくなった時 話してもいいと思った時に…

話してくれ

それまで待つよ

私は

by ルキア
グランドフィッシャー編より

俺たちが三番隊舎に来てからもう、三日たった。

〃（イコール）約束の日まであと二日。

最初の二日は、初日見たく大騒ぎだったけど三番隊の隊舎にも慣れて、なんとなく

「そろそろここ出ようかな。」

とか思っていたらルキアが

「霊術院に向けて勉強したらどうだ。」

と言われたので俺たちは一昨日から真央霊術院に向かって三番隊舎で、勉強を始めた。

「おい、ルキア　これどどういう意味だ？」

俺は聞いた。

「どっいつってそのままの意味だ。」

「これ俺たちがここに来た時のものだよな。　なんか事実と違うねえか？」

「何が違うのだ。」

「ここ。」

そっつい、俺は文章に指を立てた。

「えーと。『藍染惣右介、市丸ギン、東仙要の三人は罪人朽木ルキ

アの体内にあつた「崩玉」を手にし「虚圏」へ逃走。その後、朽木ルキアの罪は解かれその際、侵入した旅禍^{リョウカ}「黒崎一護」を、死神代行として認めた。『…。どこが間違つておるのだ。』

「違う違う。井上が虚圏^{ウエコムンド}に連れ去られたとき。」

「はあ？『朽木ルキア救出の際、黒崎一護死神代行とともに侵入した旅禍、井上織姫が藍染の手先「破面」^{アラソカル}とともに「虚圏」^{ウエコムンド}に。』…どこが間違つてるか？」

「こんなことだったか？」

「井上に聞けばよからう。」

「さっきからそうしようとしてんだけどよ。井上はどこにいるんだ？」

「さあな。」

「まあ、いいや。で、なんで俺は歴史の勉強してるんだ。」

「お前の尸魂界の知識があまりに乏しいからだ。」

「それは、俺だけじゃねえだろう。」

「まあな。だが、井上も歴史の勉強をして、たつき、遊子、夏梨は霊圧上昇・解放の訓練をしてるのだ。」

「…。俺は鬼道の練習をすればいいんじゃないか？」

「よく気付いたな。これから鬼道の練習をするのだ。」

「はあ？今から！？」

「今からだ。その藍染の戦い以降尸魂界には、大きな事件はなかったからな。」

「そうか。」

「では、外に出ろ。」

*

*

*

*

「おい、吉良。なんか庭が騒がしくねえか。」

「そうだね。なんか、物が壊れている音が聞こえるような。」

「ちょっと見てくるわ。」

「行ってらっしゃい。」

*

*

*

*

「こうだ一護。破道の一衝^{シュウ}。」

そっつい、ルキアは指先を木に向けて言った。

その直後、指先から、弱い光線が出た。

「さっき詠唱は教えただろう。」

「そうだけだよ。」

「ならばやらないか。」

ルキアにそういわれ、俺はさっき教わった詠唱を唱え言った。

「破道の一　衝！」

結果は失敗。

弱い光線どころか、何も出なかった。

「何故出来ぬのだお前は！」

「そんなこと俺に言われてもしらねーよ！」

「もう一度言ってみろ！恋次でさえできたのだぞ！」

「嘘だ　！あの恋次にできるわけねーだろ！」

「それが出来ちゃうんだな！。これが。」

俺とルキアが言い争っているとき、突然後ろで声がした。

声の主は…恋次だ。

「わっ！脅かすなよ恋次！」

「別に脅かしてなんかないぜ。それより一護。お前破道の一もできねえのか！」

「で、できるさ！今からやってやるから、黙ってみてろ。あっそうだ、ルキア。」

「なんだ。」

「詠唱破棄でもいいか？」

「できるならな。」

「よし。じゃ。すう。」

俺は呼吸を整えた。

詠唱破棄にしたのは、そっちのほうが出来そうだったからだ。

つまり勘。

「破道の一 衝！」

俺は言った。

そしたら、ルキアの光線よりもはるかにでかい光線が指先から出た。

「どうだ、恋次。ルキア。」

「…。いや、まさか詠唱破棄で、できるとわな。」

俺は、恋次に聞いたのになぜかルキアが先に答えた。

「まったくだぜ。しかもルキアよりでかいな。」

「…。」

ルキアは無表情だ。

内心は、すんごい悔しんだろうな。

俺は思った。

「じゃあっ!!」

俺は、歓喜の声を上げた。

この調子で、破道は詠唱破棄で三十番台までいった。

「よし、次は赤火砲だ。」

「どうやるんだ?」

俺は聞いた。

「撃つ対象物に向かい、唱えるのだ。波道の三十一 赤火砲!」

ルキアはそう言い、木に向かって火魂を打った。

「ここからは、恋次も練習だ。」

「なんでだ！」

俺は驚いた声を上げた。

「あれから、五十年もたってるのに出来ぬからだ。」

ルキアが淡々と答えた。

「あれから五十年もたって、しかも隊長なのにできねーのか。」

俺は言った。

「う、うるせー！悪かったなでなくて。」

「とりあえず、やってみろ。まずは、恋次から。お前は詠唱ありで。」

「おう！『君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ 焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ』破道の三十一 赤火砲！」

そう言い、恋次の手からよくわからない赤い物体が出てきた。

「失敗だな。」

ルキアが言った。

「う、うるせー！」

「じゃあ、次一護。」

ルキアは、赤火砲を連続して撃ってる恋次をよそに俺に、言った。

「おう。波道の三十一 赤火砲！」

俺の手のひらから、ルキアよりでかい赤い火魂が出てきた。

「俺は成功だ！がんばれ恋次。そういえばお前隊長の仕事はいいのか？」

「あ
！！！！忘れてた！」

「おい、忘れんなよ……。」

俺は、叫んでる恋次を呆れ顔で見た。

「じゃ、俺は戻る！！！」

「おう。じゃあ、ルキア続き。」

「うむ。」

「お
い、いちに
い！」

「おにいちゃ
ん！」

「一護
！」

「黒崎く

ん！」

急に、声が聞こえた。

そこに、遊子、夏梨。たつき、井上が現れた。

「何やってるのお兄ちゃん？」

「鬼道の練習だぜ。遊子。」

「ふん。」

夏梨が答えた。

「お前らも練習すつか？」

「「うん！！！！」」

遊子と夏梨が同時に言った。

「お前らは？」

「えっ。私？！」

「ああ、そつだ。」

「やっていいのかな？たつきちゃん。」

「良いんじゃないの？」

「じゃあ、私たちもやる！」

「良いよなルキア。」

俺は一応ルキアに確認を取った。

なんだか、全部おれが決めてるみたいだと思ったからだ。

「ああ、もちろん。」

ルキアは答えた。

「サンキュウ。」

俺は答えた。

そうしてみんなで、鬼道の練習を始めた。

井上は、うまくできた。

予想通り。

意外と遊子、夏梨、たつきも鬼道がうまく出来ていた。

そして今日は、みんな破道、五十番台までやり一日が終わった。

そして次の日も、鬼道の練習、勉強。

そして、約束の日がやってきた。

恋次の地獄？ ？ 三番隊とさようなら（後書き）

どうでしたか？

ついに次回から、真央霊術院篇に突入です。

この話どうしたら終わるんだろう…。

いや、ちゃんとあらすじっていつかどういつぶうに話を持っていきたいかは決めてるんです。

なんか長引きそうですが…。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

立場の整理（オリキャラ多数）（前書き）

すいません。

次回から新章とか言っていました、その前に、皆の立場の整理をします。

オリキャラ多数です。

本編には、いつか出てくると思います。

立場の整理（オリキャラ多数）

一番隊

総隊長 山本 元柳斎

副隊長 雀部 長次郎

二番隊

隊長 碎蜂

副隊長 大前田 希千代

三番隊

隊長 阿散井 恋次

副隊長 吉良 イズル

新人

柑春 かんはる
梓沙 あずさ

四番隊

隊長 卯ノ花 烈

副隊長 虎徹 勇音

第三席

伊江村 八十千和

第四席

山田 花太郎

五番隊

隊長 新洋しんよう 芽衣めい

副隊長 雛森 桃

六番隊

隊長 朽木 白哉

副隊長 神谷かんだに 鈴れい

七番隊

隊長 狛村 左陣

副隊長 射場 鉄左衛門

八番隊

隊長 京楽 春水

副隊長 伊勢 七緒

九番隊

隊長 檜佐木 修兵

副隊長 子日並 こひなみ 大樹 だいき

十番隊

隊長 日番谷 冬獅郎

副隊長 松本 乱菊

十一番隊

隊長 更木 剣八

副隊長 草鹿 やちる

第三席

斑目 一角

第五席

綾瀨川 弓親

十二番隊

隊長 涅 マユリ

副隊長 涅 ネム

十三番隊

隊長 浮竹 十四郎

副隊長 朽木 ルキア

第三席

小椿 仙太郎

虎徹 清音

三番隊

柑春 かんはる
梓沙 あずさ

五番隊

新洋 しんよう
芽衣 めい

六番隊

神谷 鈴かんだに れい

九番隊

子日並 大樹こひなみ だいき

は、オリキャラです。

立場の整理（オリキャラ多数）（後書き）

これが、今の『護廷十三隊』です。

今回は、本編と関係ないので次話できれば、今日中に更新したい
と思います。

真央霊術院に向かい（前書き）

遂に新章突入です。

真央霊術院編です。

では、楽しんでください！

真央霊術院に向かい

兄貴つてのが どうして一番最初に生まれてくるか知ってるか…？

後から生まれてくる 弟や妹を守るためだ！！

兄貴が妹に向かって、殺してやる、なんて…

死んでも言っんじゃねエよ！！

by、一護 井上の兄貴が虚になった時より

あの日から、一週間たった。

俺を含めて、遊子、夏梨、井上、たつき、ルキアは今日の朝に三番隊舎を出た。

そして昼ごろに一番隊舎についた。

しばらく待つと、チャド、啓吾、水色がきた。

今まで九番隊にいたようだ。

そして、10分くらい待つと総隊長とともに石田が出てきた。

「お前どうして、そこから出てきたんだよ!」

俺は驚いて聞いた。

「君たちより早く着すぎたせいで僕は一番隊にいたんだ。」

「そ、そうか。なんかわりいな。」

そして全員そろった。

「これから、おぬしたちは『真央霊術院』の生徒じゃ。死神、尸魂界などの勉強に励むこと。」

総隊長が口を開いた。

「「「「「「「はい! (ム)」「」「」「」「」

俺たちは返事をした。

「では、朽木副隊長。真央霊術院への案内。頼んだぞ。」

「はい。」

「では、散!」

総隊長がそう言い、ルキアが瞬歩した。

俺たちは、ルキアに瞬歩でついて行った。

真央霊術院に向かい（後書き）

短いです！

本当にすいません！

次話はすぐに投稿します！

明日は休みなので、いつぱい更新するかもです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

寮（前書き）

今回は、長く書きます！！

では、第18話スタート！

寮

同じなんだよ　死んだやつも　残されたやつも

どっちも同じだけ淋しいんだ…！

ba・一護　井上の兄貴が虚になった時より

「よつと。」

あたしたちは、ついに霊術院についた。

やっと、皆を護れる力が手に入る。

一兄も。

遊子も。

そして、この世のすべての人を護れる力が…。

あたしは期待に満ちた眼で、学校を見た。

絶対に、死神になってやる。

あたしは心の中で誓った。

「朽木ルキアだ。」

ルキ姉が、扉に向かっていった。

よくよく考えると、あたしたちの編入って時期がずれてるんだよね。

確か今日は、2062年の七月初め。

ちゃんとした、日付も分からなくなってきた。

ま、いいや。

そんなことを考えていると、扉があきルキ姉が言った。

「お前たちの編入は、かなり特別だ。これからお前たちがこれから寝起きする寮、そしてお前たちがこれから通う学校、クラスについて説明する。貴様らが通うのは明後日からだ。明日は、制服や学校の校則などを説明する。分かったか？」

「おう！」

一兄が答えた。

「よし。とりあえずついてこい。最初は寮からだ。」

そしてあたしたちは、霊術院へ足を踏み入れた。

*

*

*

*

「ここだ。」

ルキ姉が急に止まった。

「これが…。」

あたしはつぶやいた。

此処が、これからあたしたちが住む寮か…。

見た目は、焦げ茶色の細長い隊舎。

寮は二つあって、一つ一つの寮の間は200メートルぐらい離れていて霊術院までの距離は約1キロメートル。瞬歩、3〜4回ぐらいでつくかな？

一兄だったら、2回も有るか、無いか。

これで、寮の見た目の説明は終わり。

ルキ姉が話し出した。

「ここは、見ての通り寮だ。右が女子寮、左が男子寮だ。そして、寮にもその寮の花、つまり、『寮花^{りょうか}』がある。これは、必ず覚えておけ。」

「分かった。」

あたしが答えた。

「女子寮は、ラベンダー。花言葉は許しあう心。男子寮は、スノーフレーク。花言葉は、純潔、けがれ無き心だ。覚えたか？」

「ちよい待てルキア。それって覚えなきゃいけないのか？」

一兄が聞いた。

「さっき言っただろう。」

「そうだな、大丈夫だと思うぜ。多分…。」

おいおい一兄。このぐらいちゃんと覚えろよ。

これから覚えなきゃいけないことなんていろいろあるのに。

「そしてまず女子寮から、紹介する。ちなみに女子寮には女子のみ。男子寮には男子しか入れないことになってる。勝手に入ったら、…いや、この先は言わないでおこう。」

「…………ちよっ、ちよっと待った！！！！」「…………」

あたし、一兄、遊子、たつき姉、織姫ちゃん、啓吾、石田が突っ込んだ。

「なんだよ、ルキア。そこで切るなよ！先が気になるじゃねえか！」

「いや、これは絶対に明日分かる。その位我慢しろ。」

いやいや、我慢しろ、ってルキ姉。一兄はそんなの無理だって知ってるでしょ。

「今教えるよ!」

ほら来た。一兄の反逆。そういうところが子供なんだよ。

「断る。今教えたってお前に理解できまい。」

ルキ姉。…。そんなにすごいお仕置きなのか？

「そんなにすごい罰なのか？」

わっ。一兄があたしと同じこと言ってる。

「そつだ。」

ルキ姉無表情。ほんとかどうかわかんないじゃん。

「もついい。」

一兄はあきらめたみたい。

「とりあえず、女子寮だ。遊子、夏梨、井上、たつき。ついてこい。」

そう言い、あたしたちはこれから住む女子寮に向かった。

*

*

*

*

寮の中は、案外綺麗だった。

一部屋、4人で2段ベッドが2つある。

あたしたちの部屋は、玄関から最初の角を左、その次の角を右に曲がったところにあった。

部屋には、それぞれ名前がありあたしたちが住む部屋は「桔梗の間」^{ききょう}。

ルキ姉から聞いたんだけど、桔梗は、^{ききょう}「気品」っていう意味があるらしい。

遊子とか織姫ちゃんならわかるけど、あたしと、たつきちゃんは気品のかけらなんてこれっぽっちもないと思んだけど…。

あつ、たつきちゃんに失礼か…。

それで、食堂はあたしたちの部屋から廊下を出て左に曲がりそのまま、まっすぐ進んだところ。

食堂の中は、まるでどこかのカフェのような匂いを漂わしていながら、なんとなく和風な感じもする。

あたしの口では言えないような感じた。

取りあえず一言でいうと、とってもおしゃれだ。

そしてお風呂は、部屋に一つとあたしたちの部屋から左に曲がり食堂を通り過ぎ次の角を左のところにある。

銭湯並みの広さ、でもお風呂のデザインはなんとなく古い。

江戸時代の五右衛門風呂みたいだ。

…。このぐらいで、女子寮の説明は終わった。

あたしたちは、外に出た。

そこには、一兄たちが待っていた。

隣には、なぜか恋次がいた。

「おう、ルキア。そっちは終わったか？」

「うむ。後は頼んだぞ恋次。」

パチン

ふたりは、ハイタッチをした。

そういえば、女子寮には女子しか、男子寮には男子しかはいれなかったんだっけ。

そして、一兄たちは、男子寮に入っていた。

*

*

*

*

一兄たちが出てきた。

あたしは一兄に男子寮はどんなかを聞いた。

「ああ、そうだな。まず俺たちの部屋が玄関を上がって最初の角を右そして次の角を左に曲がったところにある。で、部屋には一つ一つ名前がついてあって俺たちの部屋の名前は『朝顔の間』。確か、花言葉は……。あー、そうだ。花言葉は、固い約束か、結束みたいな。んで、食堂があって、俺たちの部屋を出て突き当りを右、で、玄関と反対方向にまっすぐ進んで次の角を左に曲がったところにある。で、食堂はカフェみたいな感じだ。で、最後に風呂。部屋に一つと食堂を出てというか、玄関からまっすぐ進んで突き当りを左に曲がったところにあつて広さは銭湯で見た目は五右衛門風呂か。まあ、そんなとこだな男子寮は。そっちはどうだったんだ？」

あたしが一兄に聞いてるのに逆に聞かれた。

「ン。女子寮もそんな感じ。一応いうけどあたしたちの部屋の名前は『桔梗の間』。花言葉は気品だつてさ。あたしからすごいかけ離れてると思わない？」

「そうだな。お前らの部屋は一部屋何人だ？」

「んと、よ、4人だよ、お兄ちゃん!!!」

突然遊子が割り込んできた。

遊子のことだから、さっきから一兄と話してるあたしを見つけて自

分も話したいと思ったんだろうな。

遊子はまだまだお兄ちゃんっ子か。

「そうか。俺たちは一部屋五人だ。」

「ふーん。」

「お兄ちゃん！お兄ちゃんはどうだったの？」

遊子が一兄に聞いた。

一兄はさっきあたしにした説明と同じことを言った。

一兄も大変だね！。

あたしはそう思いながら、今度は霊術院の本校舎に足を踏み入れた。

寮（後書き）

どうでしたか？

夏梨目線で書きました。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエストなどなどお待ちします。

クラス（前書き）

クラス発表です。

19話スタート！

クラス

こうして生まれてきたんだよ！

自由に生きて 自由に死ぬ権利ぐらいあるハズじゃねえか！！

虫だろーが 人間だろーが…

オレたちだって… 同じだ…

だからオレは殺さねえ…

何も… 殺さえた…！

by、コン 改造魂魄編より

「よし、これからお前たちが明後日から通う学校を案内する。」

「とつ。その前にお前らのクラスを発表する。」

「まず、一護、石田、井上、チャド。」

「お前らは、六年生に編入だ。クラスは、六年一組に、一護と井上。二組に、石田、チャドだ。」

「次に、遊子、夏梨、たつき、啓吾、水色。」

「遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色は四年に編入だ。クラスは、遊子・夏梨・たつきが一组。」

「啓吾・水色は二組だ。」

「分かったか？」

ルキアと恋次が交互に言った。

俺は、井上と同じクラスか。

というかいきなり六年か。

「因みに言つと一組が、特進クラスだ。」

「ちょっと待った。それじゃあ、僕は黒崎より劣ってるというのか！」

「…。そういうことになるな。」

ルキアは、石田に淡々と答えた。

俺が石田より上なんてなかなかいい気分だ。

「何故だ！黒崎は霊圧コントロールが下手だろ！」

「一護は、鬼道ができるようになったぞ。」

「はあ！？あの黒崎に鬼道ができる！？」

「おい、あのってどういう意味だ、石田！」

「お前は、鬼道が出来なかったはずだといってるんだ。」

「俺は言つとくが、鬼道が使えるようになったぞ！見せてやるつか
！！」

「ちょ、やめなよ一護。あんたの食らったらしばらくは立ち上がれないよ。」

「そつだよ、一兄。」

「やめてよ、お兄ちゃん。」

「黒崎君の鬼道は朽木さんよりすごいから、やめてよ。」

「そつだ一護。お前が本気を出したらいくら私でも止められん！！」

俺が、石田に向かって鬼道を使おうとしたら、たつき・夏梨・遊子・井上・ルキアの順で止めてきた。

石田は、意味がよくわかってないようだ。

俺がルキアよりすごいができる。

このことが石田の思考を乱したようだ。

「いや、皆止めるな。黒崎。そんなにすごいなら見せてくれ。」

「良いぜ！」

石田なんだよ。開き直ったのか？

俺は、石田に向かって何をしようか考えた。

「お　い、石田。何をやってほしい？」

「そんなこと聞くのか…。そうだな…。じゃあ、朽木さんがよく使ってる、赤火砲とか、蒼火墜とかか。」

「分かった。」

どっちにしようかな。

じゃあ、蒼火墜で。

「行くぜ石田！破道の三十三　蒼火墜！」

そう言い、俺の手のひらからはバスケットボール並みの大きな蒼い爆火が出た。

「わあ！」

石田はそう言い、飛廉脚で俺の隣に移動した。

「どうだ！」

俺は、石田に言った。

「まさかな…。」

なんだよ、こいつ。人を褒めるってことを知らないのか？

まあこいつに褒められてもあんまし嬉くねえが。

「もういいか？」

恋次が聞いた。

「ああ。」

俺が答えた。

「それじゃあ、これから校舎を案内する。皆しっかりついてこいよ！」

恋次がそう言い校舎に入っていった。

俺たちは後について行った。

*

*

*

*

「ここは、四年の校舎だ。遊子・夏梨・たつき・啓吾・水色はよく覚えておけ。」

ルキアが言った。

「このクラスが一组。隣が二組だ。一组の責任者は、」

「責任者って何？」

遊子が聞いた。

「責任者とは、そのクラスの先生のことだ。課目によって担任は変わるがおもに授業をするのが責任者という。」

「ふーん。」

「で、その責任者って誰？」

夏梨が聞いた。

「このクラスの責任者は、淫大^{いんだい} 任海^{とつみ}だ。明後日会つだろう。聞きたいことはその時、詳しく聞け。」

ルキアは質問しようと口を開き始めたたつきを遮った。

「次に二組だ。ここの責任者は梨路^{なしろ} 紅衣^{くい}だ。分かったか？」

「うん。」

啓吾と水色が答えた。

「次は、六年生だ。」

ルキアはそう言い、階段を上って行った。

*

*

*

*

「ここが、六年生がいる校舎だ。」

「ふーん。」

案外普通なんだな。

俺はそう思いながらルキアの後をついて行った。

ドン

俺は誰かにぶつかった。

「っ！いつてーな！」

そう言い、前を見た。

俺とぶつかったのは、全体的に小柄な男だった。

此処にいるってことは、六年生か？

「いった　　！あ、す、すいません！」

「良いつて。前を見てなかった俺にも非はあるし。」

「いや、すいません！」

「だからいつて。」

俺はあきれながら言った。

「あ、あの。」

「なんだ？」

急に、小柄な奴が声をかけてきた。

「さっき、学校の前でとてつもない蒼火墜を撃つてた人ですよね。」

こいつは、遠慮がちに聞いてきた。

学校の前でつてことは石田に向かって撃つたやつだな。

「ああ。そうだぜ。」

俺は答えた。

「やっぱり！！あの、僕、津ノ井^{つのい} 遼^{りょう}といいます。あなたは？」

「ん。俺か。俺は、黒崎一護だ。宜しくな。」

ピキン

時間が固まったような音がした。

どうやら、ほかの六年生も教室の窓から俺たちのことを見ているみたいだ。

遼も、その六年生もみんな固まった。

「…。皆どうしたんだ？」

「言っただろう。ここではお前たちは有名人だと。」

……。そういえば。

「ええええええええ

！！！」

遼は、鼓膜が破れるほどの声を出した。

「き、君。いや、黒崎さん。あなたは、あの黒崎さん？」

「あ、ああ。そう、だけど。」

あのって言われてもわかんないけど、ルキアを見たらとりあえずそういつとけみたいな視線が返ってきたのでそういった。

「……………」

遼は、口をパクパクさせていた。

酸素を吸おうとしてるのか。

それとも、驚きすぎて声が出ないのか。

その時窓から見ていた、六年生がつぶやいた。

「本物だ…。オレンジ色の髪。身の丈ほどの斬魄刀。そして何より、

後ろにいる死神のメンツ。三番隊隊長、阿散井恋次。当時は、六番隊副隊長。そして、十三番隊副隊長朽木ルキア。黒崎一護に、死神の力を明け渡した張本人。当時は十三番隊の席官にもなっていない。

「

そいつは、教科書をぺらぺらめくりながら言った。

「本物…。」

遼がつぶやいた。

「えっと、い、いろいろ聞きたいんですけど…。」

「良いけど。」

俺は、六年生の一人に聞かれ、答えた。

その瞬間、此処にいる皆がいつきに俺に質問した。

「本当に、あの藍染を倒したんですか！」

「一度、死神の力を失ったというのは本当ですか？」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「何歳なんですか？」

「斬魄刀は斬月というんですか？」

「あなたのお父さんが死神だというのは本当ですか？」

「朽木副隊長・阿散井隊長は黒崎一護とどういつ関係ですか？」

「そこにいるのは、妹さんですか？」

「そこにいるのは、井上さんと茶渡さんと滅却師クインシーの石田さんですか？」

俺は耳を抑えた。すごい声だ。

まさか質問の矛先が遊子たちや、石田達に向くとは思わなかった。

「すう

。スト

ツプ！！

！！！！」

恋次が叫んだ。

そりゃそうだろうな。

俺は思った。

「質問は、順番にだ。」

おいおい、お前。

何言ってるんだ。

というか、俺たちのクラス紹介はどうしたんだよ。

俺は思った。

クラス（後書き）

何か微妙ですね。

今回は、一護目線です。

やっと、遊子たちの教室が紹介です。

クラスメイト等は、もう少し先になりそうです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

クラス？（前書き）

今回は、六年生です。

第20話スタート！

クラス？

そうだ、こうしねえかチャド。

オマエは今まで通り自分の為に誰かを殴ったりしないでいい。

そのかわり、俺のために殴ってくれ。

俺はオマエのために殴ってやる。

オマエが命をかけて護りたいモンなら、俺も命をかけて護ってやる。

b y、一護

チャドとの約束

「あの藍染を倒したって本当ですか？」

「本当だ。次！」

「一度死神の力を失ったというのは本当ですか？」

「本当だ。次！」

「なんでここにいらっしゃるんですか？」

「明後日から俺たちはここに通うからだ。次！」

「何歳なんですか？」

「それは俺が死んだときのを聞いているのか？それとも今の年齢を聞いているのか？」

「どっちもです。」

「俺が死んだときの年齢は…確か24〜5歳か。今は…70ぐらいか？」

「いや、私に聞かれても…。」

「まあいい。次！」

「斬魄刀は斬月というんですか？」

「そうだ。次！」

「あなたのお父さんが死神というのは本当ですか？」

「そうだ。次！」

「あなたは、朽木副隊長・阿散井隊長とどついう関係ですか？」

「仲間だ。次！」

「そこにいるのは、妹さんですか？」

「そうだ。次！」

「そこにいるのは、井上さんと茶渡さんと滅却師^{クインシー}の石田さんですか？」

「そうだ。次！」

「…。一兄。今ので最後。」

あたしは、さつきから質問攻めにあっている一兄に言った。

「ほんとか、夏梨。」

「うん。」

「は
あ。」

一兄は疲れ切った声を出した。

「なんで恋次あんなこと言ってるんだよ。質問攻めにあうのは俺じゃねえか。」

「まさかあんなことになるとは、思わなかったんだよ。わりーな。」

「もういい。」

「ねえ、朽木さん。私たちの教室はどこ？」

織姫ちゃんが周りをきよろきよろ見ながら言った。

「そこだ。」

ルキ姉が指を指した。

その教室は、遼がいる教室だった。

てっ、遼。何気に特進クラスだったのか。

一兄も驚いた顔をした。

「マジか。」

一兄がつぶやいた。

*

*

*

*

「此処が明後日からお前らが通う教室だ。」

ルキ姉が言った。

ルキ姉は堂々としていったが一兄たちは入り口で止まってる。

まあ、さっきあんな目にあっただからしょうがない気がするけど。

というか、ルキ姉。周り見てみなよ。

なんか皆ひそひそ話してるよ。

内容は多分…

明後日から一兄たちがこの学校にしかもこの教室に来ることだろう。

皆、一兄が死覇装を着ててあたしたちが普通の流魂街の服を着てる
ってことに気付いてんのかな？

そんなこと関係ないけどさ。

「で、このクラスの責任者は伊土 日凧だ。覚えてか、一護。」

「ああ。多分…。」

一兄の答えがずっとこれだと思うのはあたしだけかな。

一兄は、遠慮がちに教室に入っていた。

「遼、お前このクラスだったのか。」

「うん。じゃなくて、はい。そうです。」

「なんでお前敬語なんだ？」

「いや、有名人ですから…。」

「敬語なんて使うなよ。これからはクラスメイトだからな。」

「そう、かな。」

「そうだ。宜しくな遼。」

「こ、こちらこそ。宜しく。黒崎さん。」

「一護でいいよ一護で。」

「じゃ、じゃあ一護。」

「そうそう。」

「一つ質問していい？」

「なんだ？」

「なんで一護は、死神の姿なのにここに来てんの？」

「俺は、此処に鬼道と、歴史だけ習いに来たんだ。それ以外は〇、
kだからな。」

「ふーん。そうなんだ。」

「なんか、始まっちゃったよ。一兄の自己紹介。」

「そんなの明後日やれって。」

「その時、ルキ姉が一兄に声をかけた。」

「おい、一護。次行くぞ。」

「おう。じゃな、遼。また明後日。」

「うん。じゃあね。一護。」

「一兄はそう言い、こっちに来た。」

そして、ルキ姉が二組のことを話し出した。

「一組の隣が二組だ。二組の責任者は、久仁丘くにおか 杏あんだ。分かったか？」

「ああ。」

「ム。」

石田とチャド兄が言った。

ああ。やっと、責任者の説明、終わったよ。

なんか長く感じた。

なんか他に、説明ってあったかな？

「次は、真央霊術院についてだ。」

まだあんのか。

「はーあ。」

あたしは、だれにも聞こえない程度の大きさで溜息をついた。

「これが最後だ。そう溜息をつくな夏梨。」

ありゃ。ルキ姉に聞こえたみたい。

今の言葉は、あたしの耳元で言ってくれたから一兄たちには聞こえなかったはず。

これで最後！

あたしはそう思いながら、あたしに一言声をかけていつの間にか前を歩いているルキ姉にあたしたちはついて行った。

クラス？（後書き）

短いですね…。

今回は、夏梨目線です。

は　あ。早くみんなを霊術院に通わせたいです。

まだまだか。

それとももう少しか。

後者ですかね。

番外編のほうもよろしくです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしています。

明日

残念なことに 受けた恩を忘れて ヘラヘラしてられるほどクズでもねえんだよ！

by・一護 第2話より

「ここ、『真央霊術院』は、二千年以上の歴史を持ち、未来の鬼道衆・隠密機動・護廷十三隊を作る若者を育成するための学院。課程は6年。飛び級や、院を経由せずに十三隊への入隊もある。かつては死神統学院と呼ばれ、死神のみを育成する機関だったが、組織の巨大化に伴い現在の呼称になっている。学級によってランク分けがあり、試験に於いて最も優秀な成績を認められた者達が集められた「特進学級」もある。」

一護たちは、寮でゆういつ男女が共に過ごせる『共室』^{きうしつ}にいた。

そこにつくや否や、ルキアはここ真央霊術院について説明を始めた。

もちろんみんなの頭では、ルキアの言ってることが理解できず…。

ルキアに質問ばかりをしている。

その中にはなぜか隊長の恋次もいた。

オマエなんで隊長のくせに此処にいるんだよ。

仕事はどうした。仕事は。

などなど。皆は心の中で思っていた。

「何か質問はあるか？」

「はい。結局のところ俺たちは、霊術院で勉強をすればいいってことだろ。」

一護が聞いた。

「まあ、そういうことになる。ほかに質問は？」

「ありませ ん。」

代表してたつきが答えた。

周りのみんなはもう疲れ果てている。

遊子なんて半分寝ているようなものだ。

「そうか。じゃあ、今日はこれで終わりにする。今日はいろいろ疲れたからな。」

ほんとだぜ。

一護がそうつぶやいた。

「それじゃあ、各自寮に戻りよく寝ること。明日は校則やら規則や

ら。頭に叩き込まなきゃいけないものがたくさんある。みな、よく寝ておくように。それでは、散。」

そう締めくくり、ルキアは十三番隊舎に瞬歩で戻っていった。

恋次も、瞬歩で三番隊へ。

一護たちはみんな思った。

「 此処で瞬歩使っていいのかよ！ 」

ルキアたちが使っていたんだからおれたちも使っていいはず。

そう思いみんなは瞬歩で自分の部屋に戻った。

*

*

*

*

「は 。 疲れた。」

たつきが言った。

「ほんとだよね。 たつきちゃん。 まさか朽木さんがこんな時間まで講習会をやるなんてね。」

「ほんとだよ。 でも内容は難しいからあんまし入ってないんだけどね。」

べえ

夏梨はちよこつと舌を出しながら言った。

「ほら遊子。起きて。」

夏梨は、半分寝ている遊子を起こした。

夏梨は遊子をおぶって瞬歩してここ「桔梗の間」まで連れてきたのだ。

「ん…。うん。あれ、夏梨ちゃんおはよー。今何時？」

「今は、十二時二十六分。真夜中のね。」

「真夜中の…。」

遊子は一気にすべてを思い出したようだ。

「あ……！！もう、講習会終わっちゃった？」

「うん。」

「疲れたね～。早く寝ようよ。」

遊子が言った。

あんた今まで眠ってたでしょ。

夏梨は思った。

「だから今から寝るの。でも、あたしはシャワーを浴びるけどね。」

「えっ。ここってシャワーあるの。」

「なかったでしょ。遊子。あたしはお湯を浴びるっていったの。」

ポン ポン

なぜか、わかった時に出る音が二回聞こえた。

どうやら織姫ちゃんも遊子と同じことを考えていたようだ。

この二人は、気品じゃなくて天然か。

夏梨はそう思いつつ部屋についているお風呂に向かった。

*

*

*

*

「今日は、疲れたぜ。」

一護がボタンと布団の上に倒れた。

「ほんとだね。一護。まさか朽木さんが。」

「あんな熱心だとは思わなかった…か。」

「あたり。」

一護は、水色の言葉を引き継いだ。

「もう俺は寝る！お休み。」

「お休み一護。」

「お休み。俺ももう寝るわ。」

「む。」

「僕は風呂に入る。」

そう言い、石田は風呂に向かった。

「なんだよあいつ。これからあいつと同じ部屋で一年間過ごすなんて嫌だな。」

一護のこの一言でみんなの今の心中を語った。

*

*

*

*

次の日

「起きろ ！！」

ルキアが威勢よく遊子たちがいる部屋に入ってきた。

時間は八時ジャスト。

「もう起きてるよ。」

そう言い、夏梨は起き上がった。

ほんとは、ルキアが来る一時間ぐらい前から起きていたのだ。
変な夢にうなされて。

「ん。おはよ。ルキアちゃん夏梨ちゃん。」

「おはよ。遊子。」

夏梨の次に遊子が起きた。

その次にたつき。

最後に織姫。

「さあ、今日もみんなでいろいろやろう！」

ルキアが元気よく言った。

色々って何？

皆はこの言葉を聞いたときこう思ったのだ。

*

*

*

*

「起きろ。」

男子寮にも女子寮にルキアがきたのと全く同じタイミングで、黒い

死覇装をまといその上には白い羽織を羽織った赤い髪の毛のつんつん頭がきた。

「うっ、うるせー。」

一護が言った。

「あと五分だけ。」

啓吾が言った。

「もう起きてるよ。」

水色が言った。

「なんだい君たち。はやく起きないか。」

石田が洗面所から叫んだ。

石田の声にむかついたのか一護は飛び起きた。

「黙ってる。」

一護はつぶやいた。

どうやら今の声は聞こえなかったようだ。

「さあ。今日は制服と教科書と校則だ。みんな頑張れ。」

恋次がそう言い残し瞬歩で消えた。

今日は隊長の仕事をするのか。

一護たちは思った。

*

*

*

*

「今日は、まず最初に制服を配る。着るのは明日だぞ。」

ルキアはそう言い、自分の後ろにある大きな袋の一つに手を付けた。

ああ。死覇装も今日で終わりか。

一護は配られてくる、制服を見ながら思った。

学校の制服なんて何年振りだろうな。

制服を手に取りながら、思った。

「すぐにその制服はしまうこと。ほら、早くしまえ。」

ルキアが言った。

「へいへい。」

「あと、教科書も配るぞ。これはすぐに名前をかけ。」

「ペンがないよ。ルキアちゃん。」

遊子が言った。

「儂が渡す。」

ルキアの後ろで声が聞こえた。

夜一さん……。今日は猫の姿だ。ほんと、どこにでもいるな。

皆は心の中で思った。

「ほれ、ほれ、」

夜一はそんなことお構いなしに口にペンを加え皆の机の上に配っていった。

そしてすべての教科書を、配り終え名前を書き制服とともにしまいそして校則などの説明を聞いた。

校則は「廊下で鬼道を使ってはならない。」とか

「勝手に寮に帰らない。」とか。

普通だった。

そして、今日が終わりみんなの学校生活がスタートした。

明日（後書き）

遂に次回から学校生活スタートです！

楽しみにしててください。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

クラス part? 四年一組

敗北が恐ろしければ強くなればいい！

仲間を護れぬことが恐ろしいければ！ 強くなって必ず護ると誓えばいい！

内なる虚が恐ろしければ それすら叩き潰すまで強くなればいい！

ほかの誰が信じなくとも ただ胸を張ってそう叫べ！

私の心^{なか}にいる貴様はそういう男だ一護！！

by ルキア アニメ 115話より

「おつ。やっと起きたね夏梨ちゃん。大丈夫？なんかうなされてみたいけど。」

あたしは起きてすぐにたつきちゃんに声をかけられた。

「ん。大丈夫だよたつきちゃん。心配してくれてありがとう。」

嘘だ。ほんとのところここ最近、変な夢にうなされていた。

『私の名前は だ。聞こえるか。夏梨。私の名前は だ。』

夢では必ずこうやって誰かが話しかけてくる。

あたしは

『何、言ってるの？よく聞こえない。あんたの名前は何？』

あたしがこう聞くと声の主は

『まだ聞こえぬのか。夏梨。』

といい、悲しそうな声を出す。

そして消える。

たった、この動作だけなのに時間はすぐたっている。

どうやらこうゆう風にうなされているのはあたしだけではなさそう
だ。

遊子も最近うなされてるように見える。

口には出さないが、遊子もうなされているのだろう。

あたしと同じように。

「さ、今日からあたしたちは霊術院の生徒だよ！！60年以上ぶりの
学校生活をエンジョイしよう！」

たつきちゃんが元気な声を出した。

そうだ。あたしたちはこれから力を手に入れるための意味の修業に入るんだ。

皆を護る力を。

もう、一兄にひけはとらない。

もう誰にも護ってもらわない。

あたしが護ってやるんだ。

あたしはそう思い拳に力を入れた。

「さあ、早く制服に着替えよ。夏梨ちゃん。」

さっきからうつむいているあたしに向かって遊子が声をかけてきた。

「うん!!。」

あたしは、元気いっぱいに答えた。

そんなあたしの声に肝を抜かれたのか。

遊子は少し驚いた表情をしたが、またいつもの顔に戻り、

「じゃ、着替えよ!!。」

そう言い、あたしたち四人は新しい制服に腕を通した。

*

*

*

*

「夏梨ちゃん！！こっちこっち！」

「待つてよ遊子。」

「落ち着けて。」

「落ち着けなんて言わないでよ！！やっと、皆を護れる力が手に入るんだよ！！お兄ちゃん！」

「そうだな。」

遊子は、はしゃぎにはしゃいでいた。

あたしたち四人は寮の前で一兄たちと合流した。

遊子は一兄を見つけるとすぐに駆け出し、一兄に抱き着いた。

そして、たつきちゃん、織姫ちゃん、あたしの順で一兄に駆け寄った。

もちろん一兄の後ろには、啓吾、水色君、石田、チャド兄がいた。

「お前ら、準備できたか？」

「もち。早く行こう！一兄！！」

一兄の問いにあたしが答えた。

「そうだな。」

そして、一兄は歩きだした。

そして今の現状に戻る。

やっぱり遊子もあたしと同じ考えなんだ…。

あたしは、遊子を見ながら思った。

「そうだよ、遊子ちゃん。あたしたちがこれからみんなを護るために勉強しに行くと思うとなんか体がゾクゾクしちゃうよね。」

織姫ちゃんが遊子に同意した。

あたしも早く学校に行きたい。

「早く行こうよ一兄！！もう、瞬歩で行っちゃおうよ！！」

あたしは一兄たちの前に回り込んで言った。

早く行きたい。

そう思いあたしは提案したのだ。

「いいのか。ここで瞬歩使っても。」

一兄が聞いてきた。

そんなこと答え決まってるじゃん。

「一昨日、ルキ姉に恋次が使ってたじゃん。」

「そうか。」

「校則第24条・無断で瞬歩を使うことを禁ずる。」

急に石田が声を発した。

そういえばルキ姉がそんなこと言ってたような…。言っていなかったような…。

「それなんだよ石田。」

「昨日朽木さんが言ってた校則だ。」

「そんなこと言ってたか？」

「言ってたんだ。」

まじめだな。

あたしは思った。

「だ、そうだ。夏梨。残念ながらここでは瞬歩は使えないだよ。」

「チエツ。」

あたしは言った。

「ほら、もうそこだよ夏梨ちゃん。」

あたしの今の不満の気持ちを読みとったのか。

たつきちゃんが言った。

本当に校舎はすぐそこに迫っていた。

ああ。もう少しで…。

あたし今日何回これを考えたんだろ。

あたしは思った。

*

*

*

*

「此処でお前たちとはさよならだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「おう！」

やっと教室についた。

確か此処のクラスの責任者は淫大 任海だったかな？

あたしたちは教室の扉を開けた。

「あら、あなたたちが今日から編入してくる子たち？」

急に声が聞こえた。

聞いていて心地の良い声だった。

声の主は、淫大 任海さん。

彼女は、薄いピンクの花が描かれた純白のワンピースに身を包んでいた。

瞳の色は、深緑。髪の毛は横で束ねている。見た感じ下したときは、背中の中間ぐらいなんだろう。

「はい。そうです。」

たつきちゃんが代表して答えた。

「さあ。中に入って。あなたたちを紹介するわ。」

あたしたちは言われるままに動いた。

何をどうすればいいかわからないからだ。

「そう緊張しないで。あなた達名前は何？」

「あたしは、有沢竜貴です。」

「私は、黒崎遊子です。」

「あたしは、黒崎夏梨です。」

あたしたちは順番にクラスメイトに向かって自己紹介をした。

「黒崎ってあの黒崎一護のご兄弟か何か？」

淫大 いんだい 任海 とつみさんが聞いてきた。

「はい。妹です。」

遊子が答えた。

急に教室がざわついた。

一兄…。いったい何をしたの？

あたしは思った。

「そう。皆ざわつくのをやめて。後でお兄さんのお話を聞かせてもらってもいいかしら？」

淫大 いんだいさんの一言で教室がまた静かになった。

「はい。いいですよ。」

あたしが答えた。

「ありがとう。じゃあ、あなたたちが座る席は…。」

そう言うと、淫大^{いんだい}さんは教室中を見渡した。

それにつられあたしも見渡した。

よく見ると、教室の中に生徒がたくさんいてきちりと前を見て段々となっている机にある椅子に座っている。

さすが特進。皆きっちりしてる。

けどあたしもこれからはここで過ごさなくちゃならないんだ。

そう思うとなんか不安になってきた。

「あなた達は、あそこに座ってもらえるかしら。」

急に淫大^{いんだい}さんが声をかけてきた。

「はい。」

たつきちゃんが答えた。

あたしたちが座る席は、一番上の右から数えて三番目のところ。

あたしたちはそこに向かって歩き出した。

机の前につくと三人で一つの机に座ることが分かった。

そして、あたし、遊子、たつきちゃんの順で席に座った。

「よろしく。」

あたしの隣で声が聞こえた。

通路を挟んだ隣の子だ。

見た目は、髪の毛を下していて色は黒。目の色は綺麗な群青色のか
わいらしい女の子。

「よろしく。」

あたしは答えた。

そうして今日が
が始まった。

あたしたちの第二の人生とも呼べる日常

クラス part? 四年一組（後書き）

どうでしょうか。

今回は夏梨目線です。

ほんとは一護目線にしようと思ったんですが、此处は4年から行くということにしました。

次回は、水色たちのクラスです。

また朝から始めますよ！

少しハシヨリますがね（笑）

責任者の名前覚えてますか？

覚えていただければ、幸いです。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

クラス part? 四年二組(前書き)

今回は、水色目線です。
啓吾目線は書きません。

というか、書けません。

番外編を投稿しました。

皆の死んだ日を詳しく書いていこうかと思っています。

第1弾は一護と遊子の死んだ日です。

題名は「ありがとう」です。

良かったら読んでみてください。

では、第23話スタート!!

クラス part? 四年二組

思い出したんだ、

俺がどうしてこんなにもお前を助けたかったのか。

ありがとうルキアお陰でやっとな雨は止みそうだ。

by 一護 ルキアへのお礼

『水色。僕の姿が見える?』

急に声が聞こえた。

『誰?』

『僕の姿見えないの?』

『どこにいるんだ。君、誰?』

『そうか。まだ僕は見えないのか?』

そう言い、声の主は消えた。

僕は考えた。

今のは、いつたい。

パチ

目が覚めた。

ということは今のは夢か。

それにしても鮮明な夢だった。

周りは、見渡す限り草原でどんな時に行ってもそこは晴れている。
だが暖かさはあまり感じない。

あんなに太陽が出てるのに。そして、いつも何かがある。川だった
り、花だったり、鳥だったり。

いつも違う。最近の僕の夢はずっとこれだ。

そこにいると急に声が聞こえる。

『僕の姿見える？』

という、どこか幼そうな声が。

もちろん見えない。

ただ、その声が聞こえるときに限って僕がいる草原に霧が出てくる。

この夢はなんなのか。

一護が目覚ましたら聞いてみよ。

そう思い布団を出た。

時間は、朝の5時38分。

早い。これじゃ、誰も起きてないか…。

取りあえず布団をたたんで、皆より一足先に制服に腕を通した。

*

*

*

*

僕は散歩していた。

寮のまわりをぐるっと。散歩というかは疑問だが。

だけどやっぱし暇なので寮に戻った。

なるべくゆっくり。時間稼ぎをしながら。

一護もう起きてるかな？

そう思いながら、僕は部屋をのぞいた。

アッ起きてる。

驚いたことに一護はすでに起きていた。

しかも制服を着ていた。

時間は6時5分。

まだまだ十分早い。

何で起きたんだろ？

「！。おつ、水色か。今までどこ行つてたんだ？」

「ちよつと散歩。」

一護は僕に気付くと話しかけてきた。

もちろん小声で。

「ふーん。」

「あつそつだ、一護。僕最近変な夢を見んだけど。」

「どんな夢だ？」

「こつ。見渡す限り草原しか無くてどこまでも晴れてる。でもあんまり暖かくないんだけど。」

「それで。」

「夢で見るたんびに何か別のものがあるんだ。川だったり、花だったり、鳥だったり。色々。」

「…。」

一護は真剣なまなざしで聞いている。

「そこに座っていると声が聞こえんだ。『僕が見える?』って。でも、僕は見えないんだ。それに…。」

「それに?」

「その声が聞こえてくるとその草原に何の前振りもなく霧が出てくるんだ。だんだん濃くなって。」

「…。」

「これ何かわかる?一護。」

「まあ、わかるっちゃわかるけど。まさか水色がこんな早くな。」

「何?」

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界?」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中にもある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなものだ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかな。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

そうか。もう少しできっかけさえあれば僕は斬魄刀の名前が聞けるのか。

「というかみんなを起こそうぜ。そろそろ準備してくれないと困る。」

「心配には及ばないよ黒崎。」

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると思うが。」

「ム。」

「でも、啓吾は起きてないぜ。」

「…。」

そして僕たちはいろいろ準備して寮を出た。

*

*

*

*

「あつ。お兄ちゃん!!」

寮を出たら遊子ちゃんたちが待っていた。

「おはよう。遊子。」

遊子ちゃんたちはこっちに駆け出てきた。

「お前ら準備できたか？」

「もち。早く行こう！一兄！！」

一護の問いに夏梨ちゃんが答えた。

気のせいだろうか。

なんか、夏梨ちゃんの顔が少しばかり元気がないように見える。

まあいいか。

僕がこんなことを考えているといつの間にか校舎につき、教室の前に来てた。

「ここでお前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「おう！」

遊子ちゃんと一護の短い会話を耳にしながら僕と啓吾は教室に向かった。

「此処の責任者覚えてるか？水色。」

「うん。」

「そうか。名前なんて言うんだっけ。」

「梨路^{なしろ} 紅衣^{くい}さんでしょ。」

「そつだ！じゃあ、ドア開けるぞ！」

「どうぞ。」

僕は、開いた扉から中をのぞいた。

「君たちが今日からここに編入する生徒さん？」

中から、きりつとした感じの女性の声が聞こえてきた。

「はい。」

僕が答えた。

「そつ。さあ、中に入って。あなたたちを紹介するわ。」

僕たちは促されるままに動いた。

「自己紹介。宜しくね。」

声の主の女性は、OLさんみたいな恰好をしていた。

瞳の色は、董色。

「初めまして。僕は小島水色です。」

「僕は、浅野啓吾です。」

「はい。皆！水色君と啓吾君が新しくこのクラスに入ってきました。このクラスのことを教えてあげてね！」

「はい。」

クラスメイトの一人が答えた。

「返事ありがとう。水色君たちが座る席は…。」

梨路^{なしろ} 紅衣^{くい}さんがクラスを見渡した。

机の並び方が、試験会場みたいでなんとなく緊張してきた。

「あそこ。」

そう言い、梨路さんは上から2段目。左から数えて3番目の席を指差した。

「あそこがあいてるわ。あなたたちあそこに座ってくれる？」

「はい。」

僕は答えた。

僕たちがその席に落ち着いたときに隣から声が聞こえた。

「よろしく。水色君。私の名前は犀川^{さいかわ} 美紀^{みき}。」

髪の毛は漆黒を思わせるほどの黒で、ポニーテイルにしている。

瞳の色は、栗色。

「こちらこそ宜しく。犀川^{さいかわ}さん。」

「うふふ。美紀でいいよ。」

「そう。じゃ、美紀。」

「そうそう。これから楽しくなりそうね!」

「そうだね。」

「わあ!水色!!もう友達できたの!俺にも紹介ブギヤ!!」

美紀が啓吾の腹を殴った。

「水色。何このキモイの。」

「さあ。なんだろうね僕にもわかんない。」

たつきみだ。

僕は、美紀を見て思った。

こうして、僕の四年生と毎日に幕が開いた。

クラス part? 四年二組（後書き）

四年生シリーズが終わりました。次は一護のクラスです。

遂に、水色が精神世界のことを聞きます。

今のところ一番、斬魄刀に近いのは夏梨、遊子、水色ですかね。

いつかは、夏梨と遊子の精神世界も書きたいと思っています。

あと、四年二組の机の並び方は一組と全く同じです。

というか、全学年この並び順です。

書いてると、話がどんどん違う方向に行ってる気がします。

面白いんですね。このお話。と思うことも多々あります。

こんなことですがこれからもよろしくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

クラス part? 六年一組(前書き)

今回は一護のクラスです。

また朝からなんですよ！

ちよいちよいハシヨリながらやっていききたいと思います。

では、第24話スタート！！

クラス part? 六年一組

恐怖を捨てろ

前を見る

進め

決して立ち止まるな

退けば老いるぞ

臆せば死ぬぞ

叫べ!

我が名は!

『斬月!』

by 斬月

尸魂界編より

「ん。」

俺は目が覚めた。

時間は5時50分。

早いな。まだ誰も起きていないだろう。

そう思って周りを見渡したら、水色がないことに気付いた。

早いな。あいつ。

そう思い俺は名残惜しいが死覇装を脱いで制服を着た。

*

*

*

*

「いつちに。さん、し。」

俺はなんとなく体操を始めた。

その時、俺たちの部屋を開ける音が聞こえた。

「！。おっ、水色か。今までどこに行ってたんだ？」

「ちよつと散歩。」

素っ気ねーな。答え方。

「ふーん。」

「あつそつだ、一護。僕最近変な夢を見んだけど。」

「どんな夢だ？」

俺は聞いた。

「こう。見渡す限り草原しか無くてどこまでも晴れてる。でもあんまり暖かくないんだけど。」

「それで。」

「夢で見るたんびに何か別のものがあるんだ。川だったり、花だったり、鳥だったり。色々。」

「…。」

俺は真剣に聞いた。

もしかしたら…。

「そこに座っていると声が聞こえんだ。『僕が見える?』って。でも、僕は見えないんだ。それに…。」

「それに?」

「その声が聞こえてくるとその草原に何の前振りもなく霧が出てくるんだ。だんだん濃くなって。」

「…。」

「これ何かわかる?一護。」

それって…。もしかしたら…。

水色の精神世界！？

もしかしなくても絶対そうだな。

一応ルキアに聞いてくか。

「まあ、わかるっちゃわかるけど。まさか水色がこんな早くな。」

「何？」

俺は少し間をおいてから答えた。

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界？」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中にもある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなものだ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかもな。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

きっかけだけ。

確かにそうだ。

俺の時もそうだったから。

「というかみんなを起こそうぜ。そろそろ準備してくれないと困る。」

「心配には及ばないよ黒崎。」

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると思うが。」

「ム。」

「でも、啓吾は起きてないぜ。」

「…。」

そして俺たちはいろいろ準備して寮を出た。

*

*

*

*

「あつ。お兄ちゃん！」

寮を出たら遊子たちが待っていた。

「おはよう。遊子。」

遊子たちはこっちに駆け出てきた。

「お前ら準備できたか？」

「もち。早く行こう！一兄！！」

俺の問いに夏梨ちゃんが答えた。

なんか夏梨の顔が…。

俺は思ったことを考えないようにした。

まさか、な。

そして校舎につき四年の教室の前に来た。

「ここでお前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「おう！」

俺は元気な返事をして、六年の教室に向かった。

*

*

*

*

「じゃ、お前らはそっちだなチャド。石田。」

「ム。」

「せいぜい頑張るんだな特進クラスで。」

「へいへい。おい、井上行くぞ！」

「うん!!」

そんなこんなで俺たちは六年の教室の前について扉を開けた。

「失礼しまー」「イエエエエエ

イ!!!!」

俺は最後まで言えなかった。

俺たちが扉を開けた瞬間に六年一組のみんなが物凄い声を上げたのだ。

「ほら皆落ち着け。当の本人たちが驚きのあまり固まってるぞ！」

一人の男性の声がした。

あの人がこの責任者か。

名前は確か伊土^{いづち} 日凧^{ひなぎ}。

あいつが責任者だと分かったのはあいつの一言でこの教室が静まり返ったからだ。

「ゴホン。ごめんな驚かせて。さあ、こっちにこい。」

伊土さんは俺たちを手招きした。

この人の第一印象は、まあいい人。髪型が俺みたいだけど色は黒。顔はあれだ。特に特徴がない。

服装はジャージ。

「これからお前たちが勉強をする場所だ。自己紹介は？」

「あ、私は井上織姫です。」

「黒崎一護です。」

シン。

皆は言葉を失った。

多分、俺たちの名前が絶対に教科書に載っていたからだろ。

「そうか。宜しくな。お前らの席はあそこだ。」

そう言い、伊土さんが指差したところはなんとまあ。

教室のと真ん中。

なんで俺たちはあそこなんだ。

そんなことを思いながら、俺は席に座った。

「おはよう。一護。」

隣で声が聞こえた。

この声は…。

「遼!!」

「えっ。遼君!!」

井上も来た。

「初めまして。津ノ井^{つのい} 遼^{りょう}です。」

「知ってるよ。あたしのことと呼び捨てでいいからね。」

「はあ。」

とまあ、二人が軽くあいさつしたところで俺、いや俺たちに向かって質問の波が襲ってきた。

「どうしたんですか？」

「なにが？」

「どうして二人はこのクラスに来たんですか？」

「尸魂界の勉強に。」

「なんで遼この人と知り合いなんだよ!!!!」

「いや、ちょっと。」

俺はなんとなく受け流していた。

井上は、こいつらに驚いていた。

「お前ら。少し静かにしてくれねえか？質問なら休み時間に答えてやるから。」

「本当ですか！！！」

「ああ。」

俺がそう言つと、こいつらは静まった。

「それじゃあ、授業を始める。今日は鬼道の80番台についてだ。」

伊土さんがそう言つとみんなは気を引き締めた。

鬼道の80番台か。

余裕でできるな。

俺はそう思い井上と顔を見合わせた。

「意外と簡単かもな。」

「そうだね。」

そして俺たちの波乱の予感たっぷりな日常が始まった。

クラス part? 六年一組（後書き）

…。まあ、こんな感じで。

どうでしたか？

やっぱり一護は、質問の波に襲われるわけです。

今回は、石田達です。

また朝から書いたほうがいいですかね？

そういうのも下の一言というところに書いていただければ嬉しいです。

あと、明日はあまり更新できないと思います。
すいません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしております。

クラス part? 六年二組(前書き)

累計5、0000アクセス突破!!!!!!

ありがとうございます!!!!!!
何か記念にしましょうかね。

また朝からです。

第25話スタート!!!!

クラス part? 六年二組

戦いに死ぬと決めた奴なら

自分を殺す奴の名ぐらい

知って死にてえ筈だからな

更木隊第三席 斑目一角だ

てめえは名乗る必要はねえ

俺の名だけよく憶えときな

てめえを殺す 男の名だ

by 一角 アニメ20話より

「それはお前の精神世界だ。」

「精神世界？」

「ああ。これは、誰でも一つは存在している。もちろん、俺の中にもある。精神世界は主に斬魄刀との対話とかだ。まあ、そんなものだ。精神世界が見れたらもう少しで斬魄刀の名前が聞き出せるかな。あとは、きっかけだけだ。」

「ふーん。」

遠くで黒崎が言ってることが聞こえる。

そこで僕は目が覚めた。

変な夢だったな。

周りは夜で月が一つだけ出ている。

僕は高い塔の上に立ってその世界を見渡している。

だがその世界には何もなく。

僕一人しかない。

建物も僕がたっているやつ以外何もない。

その時僕がいつの間にか持っていた銀嶺弧雀ぎんれいこじやくが光りだした。

『もうすぐ会いに行くぞ』

この言葉を残して、いつも消える。

さつき黒崎が言ってたことを踏まえるとあれは僕の世界か。

隣でござこそという音がした。

「茶渡君起きたのか。」

「ム。」

僕の耳には、黒崎の言葉が飛んできた。

「というかみんなを起こそうぜ。そろそろ準備してくれないと困る。」

はあ。

黒崎の声が僕の頭に響いた。

のっそりと立ち上がり、黒崎のもとへ行った。

茶渡君もついてきた。

「心配には及ばないよ黒崎。」

「オッ石田。起きたのか。」

「君の声を聞けばだれでも起きると思うが。」

「ム。」

「でも、啓吾は起きてないぜ。」

「…。」

浅野君は少し特殊なんだな。

僕は思いながら、洗面所に顔を洗いに行った。

*

*

*

寮の外に行くと遊子ちゃん達が待っていた。

僕たちは合流して、本校舎に向かった。

四年の教室の前につき。

「ここでお前らとはサヨナラだな。じゃ、勉強頑張れよ。遊子、夏梨。たつき、啓吾、水色。」

「うん。お兄ちゃんこそ勉強頑張ってね！」

「おう！」

黒崎が返事をしたのを確認すると、僕たちは六年の教室に向かった。

*

*

*

*

「じゃ、お前らはそっちだなチャド。石田。」

「ム。」

「せいぜい頑張るんだな特進クラスで。」

僕は嫌味を込めて言った。

やっぱり、僕が黒崎に劣っているなんて思いたくない。

「へいへい。おい、井上行くぞ！」

「うん！」

黒崎と井上さんは六年一組の扉を開けた。

「失礼しまー」「イエイエイエイエ
イ!!!!!!」

「すごい歓声だな。」

L

「僕たちも入るか。」

7
 4
 0

茶渡君がムとしか言わない。

そう思いながら、僕は二組の扉を開けた。

「失礼します。」

シ
ン

音があるのかと思うくらい静かだ。

「あなた達。このクラスに今日、編入する子達かしら？」

教室の中で、澄んでいる声が聞こえた。

あの人が、久仁丘くにおか 杏あんか。

この人は、赤いズボンに黄色いＴシャツの上に白い白衣を着ている。

髪の毛は上で一つの団子にして、瞳の色はねずみ色。

眼鏡をかけている。

「はい。」

「そう、中に入って。自己紹介をしてください。」

「...。」

僕たちは黙って言われる通りにした。

なんとなくだが、この人に逆らってはいけないような気がしたからだ。

「石田雨竜です。」

「茶渡泰虎だ。」

「はい。あなた達は、あそこに座ってね。」

そう言い、指が差されたのは２段目の列の右から四番目。

「はい。」

僕たちは、その机に向かい座った。

「隣の桜花^{おつか}さん。その二人にこのクラスのことを教えてあげてくださいね。」

「はい。」

桜花と呼ばれた彼女は、僕たちのほうを向き言った。

「休み時間に、教える。」

彼女は下している髪の毛を耳にかけながら言った。

瞳の色は、紺青。

「さあ、皆さん。歴史の教科書47ページを開いてください。」

久仁丘さんにそう言われ僕たちは急いで教科書を開いた。

そのページの題名はこうだ。

『藍染の略策と五人の旅禍と一匹』

これ完全に僕たちじゃないか。

僕はそう思いながら、授業を聞いていた。

クラス part? 六年二組（後書き）

今回は短いですね。

紺青色は青です。分からなかったら調べてみてください。

遂にみんなのクラスシリーズが終わりました。

今回は、時がたち一か月後のお話です。

そろそろみんなの精神世界を描いていきます。
楽しみにしてください。

精神世界が出ているのは、水色、石田、一護のみですね。
夏梨、遊子も見えています。書いていません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしております。

テスト（前書き）

総合評価100pt突破!!!!!!!!!!!!!!

いやー。累計50000アクセス突破に総合評価100pt突破とは、めでたいことが続きます。

記念として、番外編にゆ様からのリクエスト。

日雛のepisodeを書きます。

（出来れば今日中に。）

良かったら読んでみてください。

第26話スタート!!!!

テスト

…ゴチャゴチャ悩み過ぎなんだよテメーは。…昔っからな…

誰もテメーが思うほど、テメーを悪く思っちゃいねえよ…

自分ばっか責めてんじゃねえ…何でもかんでも背負って立てるほど

テメーは頑丈じゃねえだろうが……

分ける。俺の肩にも…一護の肩にも。アイツのカタちよっとずつ乗っけて…

ちよっとずつ立ちやいい…

…その為に、俺達は強くなったんだ…

…アイツを、信じてやれ……ルキア

b y 恋次 尸魂界救出編より

初めてこのクラスに来てから一か月たった。

勉強にも慣れてきて、もうすぐテストが行われる。

これで90点以上を取れば、飛び級で一氣に六年生だそう。

頑張んなきゃな。

でもあたしは、勉強に集中したくても夜がきちんと眠れない。

毎回のように変な夢を見るから。

あたしは、いつも空の上にいる。

つまり浮いているということだ。

そこは見渡す限り空と、あたしの足元には大きな海がある。

そして声が聞こえるんだ。

『私の名前は、 だ。夏梨。私の名前は だ。』

って。でもあたしはまだ名前が聞こえない。

その声は直接あたしの頭に響いてくる。

声は聞こえる。名前が聞こえない。

話せる。姿が見えない。

いつつもあたしはこの夢を見る。

何か知りたい。

でも今は、そんなことよりもテストに集中しなければならない。

このテストでいい点とって、一兄たちのクラスに編入するんだ。

多分あたしたち、3人は余裕でテストに受かると思う。

なんせ、ここに来る前に勉強していたことはすべて六年生レベルの問題だったから。

そしてテスト当日がきた。

「みなさん。テスト用紙をもらいましたか？」

皆は声をそろえて言う。

「はい。」

「それではテスト開始!!」

先生の掛け声でテストが始まった。

あたしは、名前を書いてから問題を見た。

《問1》

赤火砲の詠唱を書きなさい。

《問2》

この学校の創設者の名前を書きなさい。

《問3》

蒼火墜の詠唱を書きなさい。

とまあ、こんな感じ。

めちゃくちゃ簡単!!!!!!

あたしは、残り時間を20分も残してこのテストを終えた。

*

*

*

*

「テストどうだった？」

「バッチリ。」

「私も。」

あたしたちはテスト終わりに話していた。

あたしたちから見ればどーってことないが、このクラスにとってはとっても難しいテストらしい。

なんで分かったって。隣の人のセリフがそれを物語っていたから。

あたしの席の隣の人

阿那賀あながき 詩織しおり

は、

「今回のテスト全っ然わかんなかった!!!」

と、詩織の隣の人 藤志^{とうし} 輝^{けん} に言っていた。

彼女、詩織はこのクラスでも頭脳はトップの地位。

なかなか頭がいい子なのに、このテストが出来ないとは。

あたしたちの結果が楽しみだ。

そして、テストが返された。

*

*

*

*

「有沢たつきさん。」

「はい。」

たつきちゃんが呼ばれた。

そして帰ってきた。

「何点だった？」

あたしが聞くとたつきちゃんは得意げに答えた。

「満点！」

ワーオ。さすが。

「たつきちゃん、次の週末から六年だね。」

「うん。」

「黒崎夏梨さん。」

「アッはい。」

あたしが呼ばれた。

テストが返された。点数は、

「100点。」

やった

!!!!

これであたしも次の週末から六年だ。

そう思いながら席に戻ると、入れ違いに遊子がきた。

「どうだった？」

「バッチリ。」

あたしたちは短い会話を交わすと、あたしは席に、遊子は先生のもとに行った。

そして帰ってきた。

「どう？遊子。」

「満点!!」

「じゃ、三人で来週の週末から一護たちのクラスだね!!」

「うん!!」

あたしたちは、いろいろ話していると隣で声が聞こえた。

「えつ。三人とも来週から六年!!」

詩織だ。

皆は詩織の声に驚き振り向いた。

ああ。みんなに知られなくなかったのに。

「うん。まあ、そうだけど。」

「うそ!!まさか、あんたたちがそんなに頭がよかったなんて知らなかったな。」

「あははは。そうだね。」

あたしは、あまり詩織が好きではない。

こういう性格だからだ。

「なんで、満点取れたの？」

「ちゃんと勉強してたからかな。」

「そうなの。やっぱりお兄ちゃんに負けたくないから?」

「まあ、そうだね。」

「勉強って今まで何年生レベルのしてたの?」

「六年生。」

「うつそ

!!!!!!!!!!ほんと

に

」

「本当に。」

これだ。このいちいち取るリアクションが鬱陶しい。

「そう。」

あたしの冷めた態度になんか気分を壊したようだ。

「じゃ、あたし達これから先生といろいろ話す時間だから。じゃあね。」

「うん。バイバイ。」

そう言い、あたし、遊子、たつきちゃんは先生のところに駆け出しそのまま教室を出て行った。

遂に来週からあたしたちは六年になるんだ。

あたしは期待に胸がいつぱいになった。

皆が死神になるまで、あと7カ月。

テスト（後書き）

どうでしたか？

遂に、夏梨たちは六年生になってしまいます。

本当はこの一話に夏梨と水色と一護と雨竜のこら巢を書こうと思つてたんですが、意外と夏梨のクラスの話が長くなってしまいました（汗）。

ま、いいですが。

カウントダウンを始めました。

皆が死神になるまでのです。

因みにこの話は、夏休み明けです。

つまり、九月の初めというわけです。

あんまり、季節感が出てませんが。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

テスト part? (前書き)

ども!!

番外編を投稿しました。良かったら読んでみてください。

第27話スタート!!!!!!

テスト part?

…しっかり生きろよ一護

しっかり生きて　しっかり年喰って　しっかりハゲて

それで俺より後に死ね

そこで、出来れば笑って死ね

でなきゃ、俺が真咲に合わせる顔がねえ

ウジウジしてんなよ

悲しみなんてカッコいいモンを背負うにや、オメーはまだ若すぎん
のよ

by・一心　グランドフィッシュヤー編

「おーす！啓吾、水色！」

「おつす。貴仁斗。」

「お早う。貴仁斗。今日は早いね。」

「そうかー？そつでもないだろ。」

「お、おはよー。水色。」

「お早う。美紀。なんかあった？」

僕は今走ってきたであろう美紀に話しかけた。

「今日、テスト、やるって！」

「マジ！」

「ん！！」

美紀は、啓吾に鋭い視線をぶつけた。

相変わらず、嫌われてるね。啓吾。

「で、このテストで合格。つまり、90点以上を取ったら六年に飛び級だって！！！」

「「「うそっ！！！！」」」

僕、啓吾、貴仁斗は声をそろえて言った。

「頑張ってみんなで90点以上とろ！！！」

「うん。」

貴仁斗が言った。

テストか。多分僕と啓吾は余裕だ。なんせ今までやってきた勉強ここに来る前の　　は、すべて六年生レベルだったから。

問題はこの二人。二人はクラスでは頭がとってもいい人たちだ。

頑張れば受かるだろう。

引つかかるのは、90点以上で六年に飛び級ということ。

それほどまでに難しいのならば、この二人が受かることはできるだろうか？

ガラ

扉が開いた。

「おはようございます。みなさん、席についてください。」

がやがやしていた教室が一瞬で静かになった。

さすが。

「突然ですが、ここでテストを行います。」

「え　　！！」

「聞いてないですよー。」

皆が反対した。しかし先生の次の言葉で皆の顔が一瞬にして変わっ

た。

「このテストで90点以上とれた人は次の週末から六年生です。ちなみに、四年一組が昨日テストを行いすぐに丸付けをしテストを返しました。ここで、テストが90点以上いや満点の人が三人いました。

啓吾君と水色君は知っているはずよ。」

僕と、啓吾が知っている。しかも三人。この単語から導き出される考えは…。

「黒崎遊子、黒崎夏梨、有沢竜貴さんの三名だけだったそうです。」

やつぱり…。あの三人は受かったのか。それじゃあ、僕たちも頑張んなきゃいけないじゃん。

「みなさんも六年生になれるように頑張ってください。それではテストを始めます。」

先生は、そう言いはテスト用紙を配り始めた。

「それでは、開始!」

僕は名前をきちんと書いた。名前を書かなきゃ0点になるかも知れないから。

問題はこうだ。

《問1》

赤火砲の詠唱を書きなさい。

《問2》

この学校の創設者の名前を書きなさい。

《問3》

蒼火墜の詠唱を書きなさい。

こんな程度か。これなら僕と啓吾、そして、美紀と貴仁斗にもできるだろ。

そう思い僕はテストに取り組んだ。

*

*

*

*

「終了。鉛筆をおいてください。」

テストが終わった。

「啓吾どうだった？」

僕は聞いた。

「まあまあ。そういう水色はどうだ？」

「完璧。」

「み・ず・い・ろ！テスト、どうだった？」

美紀だ。

「完璧。」

僕は啓吾に言ったのと同じように答えた。

「美紀は？」

「大体かけた。と、思う。」

「ふーん。貴仁斗は？」

「俺か。俺は大丈夫だ。多分…。」

「そんなに、心配になるようなことあったか？」

「あつたじゃない！！最後の問題！《問20》が！！！」

「あれそんなに難しかったか？」

「十分難しかっただろう！！」

「そうかなあ？」

「水色まで！！！！そんなに簡単だったか？」

「最後の問題でしょ。《問20》「藍染は何の目的で崩玉を持ち去ったのか。また、その藍染に終止符を打った黒崎一護元死神代行の技名を述べよ。」ってやつでしょ。」

「うん。」

「簡単じゃない。」

「「どこが!!」」

美紀と貴仁斗は声をそろえて言った。

「だって、藍染は尸魂界、世界の秩序をなくすために靈王がどうのこうのでしょ。」

「そ、そうね。」

「で、藍染を倒した技は一護の最後の月牙天衝でしょ。細かく言うと 無月。」

「そうだな。」

「ほら簡単じゃん。」

「お前。」

貴仁斗は最後まで言えなかった。先生が丸付けを終え教室に入ってきたからだ。

「それでは、皆さんのテスト用紙を返します。今回、90点以上の

人が4人です。そのうち二人が満点です。」

四人。そう聞いたとき僕は確信を持った。

僕たちのことだな、と。

「浅野啓吾さん。」

啓吾が呼ばれた。

「どうだった？」

僕は帰ってきた啓吾に聞いた。

「満点！……！！！」

啓吾は興奮を抑えているような声で答えた。

「おめでと。」

「小島水色さん」

「はい。」

そしてテスト用紙が返ってきた。

点数は満点だ。

「おめでと。水色君。」

「ありがとうございます。」

僕はそう言い自分の席に戻った。

「水色どうだった？」

「どう？」

「どうせ満点だろ。」

上から、啓吾、美紀、貴仁斗の順。

「あたり。」

「やっぱしな。」

「さいかわ みき犀川美紀さん。」

「はい。」

美紀が呼ばれて、なんか先生と会話をして戻ってきた。

「どう？」

「95点！！」

「おめでとう！」

「ありがと、水色！！」

美紀は満面の笑顔で答えた。

「かみやま きこ神山貴仁斗さん。」

「おっ。俺だ。」

そう言い、貴仁斗が行った。

美紀の時と同じようなことをしてから戻ってきた。

「どうだった？」

美紀が聞いた。

「ふっふっふっ。知りたいか。」

「当たり前よ!!」

「それでは教えて差し上げよう。俺の点数はズバリ97点!!」

「っ。ま、負けた!!」

「わお!じゃあ、来週から四人そろって六年だね!!」

僕が言うと、貴仁斗はうれしそうな声を上げた。

「おっ!!!!!!」

そして今日が終わった。

来週から六年。僕は、期待と不安の気持ちを五分五分に持ちながら思った。

大丈夫かな。と。

皆が死神になるまで、あと7か月

テスト part? (後書き)

皆が死神になるまであと7ヶ月ですか。

長いですね。

今回は、ここから一週間後。遊子たちが一護のクラスに行ったところを書きます。

石田達はそのまた次です。

というか、話を早く進めたいのでこれから(一護と石田の話以降)からは、六年一組の様子を一護、織姫、遊子、夏梨、たつきの順で二組は石田のみの日記形式にしようかと思っています。一話につき一ヶ月です。

つまり…

上手くいけばあと10話くらいで終わらせそうです。

そうしたら、皆の死神姿を描き 何かしら事件が起こり 解決させる。

という私が思い描いている物語が出来そうです。

(ああ!!なんかちゃっかり物語の構成がばれた!!!!!!)(;O;)
(

ドンマイ?

なんかすいません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなどお待ちしております。

飛び級生（前書き）

さて、27話から一週間後のお話です。

第28話スタート!!

飛び級生

俺は…結局朽木隊長に…一度も勝てねえまだ…

ルキアがいなくなっただけからずっと…毎日死ぬ気で鍛錬したが、それでもダメだった…

あの人は遠すぎる…

力づくでルキアを取り戻すなんて…俺には出来なかったんだ…！

黒崎…恥を承知でてめえに頼む…！！

…ルキアを…ルキアを助けてくれ…！！

b y / 恋次

尸魂界救出編

今日の朝。俺たちは普通に霊術院に登校して、普通に授業を受けるいつもの変わらない何の刺激もない学校生活を送ると思っていた。だが、少しだけ引つかかることはある。

啓吾と水色の態度。

なんかうきうきしてる態度を振りまいている啓吾は、今日は珍しく早起きだった。

そして水色も顔には出していないが何かを楽しみにしているようだった。

そんなことを考えながら、一護は自分の席に座っていた。右には織姫。左には遼がいる。

「ねえ、一護。今日飛び級生が来るらしいよ。」

「へー。何人くらいが来るんだ？」

「いっぱいだって。確か大まかな人数は7ゝ8人。全員、元4 - 1か4 - 2なんだって。」

「ふーん。」

4 - 1と4 - 2・このクラスには遊子たちと啓吾たちがいたな。

まさか、此処（6 - 1）に来るのは、あいつらだ。なんて言わねーよな。

「ねえ、それってたつきちゃんたちじゃないの？」

「何言ってるんだよ井上。まあ、確かに今日の水色たちの態度に、引つかかることは何個もあるけど。」

「あたしもだよ。なんか今日起きたらたつきちゃんたちなんか皆そわそわしちゃってさ。『どうしたの』って聞いたら『後でわかる』」

なんていうの。絶対ここに来るのは、たつきちゃんたちでしょ！」

「そうなんだ。ま、もう先生が来る時間だからもうすぐ答えはわかるけどね。」

「そだね。」

ガラ

遼が言った通り先生 伊土日凧 いっす じなづ がきた。

「今日は飛び級生を紹介する。ほら、入って入って。」

そう言いながら、日凧は手招きをした。

その顔触れを見て、一護と織姫は驚愕した。

あいつらじゃねえか。でも二人知らない子がいる。

「此処にいる七人がこれからお前たちが一緒に勉強する場所だ。自己紹介は？」

「黒崎遊子です。」

「黒崎夏梨です。」

「有沢竜貴です。」

「浅野啓吾です。」

「小島水色です。」

「犀川美紀です。」

「神山貴仁斗です。」

右から順番に自己紹介をして行った。

「七人も座れるとが無いな。おい、皆座るところを作ってくれ！」

日風が言った瞬間皆は右にと左にとそれた。

つか、一番後ろがあいてるけど。

皆、同じことを考えていた。

「よし。おっ！よく見ると一番後ろがあいてるじゃないか。今、一番後ろの席に座ってるやつはもう一つずれてそいつらの前に座ってるやつもずれて。」

なんで、俺、僕、私たちが移動しなきゃならないのー！！

「サンキュー。じゃ、お前らはあそこの席に座れ。」

「はい。」

代表してたつきが答えた。

そうして、さっきまで前に立っていた7人は一護、織姫、遼がいる

一列後ろの席に落ち着いた。

「あつ。一兄！それに織姫ちゃん！」

「お兄ちゃん！！織姫ちゃん！！」

「織姫っ！一護！！」

「いっちょ」
「！！！！！！また一緒に勉強ブギヤ！」

「「だ・ま・れ！！！！」」

美紀とたつきが同時に啓吾のおなかを殴った。

「ありやま。息ぴったり。」

貴仁斗は、あきれ顔でこの光景を眺めていた。

「よろしく。一護。井上さん。」

「えっ。お前らこの二人と知り合い！！つか、今夏梨と遊子お兄ちゃんって言ってなかったか？..」

貴仁斗は、もしかしてという風に声を潜めた。

「と、ということとは..。」

美紀も気付いたらしい。

「まさか、そこにいるのって…。く、黒崎一護おお
！！！！！！」

「そ、そうだけど。」

またか。このリアクション。いい加減慣れてきたよ。

「おい、そこ。少し静かに。」

「はい。」

一護が答えた。

「んじゃ、始めるぞ。今日は一日中鬼道をやるぞ！！」

「はい。」

「復習も兼ねてるがお前らの実力も見たい。とりあえず、外に出ろ。」

日風の声でみんなは外へと移動した。

*

*

*

*

「まずは、破道の30番台だ。できるやつは詠唱破棄で。」

「並べ！！」

皆は、縦3列。横7列に並んだ。

「撃て!!!」

「破道の三十一 赤火砲!!!」

詠唱破棄の者いれば

「『君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ』破道の三十一 赤
火砲!!!」

と、詠唱する者いる。

皆の、赤火砲の威力はテニスボールくらい。

これでも十分すごい。

「次!!!」

一護、織姫、遼がいる列の順番がきた。

「『破道の三十一 赤火砲!!!』」

三人は、息ぴったりに言った。

威力は一護がバスケットボール。

織姫が、マリ程度。

そして遼はテニスボールよりも少し大きいがまりよりかは小さい。

「っ！！また負けた！！」

「俺に勝とうなんて100年早いぜ遼。」

「いつか、絶対に勝つ！！！！！！」

「せいぜい頑張んな。」

「あはは。」

「次！！」

そして全員終わった。

「さすが一護だね。あんなの撃つなんて。」

「ほんと。的なんて跡形もなく消えてたよ。」

「俺たちも頑張んなきゃ！！」

「てか、一兄手加減つての知らないのかな？」

「知らないでしょ。一護なら。」

「おい。たつき。聞こえてるぞ！！！！」

「やばっ。」

「ほれ。早く打たんか！」

「よ、夜一さん！どうしてここに。」

「暇じゃから来たのじゃ。喜助のどこにいても全然楽しくないのでな。」

「あ、そうすか。」

「スゲー。あの”瞬神 夜一”と対等に話してる。」

「やっぱり。あれよ。黒崎一護はとにかくすごいよ。」

「お前ら！……早く打て！……！」

「……はい！……！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！……！」

「破道の三十一 赤火砲！……！」

「破道の三十一 赤火砲！……！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！……！」

「破道の三十一 赤火砲！……！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！！」

「君臨者よ 血肉の仮面・万像・羽ばたき・ヒトの名を冠す者よ
焦熱と争乱 海隔て逆巻き南へと歩を進めよ 破道の三十一 赤火
砲！！」

上から、たつき、遊子、夏梨、啓吾、水色、美紀、貴仁斗。

皆は、手のひらから六年生 一護、織姫、遼を抜いた と全く
同じ大きさの赤火砲を撃った。

一番大きいのは、夏梨。

遼よりやや小さいが周りの六年よりはでかい赤火砲を撃った。

「さすがだな。次は、四十番台だ。」

こうして、鬼道の練習をして今日は終わった。

皆が死神なるまで、あと7カ月を切った。

飛び級生（後書き）

はい。どうでしたか？

遊子達が六年に来ました。

今度は石田達のクラスですね。

それが終わったら卒業までまっしぐらです。

なんか長くなりそうですが最後まで宜しくお願いします。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

石田の反応（前書き）

第29話スタート!!!!!!

石田の反応

かわすのなら“斬らせない”！

誰かを護るなら“死なせない”！

攻撃するなら……“斬る”！

b y、一護・浦原

「えっ！それは本当かい茶渡君！！」

「ム。」

「そうか。たまには顔を見せに行くか。」

「ム。」

ガラ

教室の扉があいた。

「みんな席に着いてください。授業を始めます。」

「はい。」

「今日は、鬼道をやります。縛道の80番台です。」

「はい。」

「それでは詠唱を教えます。しっかり覚えてください。」

「はい。」

此処にいる人々は、詠唱を覚えた。

「それでは、外に行きます。」

「はい。」

*

*

*

*

「では、並んで下さい。」

皆は並んだ。縦3列。横7列で。

「それでは、はい!!」

「縛道の八十一だんくう断空!!」

一列目の人が叫んだ。

先生が打った、赤火砲を防いだ。

「次！」

「はい！縛道の八十一 断空！」

「次！」

これはクラス皆が終わるまで続けられた。

*

*

*

*

「やっと休み時間だ。そうだ茶渡君！」

「ム。」

「一組に行かないか？」

「いいぞ。」

「じゃあ、行こう。」

石田は動いた。後ろからチャドもついてきた。

「入ってもいいですか？」

石田が扉に向かって聞いた。

「いいぞ！」

伊土の声らしきものが返ってきた。

「失礼します。」

「ム。」

「あつ！！一兄！あれ…。」

「な、んだよ。か、りん！…。あつだらどけ！！前が見えない！」

も

！！！！お前

「ごめんねー一護！」

「あわわ！！だ、大丈夫？」

「大丈夫だ。多分。」

そう言い、さつき夏梨が見た方向を見た。

「あつ。おい。石田にチャドじゃねえか！！！」

ピタ

クラスの時が止まった。

またか…。

「何してんだお前らそこで。」

「僕たちを見たときの第一声がそれか黒崎。」

「悪かったな。」

「ん!!あそこにいるのはチャド!!!!会いたかったぞオエツ!!」

「だからだまれ!!」

美紀とたつきにおなかのパンチを食らいノックアウト。

「ほつといてね。いつものことだから。」

「そ、そうかい。」

「ところでお前は何の用だ。」

「いや。遊子ちゃんたちがこのクラスに来たっていうから。確かめに。」

「そうかい。そうかい。はい。こいつらはつわざどつりに来ています。それじゃ、出てけ。」

「ひどいな。茶渡君は好きなように。僕は出ていく。」

「ム。」

「じゃあな。黒崎。」

「おう!!」

皆が死神になるまで、あと6ヶ月と3週間。

石田の反応（後書き）

短いです！！！

すいません。というか話が思いつきません。

次回からは日記形式です。

意外とそっちのほうが思いつくかも（汗）。

そこはドンマイとしか言いようがありません。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

9月（前書き）

さあ、日記形式です。

第30話スタート……！！

（驚き……！！）

9月

あたりめーだろ 誓ったんだよ・

絶対に助けるってな・

誰でもねえよ・

ただ俺の・・・ 魂にだ!!!

by 一護 漫画16巻より

遊子

2062年 9月4日(火)

最近変な夢を見る。

夢で目が覚めると私は水の中にいる。

最初見たときは”死ぬっ!!”と思ったけど水の中でも息ができた。

何でも試してみるもんだと思った。

水の中にいて、私は泳いでく。

陸に向かって。

でも一向に陸は見えてこない。

しかも、陸どころか空も何もかもない。

此処には水しかないことがわかると私は、あきらめる。

そしたら声が聞こえる。

『私の姿が見える？遊子。』

まるでお母さんのような声だ。

その時だけ一筋の光が見える。

『見えない。』

私は答える。そしたら声は消える。そして光も消える。

夏梨ちゃんに相談してみよう。

夏梨

2062年 9月5日（水）

今日は、特に何もなかった。

しいて言えば、遊子が相談してきたこと。

『最近変な夢を見る』あたしと同じじゃん。

あたしも変な夢を見てるって言ったら、” やっぱり ” と言ってきた。きつと予想していたんだろう。そんなことを言っているあたしも遊子に変な夢を見ているのではないかと予想していたから。

これが何か知りたいけど。これの答えを聞くのがなんか怖い。

一兄に聞いてみよう。どんなことだって受け止める。

たつき

2062年 9月12日（水）

今日は、10人で1グループを作りみんなで対戦した。

対戦方法は、浅打での打ち合い。

もう斬魄刀を持っている一護は浅打を持ったら斬月に代わってしまうのではないかとみんなひやひやしていたが、ぎりぎり変化しなかった。

そしてあたしが入ったグル プは当然、一護、織姫、遊子ちゃん、夏梨ちゃん、水色、啓吾（むかつく！）、美紀、貴仁斗、そして遼がいる。

そして優勝もここ。

ま、当然だよな。一護がいるんだし。

啓吾

2062年 9月21日（金）

最近は、鬼道の練習ばかりだ。

そろそろ飽きてきたな。

瞬歩は、普通だけでもできれば剣術を磨きたい。

というか、俺の斬魄刀はいつご対面が出来んのかな？

皆変な夢を見てるとか言ってるけど。

どんな夢を見てんのかな？

水色

2062年 9月27日（木）

今日は久しぶりに、剣術の勉強をした。

それにしてもやけに啓吾が喜んでた。

ま、いいけど。

練習台は一護。

皆の太刀筋を軽く返してアドバイスをする。

いい先生だ。

僕は思う。

一護

2062年 10月3日（水）

剣術の練習はいいけどみんなの練習台は嫌になってきた。

しかも今日遊子と夏梨が『最近変な夢を見る。』と言ってきた。

詳しく聞くと夏梨は、いつも空の上にいる。

つまり浮いている。

そこは見渡す限り空と、夏梨の足元には大きな海がある。

そして声が聞こえる。

『私の名前は、 だ。夏梨。私の名前は だ。』

って。でも夏梨はまだ名前が聞こえない。

その声は直接夏梨の頭に響いてくるそう。

で遊子は、

夢で目が覚めると遊子は水の中にいる。

陸に向かって泳ぐ。

でも一向に陸は見えてこない。

しかも、陸どころか空も何もかもない。

此処には水しかないことがわかると遊子は、あきらめる。

そしたら声が聞こえる。

『私の姿が見える？遊子。』

まるで母さんのような声だそう。

その時だけ一筋の光が見える。

『見えない。』

遊子は答える。そしたら声は消える。そして光も消えるそうだ。

こいつらも見てるのか。精神世界。

俺がそう教えると嬉しそうな声を出した。

精神世界が見れるということはもうすぐ斬魄刀に会えるということ。

それがうれしかったんだろうなと俺は思う。

織姫

2062年 10月9日（火）

そろそろ期末テストが近い。

先生がそう発表した。

でも私たちは余裕で合格できるだろうな。

だって、私たちはもういろんな隊から誘いが来てるから。

遼

2062年 10月15日（木）

勉強が難しくなってきた。

それでも一護たち、4年から飛び級してきた子達は余裕な顔で勉強してる。

いいな。

なんせもつ、護廷十三隊から誘いが来てるほどの実力者たち。

僕も頑張らなくちゃ。

美紀

2062年 10月22日（月）

今日席替えをした。

席替え方法はただのくじ。

決まった席は、一護の隣に夏梨。遊子の隣に貴仁斗。私の隣に水色。

後はばらばら。

まさか私の隣に水色なんて。

最初に会ったときみたい。

うれしいな。

貴仁斗

2062年 10月26日（金）

席替え後の授業は、さらに難しくなった。

なのに余裕な顔でついて行っている遊子はすごいと思う。

俺も頑張らなきゃみんなにおいて行かれる。

確か期末テストは合格すると、護廷十三隊への入隊が確実になる。

絶対に合格する!!!

雨竜

2062年 11月2日(金)

この学校の期末テストまであと1ヶ月を切った。

でも絶対に合格するという自信がある。

絶対に黒崎よりいい点を取ってやる。

チャド

2062年 11月6日(火)

期末テストまであと4週間。

ちゃんと勉強して、いい点を取る。

そう言えば今日、護廷十三隊の檜佐木さんが来て

「此処を卒業したら俺の隊に来ないか。」

という誘いを受けた。

「考えておく。」

俺はそう返した。

皆が死神になるまで、あと4ヶ月を切った。

9月（後書き）

書きやすい!!!!!!

驚くほど書きやすかったです。

しかも日記だと、日付がどんどん進みます!!

もしかしたら、霊術院篇は予定より早く終わるかも知れません。

次回も日記形式です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

11月（前書き）

また日記です。

以外と書きやすいんですよこれが。

書いていく順番は（一護たちのこと。（））いくらか違いますがご了承ください。

第31話スタート!!!!

11月

ありがとな お陰で 心は此処に 置いていける。

by 海燕 尸魂界救出編

遊子

2062年 11月12日(月)

私が見ている夢の正体がわかったから、私は夢に出てくる声の正体
を突き止めたい!と思った。

そして、斬魄刀の名前を聞くんだ。

お兄ちゃんは

「きっかけが必要だ。」

と言っていた。

きっかけってなんだろう?

お兄ちゃんは どうして名前が聞けたんだろう?

夏梨

2062年 11月21日(水)

期末テストまであと二週間。

美紀とか、貴仁斗とか。ほかのクラスのみんなは、物凄い勢いで勉強している。

あたしたちはまだ追いついてきてるけど、そろそろあたしも勉強しなくちゃダメかな？

早く死神になりたい。

絶対にこのテストは合格する！

たつき

2062年 11月29日(木)

期末テストまであと、六日。

合格できるか心配になってきた。

皆、勉強を死に物狂いでやっている。

ただ一人を除いて。

あたし達、四年からの飛び級生はほかの六年と同じあり様。

頑張つて勉強しなきゃ！

一護

2062年 11月29日（木）

皆、勉強頑張ってるな。

俺はいいけど。

つか、誘いが多すぎて決まらんねエ。

どこの隊に入ろうか。

決めるのが楽しみだ。

織姫

2062年 11月29日（木）

勉強が難しい！！

でもあたしはクラスの中ではついて行っているほう。

良くたつきちゃんが質問しに来る。

しかも、隊からの誘いが増えてきた。

黒崎君には負けるけど。

特に熱烈な誘いを受けてるのが十番隊。

日番谷君は来ないけど、乱菊さんが驚くほどのスピードでここに来る。

もしかしたら、仕事をさぼってるんじゃないかと思う。

日番谷君も大変だな。

啓吾

2062年 11月30日(金)

やばい。勉強が…。追いつけてなくなってきた。

一護はいいな。絶対に合格できるだろう。

もう、一番隊や三番隊。

そして五番隊と十二番隊に八番隊、そして十一番隊から誘いが来る。

しかも隊長自ら。

一番隊は違うけど…。

十一番隊の隊長。スゲー顔が怖かった。

二番隊は隠密起動。

四番隊は医療専門。

この隊から誘いが来ないのはわかる。

一護は即答で断りそうだ。

残りの六番隊と七番隊と九番隊と十番隊からはなんで誘いが来ないんだろう？

十二番隊は別として。

一護の性格を理解してるからかな？

決めたことは絶対に曲げないって。

いくら誘っても入らない可能性のほうが高いし。

俺にもどっかの隊から誘いがこねえかなあ？

水色

2062年 11月30日(金)

僕にも隊への誘いがきた。

九番隊の檜佐木さんだ。

そこなら僕も入っていいかなあと思う。

期末テストまであと5日になってしまった。

取りあえず頑張ろう。

美紀

2062年 11月30日(金)

水色にも誘いが来てる。

良いな。

水色は霊力操作がうまいから四番隊にでも入ればいいと思うけど。

本人はどう思ってたのかな？

知りたいな。

期末テスト。絶対に頑張つて水色と一緒に卒業してやる！！

貴仁斗

2062年 12月2日（月）

期末テストが明後日に迫ってる。

でも俺の今の調子で行くとたぶん大丈夫。

合格できる…と思う。

最近の勉強がついて行けるようになったので俺もテストが合格できる気がしてきた。

行ける！

遼

2062年 12月2日（月）

勉強がわかってきた。

テストも近いし。この調子なら合格できると思う。

一護と一緒に。

護廷十三隊に…。

雨竜

2062年 12月3日（火）

遂に明日だ。

頑張らなくては。

黒崎より良い点を取る！

絶対に。

チャド

2062年 12月3日（火）

皆の様子が変わった。

テストは明日なのに、もう緊張してるのだろうか？

皆につられて俺も緊張してきた。

明日。頑張って皆と。

一護と。

卒業ができるように。

皆が死神になるまで、あと3ヶ月。

11月（後書き）

短いですね。

なんか啓吾が長いです。

あの部分を誰かのところに書こうと思っていたんですけど。まさか、啓吾に書くななんて自分でも驚いてしまいました。（おい！！！）

期末テスト。

意外とこのキーワードが出てきますがわかりますよね。

護廷十三隊への入隊がかかっている、だ　　いじなテストです。

このテストで合格しなくても隊には入れますが、テストに合格すると新人より少し上の位に行けるのです！

（原作では違います。これはこのお話だけの設定です。お間違えないように。）

次回、また日記ですが内容は期末テストだけです。

そのまた次回は一月～二月。

そのまた次は卒業。という感じで予定しています。

楽しみに！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。

など、お待ちしております。

期末テスト（前書き）

もうすぐ、霊術院篇が終わりそうです。

第32話スタート！！！！

期末テスト

私の所為で死んだ者の傍に 私が駆け寄って何が悪い！！

by ルキア

尸魂界編

遊子

2062年

12月4日（水）

今日が期末テストだった。

自分的には、筆記試験はそこそここできたと思う。

実技の鬼道は満点だと思う。

後は結果を待つだけ。

夏梨

2062年

12月4日（水）

遂に期末テストがきた。

筆記の歴史が微妙だったけど、鬼道は完ぺきなはず。

結果を見るのが楽しみ!!!

たつき

2062年 12月4日(水)

期末テスト!!!

たぶん大丈夫だと思う。

つか、一護は受けてなかった。

まあ、あの強さなら受けなくても合格ってわけね。

少しむかつく!!

一護

2062年 12月4日(水)

皆期末テスト受けてたけど、俺は受けなかった。

最初、受けようと思って試験官がいる場所に行ったら、

「君は、試験官になりなさい。」

はあ？って感じた。

あーあ。俺も受けてみたかったなテスト。

試験管もなかなか捨てたもんじゃねエけどな。

織姫

2062年 12月4日（水）

今日インパクトがあつたのは何と言っても黒崎君が試験官だったこと。

一人ずつの実技の時、試験官は生徒の鬼道を受け止める役。

私の相手（？）が、黒崎君だった。

こんなんじゃ撃てないよー！

でも黒崎君は案外楽しそうに

「早く撃ってこい。」

なんていってる。

だから私は黒崎君に向かって鬼道を放てないの！！

はあ。期末テストは疲れた。

でも、いい線行ってる気がする。

大丈夫！

啓吾

2062年 12月4日（水）

一護！！！！

なんで試験官に。

しかも結構はまってる。

同じ試験官としてきたルキアちゃんと楽しそうに話しちゃって。

なんか、井上さんの顔が複雑だよ。

気付いてあげなよ一護。

ほんと、鈍感だな。

期末テストは結構いい感じ。

頑張った甲斐があったと思う。

悔いはない。

水色

2062年 12月4日（水）

期末テストは只々疲れただけだった。

でも楽しかったこともある。

試験官としてきた死神の人たちと、色々話したこと。

なんか小さな隊長さんに会って

「君、隊長？なんか小さいね。」

なんていったらその子怒り出しちゃって。

どうやら気にしてたみたい。

しかも名前を訊いたら

「十番隊隊長。 日番谷冬獅郎だ。」

なんていうから驚き。

まさかこんな小さい子が、最短で霊術院を卒業した天才児だったなんて。

本人は、天才児の『児』の字がいやみたいだけどね。

期末テストはまあまあ。

ま、いい線行ってると思う。

美紀

2062年 12月4日（水）

疲れた〜。

水色たちはなんかすごいけどあたしは微妙だな。

結果を見るのが少し怖い。

貴仁斗

2062年 12月4日（水）

テストがやつと終わつた〜!!!

しばらくはみんなの魂と呼べるものが抜けるんだろうな…。

にしても、なんかテストでいろいろ驚いた。

一護の友達はみんな普通に隊長格と話してるし。遼以外ね。

水色なんて、十番隊の隊長を怒らせてるし。

一護は、十三番隊副隊長朽木ルキアと楽しそうに話してるし。

それを見ている、織姫は何とも言えない複雑な表情をしてるしで。

とにかく、疲れた。

テストはいいと思う。

まあ、自分の実力を信じよ。

遼

2062年 12月4日（水）

一護が試験官!!!!!!

テストはまあまあいいと思う。

ていうか、一護がいらないなと思ったたら急に死覇装を着て斬魄刀を持って現れたときは驚いた。

それはもう。言葉で表せないくらい。

ほんと一護にはいつもいろいろ驚かされるよ。

雨竜

2062年 12月4日（水）

黒崎が試験に出ない！！

何だよ。

これじゃあ、僕が頑張る意味がないじゃないか！

テストはもちろん。

全て完璧。

結果が楽しみだ。

チャド

2062年

12月4日（水）

テストは結構いけてると思う。

まあ、合格だろうな。

一護がもしこの試験に出ていたら点数がどのくらいか知りたかった。

多分、95点ぐらいか。

実技はいいが筆記で間違えると思う。

皆が死神になるまで、あと3ヶ月。

期末テスト（後書き）

期末テストが終わりました！！！！

次回は、予告通り一月から二月をまた日記形式で行きたいなと思います。

卒業式は、日記ではありませんよ！

「あの日、あの時、あの場所に……」

という新しい小説を投稿しました！！

これからは二重投稿になってしますので、こちらとあちらを一日交替で書いていきたいと思うのでこれからは、（多分！）二日に一回の更新スピードだと思います。

（もう一度言いますが多分です。一日に両方一話ずつ投稿する可能性もあります）

良かったら読んでみてくださいね！！

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしております。

1月（前書き）

もうすぐです!!

第33話スタート!!

1月

どうしてウチの連中はどいつもこいつも…

自分が死にかけてる時におれの心配なんかしてんだよ…！

・・・自分のことでビビってる俺が・・・

バカみたいじゃねえかよ！

by 一護 第1話より

遊子

2062年 12月10日（火）

もうすぐ冬休み。

でも、冬休み中はどこにいればいいのかな？

此処にいるのかな？

夏梨

2062年 12月16日(月)

試験が終わって合格発表の日付がわかった。

1月13日(月)

この日までは試験の結果がわかんないのか。

やだな。

たつき

2062年 12月23日(月)

明日から冬休み。

此处にはクリスマスってあんのかな？

まあ、多分ないだろうな。

冬休み中はどうしようかな。

啓吾

2062年 12月25日(水)

今日、クリスマスじゃん！！！！

プレゼントがない所を見るとここにはクリスマスという習慣はないんだな。

予想は、してたけど。

つか、冬休み。

暇すぎなんだけど！！

水色

2062年 12月30日(月)

明日が大晦日。

一護が、

「明日、瀟霊廷の一番隊集合な。黒崎一護の仲間っていえば通してもらえるから。」

だとさ。暇だしいいけど。

一番隊に行くのか。

勇気いるな。

一護

2062年 12月31日(火)

今日は大晦日。

皆一番隊に来たけどびくびくしてんな。

当たり前だけど。

明日は、初日の出だな。

織姫

2063年 1月1日(水)

あけましておめでとう!!

皆で初日の出か。

黒崎君て意外とイベント好き?

初日の出、見に行くのに朝早くから山登りするなんて思わなかったな。

ちやつかり朽木さん来て阿散井君来て日番谷君来て乱菊さんが来た
ことに気付いたときは驚いたよ。

黒崎君で、顔広いな。

あああ！！黒崎君の顔が大きいんじゃないかって！！！！友達、多いつて
意味だから！！何言ってるの自分！

美紀

2063年 1月8日（水）

冬休み終わった ！！

5日後に試験の結果発表だ。

緊張してきた。

貴仁斗

2063年 1月13日（月）

試験の結果発表。

合格者の名前一覧に

黒崎遊子

黒崎夏梨

有沢竜貴

浅野啓吾

小島水色

井上織姫

石田雨竜

茶渡康虎

のおなじみのメンバーの下に

津ノ井遼

犀川美紀

神山貴仁斗

俺たちの名前が入っていた。

よっしゃあああああ!!!!!!

遼

2063年 1月21日(火)

試験にも合格して、あと2カ月でここも卒業。

長かったけど短かったな。

特に一護たちが編入してきてから。

勉強が楽しかったな!!

うわ、なんか卒業フラグみたい。

雨竜

2063年 1月30日(木)

あと1か月と少し。

これでここを卒業して死神になる。

そう言えば最近あの夢を見なくなった。

遊子ちゃんたちも見えてないだろう。

顔が生き生きとしてるから。

チャド

2063年 2月6日（水）

もうすぐ。

死神になれる前で。

でもこの隊に入るか決めなくては。

先生もそう言ってた。

皆はこの隊に入るんだ？

皆が死神になるまで、あと5週間。

1月（後書き）

カウントダウンの数が週刊単位になりました！！！！

もうすぐですねえ。

皆をどこの隊に入れるかはまで決めてません！！（汗）

早く決めなければ。

斬魄刀は決めてますよ。

あと、水色とチャドの斬魄刀の名前と水色の能力だけ決めてません。

（決まってるじゃないじゃん！！）

今回は卒業式ですかね。これも日記で。

2月はバレンタインがありますが端折ります。

ホワイトデーも端折ります。

いきなり卒業式です。

それまでとくに事件はない。という設定です。

始解はまだ誰も会得していません。

得意科目の整理は次回です。

そしてこの章は終了です。

次次回から、死神編です。

やっとここまで来ましたよ!!

(遠い目。)

誤文字の指摘。「チッ。しょうがない。」という感じの感想などお待ちしております。ああ、あとリクエストも!!!募集中です。

卒業式（前書き）

すいません。

やっぱ日記形式やめます。

最後だからきちんと書こうよと内なる自分が言ってきたんです。
（

！）

零崎 沫織様。大変申し訳ございません。

あと一話日記形式をやるなんていつてたくせにやらないなんて…。
すいません！！

卒業式

私がいつ・・・死神として、貴様を斬ると言った・・・

私が貴様を斬るのは・・・ただ・・・

貴様が：私の誇りに刃を向けたからだ

by 白哉 アニメ198話より

「ん。。。」

あたしは目を覚ました。

今日で、今日で学校を霊術院を卒業できる。

やっとここまで来た。

次は、どこの隊に入るのか。

もう、決まってるも同然な気がするけど。

「ああ！！夏梨ちゃんまた布団畳んでない！！最後なんだからキチンとやりなよ！」

「はいはい。相変わらず早起きだね遊子。」

「時計。見てみて。」

時計？

あたしは首をかしげた。

そんなに起きんの遅かったのかな？

時間は、

「8時23分。」

…。

「遊子！！織姫ちゃんとたつきちゃんは！！！」

「時計見たらすつとんで行ったよ！夏梨ちゃん早く支度して！！あと7分で卒業式だよ！！！」

「分かった！！！」

あたしは大声で返事をするに着替えずいぶん伸びた髪の毛をくしでときポニーテールにし食堂へ行った。

「待つて夏梨ちゃん！！ごはんならここにあるよ！！！」

後ろから遊子の声が聞こえた。

そういえば、遊子早起きして食堂の手伝いしていつも2人前ぐらいもらってくるんだった。

「それを早く言つてよ!!」

「良いから!!あつ!!お兄ちゃん!!」

あたしは部屋に駆け込みご飯、味噌汁、ししゃもをほとんどかまずに飲み込んだ。

一兄がいるつて。

今はそんなこと考えてる場合じゃない!

「夏梨ちゃん!ちゃんと噛んでね!!」

それを見かねてか。遊子が仁王立ちで言った。

「今はそんなこと言ってる場合じゃないんでしょ!!」

「まあね。」

「じゃ、行くよ!!」

「うん!!」

あたしと遊子は霊術院に向かって走って行った。

時間は8時25分。

大丈夫。間に合う。

あー！！瞬歩使いたい！！

俺達は7時半に起きた。

いつもならもつと早起きだけど先生がな。

最後だからってめっちゃ厳しい授業だった。

あれだぞ！！俺なんて。実験体つーかなんつーか。

皆の鬼道を一人一人受け止めんだぞ！！

まあ、皆一人ずつそれはやったけど。

俺の時にだれも容赦なしに撃つてくんだぜ！！

赤火砲、蒼火墜、双蓮蒼火墜もろもろ。

お返しに俺も思いつきり撃ったけどな。

結果は言わないでおこう。

取りあえず、今日俺たちはここを卒業する。

3月15日（金）

これで俺たちはもうこの学校に来ることはないだろう。

それより、どこの隊に入るかだ。

チャド、水色は九番隊。

石田も決まっていなかったな。

後啓吾も。

井上とたつき。そして夏梨が十番隊だろう。

たつきと夏梨は予想だ。

なんでかって。簡単なこと。

まず井上が確実に十番隊に入るだろう。それについてくたつきだ。

んでもって、冬獅郎と面識のあった夏梨。

知っている隊長のところにに入るだろう。

これが入ったら（井上・夏梨）乱菊さん喜びそうだ。

冬獅郎も苦勞が絶えない。

後決まっていなのが、石田、啓吾、俺、遊子か。

遊子と啓吾は俺についてくんな。絶対。

遊子はいいけど啓吾がやだな。

でも、隊を決めんのは明日でいいって先生が俺たちだけに言ってたから決めるのは明日でいいのだろう。

取りあえず卒業式。

時間は、8時20分。

こんなこと考えてたら時間経つの早いな。

準備は終わってる。

「準備終わったか？」

「もちろん。」

「おう！」

「ム。」

「…。」

石田は無視か。

「よし、行こう！！」

俺が欠けた声を合図に皆が歩き出した。

霊術院に向けて。

「おーい!!一兄!!」

「おにーちゃん!!」

「おう。夏梨。遊子。」

「一緒に行こう!」

遊子が笑顔で言った。

「いいぜ。でも急がなきゃな。」

「うん。…瞬歩使っちゃダメかな。」

「だめだろう。とにかく走るんだ。」

一護の声を合図にして皆が駆け出した。

そして、5分足らずで霊術院についた。

「やっと。」

夏梨がつぶやいた。

みんな、今夏梨と同じ気持ちだろう。

皆を護れる力が。手に入る。

もう、目前に迫ってきている死神という職業に皆は胸を躍らせた。

「行こう。」

一護が卒業式会場の扉を開けた。

「クラス順に座るんだって。行こう。一護。」

声が聞こえた。

この声は…。

「遼！！お前早いな。」

「一護たちが遅いんだよ。一組はこっち。二組はあっち。急いで。あと一分で始まる。」

「ほんとか！！」

一護は言うが早し。

いつの間にか椅子に座っていた。

「一兄。。。絶対今！瞬歩使った！！」

「早くしろ！始まるぞ！」

ムカ

夏梨の眉間にしわが寄った。

「一兄。あとで覚えてろよ。自分じゃ使うなとか言ってたくせに…」

夏梨から何かオーラが漂い始めた。

「夏梨ちゃん。お、抑えて抑えて。」

夏梨の異変に気付いた遊子は夏梨の肩に手を触れた。

「とにかく！！早く来て。織姫とたつきはもう来てる。美紀も貴仁斗もね。」

遊子、夏梨、啓吾、水色、石田、チャドは最低限の早歩きで席に着いた。

「これより。卒業式を始める！！」

山本元柳斎創設者、またの名を総隊長が開会の言葉を言った。

「卒業賞状授与。」

一組から順番に呼ばれた。

そしてすべてのクラスが終わり校長、山本元柳斎が話し出した。

「お主らが無事に卒業できたことをうれしく思う。護廷十三隊、隠

密機動、鬼道衆となり歴史に名を残すほどの者になってほしいの。
これにて、卒業式を終わる。」

終わった時間は10時ジャスト。

そんなに長く感じなかったな。

「お兄ちゃん!!」

「一兄!!」

「黒崎君!」

「一護!」

「なんだよお前らそろって。」

「一兄はこの隊に入るの!!」

夏梨が少し怒ってるような態度で一護に聞いた。

「まだ決めてねエ。でも決めんの明日だろ。そんなに勢い良く聞かれても答えらんねえよ。そう言うお前らはどうなんだ?」

「あたしは、十番隊。」

「あたしも。」

「私も。」

予想通り。

「遊子はどうだ？」

「まだ決めてないよ。」

「一護！」

一護は振り返りながら言った。

「何だ？ 遼。」

「此処から早く出ようよ。もう、誰もいないよ。」

「…」。そういうのはもっと早く言えよ。行くぞ遊子、夏梨。」

「「うん！」」

こうして、遊子、夏梨。一護に織姫。たつき、啓吾。水色にチャド。そして石田の学校生活は終わり、死神として動き出す。

それぞれの思いを持って。

「そろそろか。」

鏡を覗きながら一人の男がつぶやいた。

「待っている。黒崎一護。藍染の意志。今だ絶えず。」

鏡には楽しそうに笑い合っている一護たちの姿が映っていた。

卒業式（後書き）

おわっ

た

！！！！！！

霊術院篇が終わった

！！！！

はい。卒業式がよく分からないので少し端折りましたがようやくここまで来ました。

（経験なし）

最後の男は誰でしょう。

みなさんは知らないですよ。（オリキャラですから。）

藍染とか言っちゃって。危なそうな感じだだもれって感じです。

次回から新章！お楽しみに。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
のんびりとお待ちします。

隊（前書き）

話の冒頭に書く名台詞。

こういつちゃあ、だめかも知れませんが書くのめんどいんですよ。
なのでこの章から書くのをやめます。

新章スタート！！

ユニーク、10,000人突破！！！！
めでたいです！！

隊

「おい、ルキア。どこまで行くんだよ。」

一護達は、卒業式終了後どこからか現れたルキアについて行っている。

「とりあえず、十三番隊舎か。」

「なに、一人でぶつぶつ言ってんだよ。」

「静かについてこい。もう少しだ。」

ルキアは振り返りもせずには答えた。

「へいへい。」

「ついたぞ。」

突然ルキアが止まった。

「此处。」

「十三番隊だ。お前ら泊まるところがないだろう。今日はここに泊まれ。」

「サンキュー。」

一護たちはルキアについて隊舎に入った。

「ルキ姉。あたし達が入る隊舎って希望した隊舎とこに入れるんだよね。」

「まあな。」

取りあえずルキアの部屋に来た一護たちは寝転がったりお茶飲んだりそれぞれくつろいでいた。

「俺、どこ入ろうかな。」

「あれー。啓吾は檜佐木さんからお誘いがなかったの？」

「な、何だよ！まるでお前は誘いがあつたみたいに。」

「うん。あつたよ。」

「即答！！即答ですか！！もしかしてチャドも誘いがアッタの！！」

ガバッと寝ている体制から起き上がった啓吾が叫んだ。

「もちろん。」

「ガーン！！！！なんで、なんで俺は。いつもそついうのがないの！！！！」

ムカ

「言ってやろうか啓吾。その原因。」

「えっ！！何々！！お前その原因、わかnボエッ！！」

「お前のおしゃべりが鬱陶しんだよ！！」

たつきは啓吾のおなかを思いっきりふんずけた。

「あっそうだ。」

「ん。なんだルキア。」

「お前らにいくつか聞きたいことあるのだが。」

「なんだ。」

「お前らは自分がどの隊に入るか決めておるか？」

「俺は決めてねエ。」

「私は決まってる。」

「あたしも。」

「あたしも。」

「俺も。」

「僕も。」

「僕は決まってる。」

「私も決まってる。」

「……。」

「あたしも。」

「僕も。」

「俺も。」

上から、一護、織姫、たつき、夏梨、チャド、水色、石田、遊子現在答えることができない状態に陥っている啓吾、美紀、遼、貴仁斗だ。

「そうか。決まってるのは一護、遊子、石田、啓吾、美紀、遼、貴仁斗か。」

「ああ。」

「……。お前ら此処に入らないか？」

「此処って？」

「十三番隊。」

ブウウ

遊子は飲んでいたお茶を噴出した。

「だ、大丈夫か？遊子。」

「うん。大丈夫。お兄ちゃん。」

「それで。なぜ、僕たちを十三番隊に誘っているんだい。」

「…。人手が足りないから。」

「それほんとか。ルキア。」

「まあ、そうだ。で？」

「で？ってなんだ。」

「お前ら此処に入るか？」

「お前が上司はやだな。」

「此処は上司とかそんなものあまり関係ない。」

「入ればいいんだろ。入れば。」

「お兄ちゃんが入るなら私も入る！」

「俺も俺も！！」

「僕も。」

「あたしも。」

「俺も。」

「まあ良い。」

「そうか。」

ルキアはほっとしたような声を上げた。

「じゃ、明日。詳しいことを説明する。隊のことをな。それまでは自由行動。色々見学していつてくれ。」

「ああ。」

「じゃ、私は仕事があるから。」

「おう。」

ルキアはそう言い執務室に向かった。

そう言えばあいつ副隊長だったな。

遼たちはどこ行ったんだ？

さっきまでそこにいたのに。

こうして、皆の死神としての日々が幕を開ける。

隊（後書き）

新章です！！イヤッホ　　！！

皆をどこの隊に入れるのか。

結構悩みましたが、決まりました。

さあ、次は死神としての働きぶりと斬魄刀ですかね。

あつ、皆が来てる服はまだ霊術院の制服ですよ。

死覇装はもう、もらってますが着てないんですよ。

次回から死覇装です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちします。

斬魄刀の力（前書き）

昨日更新できませんでした。

パソコンの機能がおかしくなり何にもできない状態だったので
すいません。

気を取り直して、第36話スタート!!

斬魄刀の力

私が死神になって約1ヶ月。

そろそろこの仕事にも慣れてきた。

でも、物足りない。

虚を倒すとか、現世に行つてさまよう霊を魂送したい。

まだ新人だから私は無理だけど、お兄ちゃんが行つてる。

現世で虚は倒さず、ということまではやらないけど流魂街に出た巨
大虚メノスクランデ（大虚ではない）を倒したりしている。

いいな。

私はいつも羨ましかった。

でも、当然のこと。

お兄ちゃんがそう言う任務に就くのは。

でも、そんなある日私にも任務がやってくる。

「流魂街にて巨大虚発生。至急、死神を送るように。繰り返す。流魂街……」

そのメンバーになんと私も選ばれた。

正しくには、私、お兄ちゃん、先輩2名。十三番隊第七席・神流崎^{かななぎき}美栄^{みえ}さんと十三番隊第五席・伊南嘉威^{いなきあけ}さん。それと副隊長のルキアちゃん。

「遊子は初めての任務だな。頑張ってくれ。」

「はい！」

ルキアちゃんにそう言われ私はうれしくなった。

「北流魂街・80地区。更木か。」

神流崎さんがそうつぶやいたのが聞こえた。

「早く行こうぜ。ルキア。時間が…。」

「ああ。行くぞー!!」

ルキアちゃんの声とともに私たちは北流魂街へ向かった。

「グオオオオオオオオオオオ

!!!!!!」

物凄い叫び声とともに、虚の姿、そして霊圧を確認した。

「止まれ。」

ルキアちゃんが腕を横に伸ばしそう合図した。

虚がいる場所は何もない平凡な土地。

そこには、虚の能力であるであろう、変な植物が生えていた。

「これからあいつを倒す。切かかるときは順番にだ。私、一護、美栄、嘉威、最後に遊子。遊子はまだ斬魄刀を持ってなかったよな。」

「はい。」

私は少し不安になった。

斬魄刀がないのに虚は倒せるのだろうか。

第一、何故斬魄刀の無い私がこの任務に選ばれたのだろうか。

「ならお前は鬼道を撃て。撃つのは何でもいい。それでは、これより虚退治を行う。行くぞ!!」

ルキアちゃんが叫び、虚に切りかかった。

「ウオオオオオ

!!!!」

虚の周りにあった植物はどうやら伸縮自在でどんな方向にも飛んでくる。

虚はその動きを自分で操作し誰も己に触れられないようにバリケードを作る。つまり、植物＝能力。

もし相手がそのバリケードを崩したとしてもまた生える。

そして内側から自分で腕を伸ばし少しの隙間を開け自分の腕を出し相手を叩き潰す。

これがこの虚の戦い方。

最初ルキアちゃんが切りかかった時、植物のバリケードにはじかれた。

がこれがきっかけでルキアちゃんはこの虚の戦い方を理解し、ルキアちゃんはわざとバリケードを崩しバリケードに近づき虚の腕を誘い出した。

そして、出てきた手を切り落とした。

「グアアアアア

！！！」

虚は、苦しみの声を上げた。

立派な能力があるのにこの虚は話すことはできないのか。

「一護！！」

切り落としたすぐに瞬歩をしてお兄ちゃんに合図した。

「分かってるって！！月牙天衝！！」

お兄ちゃんは空を歩き虚の真上から月牙天衝を

さっき、一部

だけ崩れたバリケードの部分に向かって 撃った。

「グワアアアオオオオオ

!!

!!」

虚も反撃してきた。

バリケードを崩し バリケードの意味はないとも思ったのだ
ろうか 最初は神流崎さんに手を伸ばしたたきつけた。

「神流崎さん!!!」

私は叫んだ。

「大丈夫よ。」

瞬歩で逃げたようだ。

次に、虚が狙いを定めたのが私。

虚の大きく、そして太い腕が私に向かってくる。

「遊子!!」

「っ!遊子!!」

「遊子ちゃん!!」

「遊子!!」

ルキアちゃん、お兄ちゃん、神流崎さん、伊南さんの順で声が聞こえた。

「くそ！！月牙でグオオ！！」

お兄ちゃんが、月牙天衝を撃とうとしたら虚の能力である植物のツルにつかまった。

いつもなら簡単に避けられる攻撃なのに。

私が狙われたという事実がお兄ちゃんの冷静さを奪ってしまったんだろう。

「一護！！っ！！。舞え『袖白雪』次の舞・白漣！！」

ルキアちゃんが斬魄刀を開放した。

だが失敗。

虚には当たらず、逆に虚に体を吹き飛ばされた。

「副隊長！！」

「っ！ルキア！！」

この光景を見て、私は思った。

ああ。また、私は誰かに護られるのか。

体を張って助けようとしていた、一護・そしてルキアを見て遊子は

思った。

もう、護られたくないって思ってたのに。

私達が今度はお兄ちゃんを護ってやるって、夏梨ちゃんと約束したのに。

自分をつかんでいるツルと格闘している一護。そして吹き飛ばされたルキア。それに駆け寄っている神流崎・伊南を見た。

なんて、情けないんだろう。

なんで私は力もないのに”任務に就きたい”なんて思ったんだろう。

実現できるだけの力は私にはないのに。

力が。 欲しい ！

私は自分の唇をかんだ。

『なら、私を使つて。遊子。』

えっ！

突然私の心で声^{なか}がしたと思ったら私の目の前は自分の精神世界。永遠に広がる水の中にいた。

『あなたを使うって？』

『私の力をあなたが使って、そして、皆を護るの。自分の力で。』
はつきりと声が聞こえる。

『でも、あなたを使うってことでそれは、私の力じゃなくてあなたの力なんじゃないの？』

『ふふ。違うわよ。私はあなた自身なの。』

声の主の顔が見えてくる。

『それってどういう…。』

完璧に、顔が見えた。

お兄ちゃんと同じ髪の色をしていて長い。

瞳の色は若葉色。

白い帽子をかぶり、足が見えないほど長く薄い緑の花模様が描かれている着物を着ている。

『遊子。自分の力を信じて、前を見て。進んで行って。決して立ち止まってはだめ。』

そう言い、私に近づいてくる。

『引いたら次のチャンスは来ない。』

私は虚のほうへ体を向けた。

『ここで、止まったらあなたが死ぬ。』

私の自分の手が何かを握る感覚に包まれた。

『叫んで！私の名は……。』

「「花月^{かげつ}！！！」」

ドオオン！！

私の手から柄が出てきて刀の刀身が現れた。

お兄ちゃんの斬魄刀とそっくりな形。

「「月牙天衝！！！」」

私の手から斬魄刀が急に出てきたことにあっけにとられたのか虚は一瞬動きが鈍くなった。

私はそこに、月牙天衝を撃つたのだ。

花月とともに。

「……。できた……。お兄ちゃん！！！」

私はさっきまでツルと格闘していたお兄ちゃんに駆け寄った。

虚が消えたことによつて、虚の能力であるあの植物も消えたようだ。

「遊子、か。さっきのあれ撃つたの。」

突然、ツルに開放されしりもちをついているお兄ちゃんが呆気にとられて言った。

「えっ。まあ、そうだけど。」

「すげえな。」

お兄ちゃんはずいぶん驚いているのだろうか。

私は、不思議になってお兄ちゃんが否ルキアちゃん・神流崎さん・伊南さん・そしてお兄ちゃんが見ている方向に向かって振り向いた。

その瞬間、私は驚いた。

私が、月牙天衝を撃つたところは地面が抉り取られていてまるで大きな隕石が衝突しているような形になっていた。

私、こんなの撃つたんだ。

自分の力を信じられない。

私は自分の力に少し恐れを感じた。

でも、恐れを感じてはいけない。

自分には花月がついていて、お兄ちゃんがついていて、夏梨ちゃんがついていて。

私の周りには仲間がいっぱいいる。

これからもこの力で。

皆を。護れるように。

いっぱいいっぱい修業して。

そして強くなるんだ。

誰も、私の目の前から消させないように。

少し名残惜しく思いながら遊子は瞬歩で移動をしたルキアたちについて行った。

なぜ、流魂街にあれほどまで大きく、強く、能力を持ち、なぜか話せない虚がいたのだろうか。

後には少し疑問が残った。

「失敗か。」

男は人が立ち寄らない洞窟の中でつぶやいた。

「まあ、予想通りだ。あいつは藍染の実験体の生き残りだからな。それにしてもいいデータが取れた。これは使える。月牙天衝^{けいすけ}か。なあ、啓助。」

「そうですね。」

男が話しかけた相手は黒い、死覇装をまとい腰には刀を差していた。男が見ている鏡には遊子が撃った『月牙天衝』の地面が映っていた。

「もうすぐ。あと少しの辛抱だ。」

斬魄刀の力（後書き）

遊子が、斬魄刀を手に入れました！！！！
なんかうれしいです。

（ホッコリ）

斬魄刀を出す瞬間。

ほぼ一護と同じだ。

夏梨もそうかも。（汗）

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。
などなど、お待ちしております。

きっかけ（前書き）

少し更新遅れましたか？

今回は長めです。

第37話スタート！！

きっかけ

一週間ぐらい前。

遊子が斬魄刀を手に入れた。って、冬獅郎から聞いた。

冬獅郎は一兄から聞いたんだって。

斬魄刀。

いいな。

あたしもほしいな。

あの世界であの声の主の名前が聞こえればいいのに。

遊子はどうして、斬魄刀を手に入れることができたのだろうか。

あたしは冬獅郎から聞いた。

「自分が虚の標的になった時、黒崎が助けようとして虚の能力である植物のツルに捕まった。それを助けようとした朽木が虚にふつとばされたんだ。それを見た遊子が少し下をうつむいたと思ったたら斬魄刀が出てきたらしい。つまりきっかけが必要ってことだな。まあ、お前も頑張れ。」

らしい。

ま、遊子に聞けばいい話なんだけどさ。

取りあえずあたしは斬魄刀が皆を護る力が欲しくて欲しくてたまらなかつた。

普通の虚はあたしの鬼道で倒せるし、少し大きい虚だったら鬼道をまとった浅打で倒せる。

それでも斬魄刀が欲しかった。

欲しくて欲しくて。

遊子を少し恨めしくも思ってしまう。

そんなことを思っても自分の斬魄刀は自分の手元に出てこない。

自分が努力をしなくちゃならない。

”遊子が斬魄刀を手に入れた“このことで、新人たちは自らの斬魄刀を手に入れるためいろいろ努力をしている。

精神世界を見ていない新人がたくさんいる中、あたしや織姫ちゃん。そして、たつきちゃんは十番隊の新人の中でゆうつ精神世界を見ている。

あたしは空。織姫ちゃんは地。たつきちゃんは只白く色がない世界。

あたしたちの中で一番斬魄刀取得に近いのは織姫ちゃんだと思う。

なんたつて、何時も聞こえる声の主の顔・声はもう聞いて、見えている。

たが、やはり”きっかけ“が必要。

まだ名前が聞けてないらしい。

だけど、織姫ちゃんはよく実践に連れて行ってもらえる。

織姫ちゃんの場合、男の隊員が織姫ちゃんを護っちゃうし、もし虚に目をつけられても鬼道だけで倒してしまうほどの鬼道の天才。

それを訊くたんびに良いなあって思うから、”たまにはあたし達もつれていけ“って冬獅郎に駄々をこねた。そしたら、

「じゃ、今度な。」

だつて。

これであたし・たつきちゃん・織姫ちゃんは実践に連れて行ってもらえることになった。

そして、ある日。

また、北流魂街・80地区。更木で虚が発生した。

今度は巨大虚でなく大虚。メノスグランデ。

「行くぞ。お前ら。松本!!」

「はい!!」

「第三席・花宮隼^{はなみやしゅん}。第四席・大泉亜美奈^{おおいずみあみな}。来い。」

冬獅郎がメンバーを発表した。

「夏梨たちには悪いが今回は引いてもらう。」

あたしたち三人を見て行った。

「何でよ!!」

「当たり前だ!! 巨大虚ならまだしも大虚^{メノスケランデ}だぞ。斬魄刀も持たない新人なんか誰が連れて行くか。」

「でも!!」

「駄目なもんは駄目だ。あきらめろ。そんなに連れて行ってもらいたいんなら斬魄刀を手に入れる。そしたら次回は連れて行ってやる。お前ら!! 行くぞ!!」

冬獅郎は氷輪丸を背負い自分の部下を連れ瞬歩で消えた。

「やっぱり、斬魄刀を手に入れなきゃだめなのかな?」

織姫ちゃんがつぶやく。

斬魄刀。

この言葉はあたしに否あたし達に重くのしかかる。

「ここであきらめちゃダメ。絶対に斬魄刀を手に入れてやんなきゃ
！！！！」

たつきちゃんが気合の入った声で言う。

手に入れたい。

でもどうすれば手に入るのだろう。

一兄は「きっかけが必要。」と言う。

遊子は己の身がピンチで仲間のが自分を助けようとして逆にやられ
それを見て自分で護れないのが悔しくて。皆を護れる力が欲しくて
力が開花した。

「きっかけがあって開花した。」

つまりあたしたちが斬魄刀を手に入れるにはきっかけが必要。

という結論にたどり着く。

「やっぱし、きっかけ。」

あたしはつぶやいた。

”きっかけ“なんて簡単に言うけど実際に考えるとかなり難しい。

一番、最初に思うのは”仲間がピンチ“や”自分がピンチ“・”仲間を護れる力が欲しい”と強く願う時、”あたしたちが全員無事に

過ごしたい“などを感じる時や思う時だと思う。

取りあえず、誰かしらがピンチの時や自分を仲間を護れる力が欲しいと願、皆が無事に過ごせるようにしたいなどと思う時なのか。な。

冬獅郎たちはいないし暇だから流魂街らへんをブラつこ。

……… ちよつとだけなら。

メノスグランデ
大虚と冬獅郎達が戦つてゐる場所を。

見ても、良い、よ、ね。

「隊長!!」

「俺は大丈夫だ。」

ただいま、北流魂街・80地区。更木。

冬獅郎が虚にふつとばされた。

それを見た乱菊さんは叫ぶ。

ま、当然。

「ちつ。…。霜天に坐せ 氷輪丸!!」

冬獅郎が始解した。

結構離れているつもりなのに冷気が漂ってきた。

あそこにいたらどんだけ寒いんだろう。

「ワオ。うちの隊長始解してんジャン。つか、無傷。」

「ほんと。」

後ろで声がした。

「ちよっ、ちよっと。たつきちゃんに織姫ちゃん!？」

「おっす。」

「ども。」

「なんでここにいるの!?!」

あたしは驚いて聞いた。

霊圧を閉じて冬獅郎たちの戦いを見逃さないように。

「夏梨ちゃんが隊舎出てくの見たからついてきただけ。」

「うん。」

「そ、そう。…。」

あたしは次の言葉が思いつかなくて言葉を詰まらせた。

それを察してくれた織姫ちゃんが話をつなげてくれた。

「そう言えば。隊長って戦いは大体無傷なんだよね。」

「そうそう。すごいよねほんと。取りあえず黙って観察してよっかなんか楽しそう。」

「うん。」

あたしはたつきちゃんに同意して冬獅郎たちを見た。

今、始解をしているのは冬獅郎と第三席の花宮さん。

花宮さんの始解は刀が全体的に楕円形で真ん中に穴が開いている。

その中から炎が出る炎熱系。

冬獅郎が冰雪系なのに炎熱系の斬魄刀を始解しちゃ相性悪いんじゃないかな。

「松本!!」

「分かってます!!」

冬獅郎が乱菊さんに叫んだ。

何が分かってんだろっ。

「唸れ 灰猫!」

乱菊さんも始解した。

「行くぞ。」

「はい。」

ここからが本当の戦闘開始。…だと思っ。

冬獅郎と乱菊さんの絶妙なコンビネーションが虚の動きを封じ混乱させる。

そして、交互に斬り付け最後に冬獅郎が大虚を斬り、この戦いは終わった。

「終わったな。」

「はい。」

少しも息を乱すことなく虚を倒した冬獅郎たちは踊ってるようにも取れた。

虚を自らの手に取り、踊ってるように。

「おい。そこにいる夏梨・有沢・井上。」

ギク！

「なんで冬獅郎あたしたちのこと分かったのかな？」

「分かんない。でも、隊長だし。」

「ていうか、名前呼ばれただけ「出て来い。」

”出て来い“だって。どうするゝたつきちゃん。」

「いや、此処は出てかなくちゃ…。」

だからなんで冬獅郎はあたしたちの存在に気づいたんだよ!!

あたしは心の中で虚しく叫ぶ。

「しょうがない。出てく。」

「ちよつと!」

「夏梨ちゃん!」

ガサ

あたしは冬獅郎が見えるであろう位置に来た。

「お前ら。なんでついて来た。」

「…。なんとなく。」

「はあ? まあいい。言い訳は隊舎で聞く。後ろの二人!!」

「「はい!!」」

いきなり呼ばれたので驚いたのか二人は物凄い勢いで立ち上がった。

「お前らも来い。」

「はい！」

その時だった。

「キャ

！！」

「ウオオオオオオオオオ

！

！！！」

ドン

悲鳴とともに聞こえた雄叫び。

そして何かが落ちる音。

「大泉！！」

乱菊さんの叫び。

冬獅郎は急いで振り向く。

あたし達もあの叫びが聞こえた場所に目を向けた。

「「「「「！？」「「「「

あたしたちは驚き、固まった。

そこには倒したはずの大虚・メノスグランデが何匹もいた。
精々五匹ぐらいだろうか。

いつの間にか背後に忍び寄った大虚に大泉さんは吹き飛ばされたのだろう。

完全に油断してた。

「お前ら！！下がってろ！！」

「いやだ！！あたし達も戦う！！」

「そうよ！！みんながやられる様子を黙ってみるでも言うの！！」

「ああ。そうだ！！第一俺らは簡単にやられねえ。」

あたし達は冬獅郎の”下がれ“という言葉に反発した。

冬獅郎が言うのはもっともだけど、あたし達も戦いたい。

なんたつてあたし達は鬼道が大の得意だからだ。

「そうかもしれない。けど、もしも大泉さんみたいに吹き飛ばされたら誰が虚を倒すの？誰が、大泉さんを助けられるの？」

織姫ちゃんが言う。

「俺たちはやられねえ。そんな、簡単には、……。やられねえんだ！

「！！！！」

そう言う冬獅郎は何かを抱えているように見えた。

そりゃ、冬獅郎は隊長だ。隊のみんなの命を抱えているだろう。

だがそれよりも大きなものを抱えているように捉えられる。

前に起こった”藍染との戦い“のせいだろうか。

あたしが思案を巡らしている中、冬獅郎は虚に向かっていった。

「と　　しろ

！！！！！！」

あたしが叫んだ。

「そんなに戦いたきや三人がかりの鬼道で大虚をメノス一匹ぐらい倒せ！！」

「…分かった！！」

急にOKを出した冬獅郎に少し疑問を感じながらあたし達は一匹の大虚メノスに向かっていった。

「卍解。　大紅蓮氷輪丸！！！！」

冬獅郎が卍解した。

当たり前だがあたりにはさらに冷気が立ちこまれた。乱菊さんは、吹き飛ばされた大泉さんを抱え瞬歩で無事な場所に移動している。

ついでに花宮さんも。

「あつちは大丈夫だと思う。取りあえず。行こう!!」

「うん。」

あたしの掛け声で始まった、王族管轄の虚との戦い。

「完全詠唱で行くよ!」 散在する獣の骨 尖塔・紅晶・鋼鉄の車輪
動けば風 止まれば空 槍打つ音色が虚城に満ちる “破道の六十
三 雷吼炮!!”

あたしが叫んだ。

ヒット。

あたしの手から雷を帯びた爆砲が放たれた。

「グオオオオオオオ

!!!!」

虚にはあまり効いてないように見える。

「行くよ!!」 君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を
冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ “破道
の七十三 双蓮蒼火墜!!”

たつきちゃんが言った。

だが失敗。虚には当たんなかった。

「ごめん!!」

「良いよ!!」

「気にしないで。」

あたしたちが声をかける。

「私も行くよ。」君臨者よ 血肉の仮面・万象・羽搏き・ヒトの名を冠す者よ 蒼火の壁に双蓮を刻む 大火の淵を遠天にて待つ“破道の七十三 双蓮蒼火墜!!”

今度はヒットした。

だが、大虚^{メノス}も負けじと反撃を開始する。

織姫ちゃんに向かって足を伸ばし踏みつけようとしている。

織姫ちゃんはそれをよけたが予想以上にスピードが速く、腕に深い傷を負った。

「大丈夫!織姫!!」

「だ、大丈夫。」

だが、大丈夫という織姫ちゃんを見てもあたし達は織姫ちゃんをリタイアさせたほうがいいと感じていた。

織姫ちゃんの手からはあり得ないほどの血が出ていた。

「織姫。休んでなよ。」

「大、丈夫。」

「駄目。休んで。織姫ちゃん。お願い。」

あたし・たつきちゃんは織姫ちゃんを休ませようとした。

今戦っているのは王族管轄の虚。大虚・メノスグランデ。

それに対しあたし達は名もない斬魄刀・浅打を腰に差す新人隊員。

それに、深い傷を負っている織姫ちゃんは言っちゃ悪いけど足手まといだろう。

「お願い。休んで。織姫。」

たつきちゃんの悲痛な声が聞こえる。

織姫ちゃんの腕から出る血は地面を緋色に染めている。

「大丈夫。……。大丈夫。……。」

つぶやきながら織姫ちゃんは何も持っていない手で刀を握り構える姿勢を取った。

その時だった。

織姫ちゃんが握りしめる手からは刀の柄らしきものが見えた。

「盾舜六花!!!」

きっかけ（後書き）

いやー。やっとここまで来ましたよ。

ほんとはこの回で三人の斬魄刀が出てくる予定だったんですけど長くなってしまったので二回に分けることにしました。

目線は夏梨です。

誤文字の指摘、感想、こんな話を書いてほしいというリクエスト。などなどお待ちしてます。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8579x/>

A new adventure and bonds

2011年11月20日00時08分発行